始

日本刀物語序

其の鋒鋩の鋭利で其の切味の神快なる世界の刀劍中我が日本刀に若くものはない、歐州で一番の軍刀はセビラ刀であるが脆弱で物の數に足らぬ、支那の青龍刀は寧ろ兒戯である元來支那は昔、秦以前は皆銅器で千將莫邪も銅劍であつた燕の荆軻が秦宮で始皇帝を刺した匕首も銅でその十歩の中秦帝を逸したも刀が利で無かつた爲である。

我が日本は昔より武勇の國で武士は物部即ち「モノノフ」と稱し刀劍を撰び多く沙鐵を打ちて之を作り、その堅靱鋭利及ぶものが無い專門刀鍛治としては已に一千二百年の昔文武帝の頃大原眞守といふ名工がある、爾來武伎の進むに從ひ鍛刀の術も亦進み源平の頃には已に夥多の名刀を出たし鎌倉の世後鳥羽上皇の粟田口鍛冶に至り始めて日本刀全國に流布し其後其の風を聞き、其の流を汲み出つるもの多く遂には吉光、正宗、義弘の如き日本三傑の現はることゝなつた

我が邦人は昔より剛毅武悍にして難に當り死を怕れず開國以來一度も外國の侮を受けぬ、又勇氣に富みたる上かゝる武器を有し身を防ぎ國を護る爲なるに由らずんばあらず、弘安役蒙古人已に鐵砲を有す而して我は只三尺刀を以て一擊之を殲す室町の季倭冠支那朝鮮の沿岸を抄掠す當時我が國人多く二刀又三刀を佩ぶ二刀を用ゆるものは左右之を揮ふ胡蝶の羽を搖かす如し明人胡蝶軍と稱し恐れて之を避け韓人も亦日本人の双刀を揮ふ左右の切尖相離ること一丈にして飛騰上下すれば十歩の中、唯白双を見て人を見ずと恐れて書に記してある益日本人と日本刀相合し一種の日本魂を形成すこれ日本の三千年東海に屹立し金甌無缺の國体を爲した所以である

小島沐冠人君文學に長じ操觚界の雄將たり、平素刀劍を愛し且其の歴史に關する名刀談に通じ博渉洩らすことなし頃ろ其の概要を編し日本刀物語と題し世に刊行す之を讀めば叙事明快に刀劍專門の習を脱し能く素人をしてその劍德の威靈を領得せしむ多大なりとす。彼の正宗、村正、孫六、青江下坂等民間戯曲に傳はる名器の由來もこれにより一見掌に指す如く明かなり、今や國体闡明人心振興を高唱する時此の種の著書は確かに日本武德の由來を領得して青年學生は固より一般國民の修養を資くる大なる言ふをまたず此に一言を述べ推賛の意を明かにす

昭和十二年三月陸軍記念日

寺石正路識

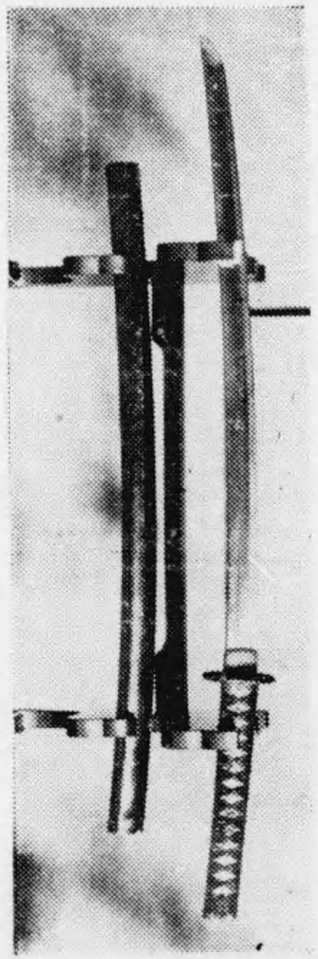
時230
535

日本刀物語

目次

山内家の兼元　一
山伏が持つ名刀　三
宮本武藏の安綱　六
川中島の一騎討ち　一一
桶狹間の疾風迅雷　一六
高田馬場の決鬪　一九
一文字則宗の搜査　二五
二字國俊物語　二九
蓮池城下の血煙　三四
風雲兒山中鹿之助　三九
石田三成の愛刀　四二
一刀流綺談　五一
片倉小十郎の肌小袖　五六
千子村正の業物　五九
義士原惣右衞門　六四
平家落武者と椿山嘶　六七
大阪城壕中の吉光　七六
烈女勝子の仇討　八〇
新納武藏守の愛刀　八六
春日局强盜を切る　九一
業物關の兼常　九四
武田信玄秘藏刀　九八
畠山重忠の大太刀　一〇〇
池田勝入信輝の刀　一〇三
水戸黃門の手討ち　一〇六
楠正成の佩刀　一〇九
備前の長義父子　一一二
狼村正の話　一一八
眞田信綱の剛刀　一二三

應永備前の三光　一二六
黑田長政と栗山大膳　一二八
奥州の文壽　一三一
源義經の佩刀　一三三
靜御前の薙刀　一三六
新田義貞の鬼丸　一三九
伊達政宗の燭臺切り　一四四
長曾我部信親の武勇　一四八
福島家勇士の遺刀　一五一
伊賀上野の仇討　一五三
任俠深見重左　一五七
汗血千里の駒　一五九
新刀の横綱虎徹　一六三
鐵舟と武藏正宗　一六五
秘傳湯加減物語　一六八
劍影片々　一七一



刀用愛の生先馬龍本坂
（藏史女技菊上閥）

切先
ふくら
鉈子（ボウシ）
返り
小鎬（シノギ）
横手
三ツ角
鎬
物打
鎬地
焼刃
棟
ヤスリ
目釘穴
中心（ナカゴ）
中心尻

山内家の兼元

二代忠義公秘藏

誰れであつたか、山内二代の藩主忠義公は剛毅濶達の人であつたので、徳川家が忌み嫌ふ村正の刀を何時も佩してゐて平氣であつた。荒倉山の猪狩りの時に一獵師が、忠義公が鐵砲で撃たんと構へてゐる手負猪を、殿様危ぶなし、と見て取つてお先きへズドンと一發で仕留めた。忠義公大怒りで『參いるぞ』と、刀の柄へ手をかけたのを、老いたる獵師、何んと間違へてか、『忝なう存じます』頂戴仕りますとやつて兩手を差し出した　呆氣に取られて忠義公は斬る事も出來ず、その愛用の村正を遣はした。といふ話をして呉れた人があつたが、此の話、一寸大衆讀物にでもなりさうなので調べて見ると、荒倉山の狩場の一件は本當だが、刀が間違つてゐるらしい。忠義公は松平隱岐守定勝の女で家廉の養女である方を内室にして松平の稱號を許されてゐた人であるから、英邁の殿様ではあつたが、徳川家へは、その遠慮といふものがある。だから村正の刀を持つてゐたのかも知れないけれど徳川家の忌み嫌ふ村正を常に愛用してゐたとは受け取りにくい。忠義公が愛用して常に放さなかつたのは關の孫六兼元で「かねもと」と、假名の銘のあるものだつたさうだ。家臣が氣に入ら

ぬことでもいふかするかすると、『身が孫六をまいるぞ、』叱りつけ反抗でもせうものなら拔打ちにバッサリこやる。だから、『身が孫六をまいるぞ』の一聲には皆が縮み上つたといふことである。荒倉山の獵師にも、怒つて『身が孫六をまいるぞ』と言つたのであらう。が、其の孫六は山内家に傳はつたのだから獵師には他の差替の刀でも與へたであらう。忠義公秘藏の刀に今一つ關兼常がある。「松平土佐守忠義」と金象眼したもので、秀吉の軍師竹中半兵衛が身を放さなかつた大業物だといふ半兵衛病死前に毛利勝永に讓つた勝永は關ヶ原の戰に敗れて山内家へ御預けになつてゐた人で、後大阪城へ入城する時に、忠義公に多年厚遇の禮としてそれを贈つた。此の刀は今も山内家にあるといふ事だ。

大名なぞは、家來を手打ちにする位の事だからさんな刀でもよさそうなものだがさうはいかぬ。皆名刀々々と名刀を求めてゐる、それが自慢でもあり、又泰平とは言へ矢張り魂として刀への愛着があつた。『家傳來國俊』と芝居でもやるやうに武士が名刀への愛着は今日吾々の想像する以上のものであつたらしい。況んや大名に於ておやで、あるが、名刀は求めるが、所謂劍術なるものは大抵の大名は殿樣藝の範圍を出ない。この階級で眞に武藝の奥儀に達して居たのは足利將軍義輝と伊勢の北畠具教、德川家康位だといふことだ　義輝具教共に塚原卜傳の弟子で免許皆傳の腕前、家康は海道一の馬術家と言はれたほど馬が上手であつた外に劍は新當流の免許皆傳であつたさうな、家康愛用の刀は今川義元の佩して居た左文字、菖蒲正宗、三池傳太等で三池傳太は遺言により、家康死後久能山に納められたものださうだから今でもあるだらう

秀吉の劍道はごれ位の程度のものであつたか判らないが、關白の威力で隨分名刀を蒐集して居たらしい。慶長二年八月伏見の城で薨去後遺言に依つてそれ〴〵大名に與へたものが、名刀ばかりであつたといふ事で、大原眞守、長曾我部恃從へ。とあつて、長曾我部は安綱の子で父に劣らぬ名人と言はれた眞守を貰つてゐる。斯うした由緒ある名刀でもが土佐に遺つてゐて、懷德館に陳列されるやうだと愛劍の國土佐も自慢が出來るが、名物牒に乘るものは山内家にあつて、それも本邸が東京と來て居るのでさうした大物は九段の遊就館へでも行かなければ見られない。だが、民間にも、名物牒に乘るほどのものはなくてもいろ〳〵面白いものがあるらしい。大西正幹氏秘藏の肥前の二代なごは谷將軍遺愛の名刀で恐らく肥前の二代としては匹敵するものがなからうと言はれてゐる。

山伏が持つ名刀

眞田幸村の正宗、貞宗

刀劍といふと、すぐ素人でも正宗を思ふ。正宗は日本刀劍鍛治の横綱格として傳へられてゐるが

正宗に疑問を持つ人は

正宗が盛んな時は丁度北條高時が亡んで足利尊氏勃興となり、元弘建武の戰亂となつた時代乃ち正和元年には五十歳、元享二年には六十歳　元弘二年には七十歳で、刀劍鍛治として老熟に入つたころだ。で、此の戰國時代にあつて、正宗果して名人ならば此の時代の武將は爭ふて正宗を佩刀としてゐなければならぬ。然るに、他の名工の名が太平記などにあるのに正宗の名の出てゐないのは疑問である

なぜ言つてゐる。それから

足利三代義滿の時宇津宮三河入道といふ當時の鑑定家が義滿の命を受けて名匠六十人を選定してゐるが相州物は一本も此の中へ這入つてゐない。そればかりでなく、慶長以前の名匠に正宗を佩刀としてゐたものがないのも、正宗へ持つ疑問である

と、言つてゐる人もある。此の正宗論は一朝一夕には論議が出來ないであらうが正宗疑問說は、相當根據のあるもので大に參考になると思ふ。然し、太閤時代から德川時代にかけては盛んに正宗の名が出てゐるさうで是等は研究家の興味ある問題だと思ふ。ところが茲に正宗に關して面白い話がある。

慶長十九年の四月の初め、大阪城内の大野治長邸へ訪つれた一人の山伏があつた。玄關へ差し懸つて形の如く

『頼まう』

家來の者が出て見ると柿染の衣を着た一人の山伏が、兎も角も治長に面會といふので、折柄主人は不在であつたが、主人への用といふので座敷へ案内した。家來五六人の者が徒然まぎれに刀の鑑定をしてゐる、一人が山伏に問ふた、

『御坊はどちらから參られたか』

『拙僧は紀州から罷り越したもので御座る』

『唯今、主人は登城中、追つ付け歸らるゝだらうから其の邊に御控へあつてよからう』

と隅の方へ招じたが、

『御坊の差してをらるゝ刀をお貸しあれ、吾々鑑定をして遣はさう』

といふ、山伏はニツコと笑つて素直に大小を差し出した。家來共が其所でそれを引き抜いて見たが一向に作が判らない、柄を拔いて見ると吃驚、大刀は正宗在銘、脇差は貞宗在銘家來連アッといつて山伏の顏をキョロ〳〵と眺めてゐる、そこへ治長が戻つてきた、山伏を見ると

『これは〳〵左衞門佐殿、よくこそ御出下された上樣にも殊の外の御待ちかね、さあどうぞ』

叮寧に書院へ案内をする、家來連中いよ〳〵吃驚し、一体何者だらうと囁き合つてゐる。で、主人

に聞いて見ることになり、一人がオヅ〳〵伺ふて見ると、眞田左衛門佐幸村。その名を聞いて二度吃驚したといふことである。

幸村といふ人は、智勇兼備の大將で、いろ〳〵の物語りを持つてゐる人であるが頗る酒脫なこころがあつて其後大野の邸を訪ふたときに集まつてゐる家來を見て

『刀の目利き、チトト達されたか』

と、戯れ、非常に人々から親しまれ、尊敬された。と、いふ話が、ものの本に載つてゐた。

今一つは正宗と銘を切るものが十三人あつたといふことである。例の相州住正宗の外に、備前三郎の子の正宗、其の子の正宗、京の達摩正宗、同じく子の二代目、三原の正宗、同永德ごろの正宗同文明ごろの正宗武州下原の正宗、同じく大永ごろの正宗、同じく慶長の土佐守正宗、相州山內の正宗、金房一派の正宗。だから、正宗と、あつても直ちに五郎入道正宗と斷定は出來ないと、これも書物が教へてゐる。

宮本武藏の安綱

辻斬りに遇つた武藏

大同年間、華表反にして反り深く踏張り強し、重ね良く、身巾廣く、鎬高く鎬巾挾く、切先詰り、樋造り多し、刄文は小亂灣亂最も多く、直ほつれあり、沸最も多くつき、稻妻、金筋烈しく、刄の表面に肌現はれ匂深く足入りて古作中最も華やかなるものなり、地鐵、肌泡によく錬れて細く大板目、地沸付きて働き遺憾なし。

なぎ刀劍家は賞めてゐる。例の源頼光が大江山で酒呑童子を切つた太刀は此の安綱だ。在銘二尺六寸六分『童子切』の名があり、松平越後守の所藏するこころのものであつた。作州津山十萬石、越前家の嫡家である。足利家に傳はつて、織田、豐臣、德川と傳はり、後松平家の家寶となつたといふ說、、京都將軍家の評定衆某、童子切りを所藏し後北國に下りて越後守に仕へそして松平家のものとなつたといふ說とがあるといふ。

安綱にはまだ多く世に知られた武勇傳を持つてゐる、宮本武藏の愛刀であつたからだ。此の武藏と安綱との武勇傳は中々面白い。慶長十七年の四月、豐前船島(後巖流島ともいふ)で佐々木小次郎と決鬪をした時の宮本武藏は、受劍安綱を用ひず、擂り削つて木刀となし、それで立ち合つてゐる試合の前に何んでも小次郎愛刀の寸法を調べ聞いて、それよりも一二寸長く木刀を作つたといふことである。

此の試合は有名なものであるから、此所にくだ〳〵しく書く必要もなからうが、實に目にも止らぬ早業で、武藏の鉢卷が二つにハラリと落ちたかと思ふと　それより一息早く小次郎が倒れてゐた。

こいふ間髪を入れざる際ごい勝負だつた。

關ヶ原の戰後、武者修業に出た武藏は、京都で有名な吉岡憲法の伜清十郎と試合をして之れを倒し兄の仇打ちだこて試合を申込んだ清十郎の弟傳七郎をやつ付けてゐるが、此の試合は兩度共木劍で立ち合つてゐる。兄弟二人共に負けてしまつた吉岡家一門は、無念遺る方なく、更に清十郎の子又七郎を押し立て、、父と叔父の無念を晴らさんと試合を申込んだのである。

勿論武藏はすぐ快諾。場所は洛北一乘寺藪の郷、下り松のほこりこ決めた。今度は流石に武藏の敎へを受けてゐる門人連が動搖した、こいふのは又七郎の腕前恐るゝに足らずとしても、京の名家として門人の多い吉岡家である、その門人が、清十郎、傳七郎の敗北を、師の仇こして又七郎を助けて武藏を討たんとする氣配があつたからだ。門人が強いて同行を、こいふのを堅く斥けて、其の日何時になく早朝から起きて約束の場所へ急いだ。

武藏はこれまで試合の時に約束の時間を違へ、故意と遲れて相手方を焦慮さすの戰法を取つてゐる清十郎の時もさうだつた、傳七郎の時もさうだつた。今度は反對に人の意表に出て相手を混亂させやうこした。果して又七郎は、數十人の門弟に圍まれ、提灯をつけてやつて來たが

『ごうせ武藏はいつものやうに遲れて來るだらう、マア休息せうか』

と、言ひ合つてゐるところへイキナリ飛び出した武藏、愛刀安綱三尺八分の大刀を拔き放つこ

『又七郎か、待ちかねてゐたぞ』

斯う叫んだ聲が明け方の空に響いたが、時を移さず大勢の中へ切り入つた。

不意であるごうせ遲れて來るであらうと思つた武藏が不意に飛び出したばかりかすでに安綱は拔き放たれてゐる、又七郎、あわてゝ拔き合はさうとしたが、眞ッ二つになつてごうと倒れた　又七郎、アッこもわツこも聲を立てる間もなかつたといふのだから物凄い早業だ、驚いた門人パッこ四方に散つたが、流石に我に返へるこ一齊に拔きつれて武藏　懸つた。或は、半弓を持つ者が武藏を射やうこした。此の時武藏、殘る小刀を拔いて二刀で身構へた。二刀流の元祖二刀を、使つたのは此の時が始めてだといふことである。其他の試合で武藏は二刀を使はなかつたといふここである。

武藏の爲めに斬り立てられた門人等は漸くに散つてしまつた。流石に、武藏も、安綱が吸つた血を振つてホツト安堵の一こ息。かすり創一つも受けずに悠々こ歸つて來る途中、安否を氣遣つて尋ねて來る門弟等とバッタリ出逢つた。武藏の無事を見て門弟等は大喜びであつた。

それから後。

武藏は伊賀國で宍戸某こいふ鎖鎌の名人と屋外で勝負をしてゐる。例の分銅がついてゐる鎖鎌だ。

いうくゝと振り廻はして、それが當つたら腦天が碎けるこいふ物凄い、講談によくあるやつ、武藏は此の時得意の木刀を用ひず、例の愛刀安綱をずらりこ拔いて立ち向つた。冷靜水の如き武藏の沈

着振り。

虚々實々、時。

分銅が猛烈な勢で武藏の顏をかすめて流れた。

『えいつ』

裂帛の叫び、その武藏の聲が、見物の腸に泌み込むやうに響いた時には、鎖鎌の勇士はもう大地に立つてゐなかつた。安綱の切先から血煙が立つてゐた、勇士は左の肩口から袈裟がけに斬り割られてゐたのであつた。

此の安綱は、武藏が細川公に仕へて後、家老の澤村宇右衞門に贈つた。

武藏が大阪にゐた頃、ある夜辻斬に出遇つた。

武藏が行き過ぎたのを背後より「エイツ」と斬り付けた。

「アハ……何をするのだ」

と、からと〳〵笑つてゐる武藏の手には、ソノ白刃を持つた手がすでに掴まれてゐたのである。

下總國住人、河内守永國、之れ迄、幾多の注文で刀を造つたが、自分の刀の斬れ味が判らない、一度誠して見て、と、引つ懸つたのが人もあらうに宮本武藏。

武藏は、心得違いだが、志は奇拔だと寓居に連れて來て其の刀を見ると中々の業物だ、で、其の刀を賞し、不心得を懇々ときとしたので、永國も大に感激し、乞ふて門人となつた。

永國は、武藏が熊本に落ちつくと、はる〳〵訪ねて、其所に永住することになつたといふ話、之れも武藏の一挿話である。

川中島の一騎討ち

上杉謙信の大兼光

○備前兼光　正宗十哲の一人。景光の子、景光に似たり、正宗門に入りてより寸詰り、無反りに近く、重ね薄く、身巾廣し、鎬巾狹く庵高く眞の棟多く、切先延び、中切先、大切先あり、總じて、ふくらかれ、鯰切先になるもの多く、平の肉少なく棒樋、二筋樋多く……小五の目或は直ぐに小亂れにして沸つき小模樣もの多し、正宗門人となりてより一体に勢ありて烈しく大五の目、鋸刃、大灣、廣直刃等多く、匂强くして足入り亂の腰開くもの多く、締り心になり刃中華やかならずして働きあり、金筋、稻妻等交る

地鐵、肌、大板目、総じてうつり心あり、棟燒、湯走りて地沸付き、地けい交り働き十分なり。

と、「日本刀」にあゐ。之れを見ただけでも業物だと思ふ。そして　武將の多くが好んで兼光を佩ひてゐたところを見ても、日本刀中の尤物であることが證據だてられる。

兼光を愛用して佩てゐた人々を列記して見ゐ。

上杉　謙信、　加藤　嘉明、　山崎　闇齋、　福島　正則、　武田　信虎、　淺井　長政、
立花　宗茂、　直江山城守、　大岡越前守、　山内　忠義、　百々内藏介、　浮田左馬介、

調べたらまだ兼光組が多からうが、僕等の狹い見聞では判らぬ、尤も豊太閤、太郎坊兼光、足利尊氏の兜割り兼光の話は何かの本で見たことがあるが、秀吉や尊氏になると、山と積む名刀だらけだから兼光も愛用の一つ、といふことにならう。其所で此の兼光が鞘走つたもの、うちで一番有名なのは川中島に於ける上杉謙信の活躍だ。その兼光の勇躍を書く前に、一体全体日本の武將達がどんな刀を愛用してゐたかを、ついでにもの、本から拔き出して見やう

楠　正成(備前景光)　　平　宗盛(備前友成)　　能登守教經(友成)
惡七兵衛景清(備前助平)　　源　頼光(安綱)　　畠山　重忠(備前高平)
北條　泰時(粟田口國綱)　　武田　信玄(三日月正宗)　　眞田　幸村(字多國次)
柴田　勝家(志津兼氏)　　薄田　隼人(備前吉景)　　加藤　清正(鄕義弘)
今川　義元(左文字)　　足利　尊氏(一文字則宗)　　織田　信長(備前光忠)
豐臣　秀吉(藤四郎吉光)　　豐臣　秀頼(粟田口吉光)　　徳川　家康(正宗　左文字)
武田　勝頼(鄕義弘)　　山中鹿之助(宗近、來國行)　　伊達　正宗(備前光忠)
細川　幽齋(包永)　　池田　信輝(關兼定)　　竹中半兵衛(關兼常)
山内　一豐(關兼常)　　蒲生　氏鄕(康光)　　石田　三成(正宗)
新井　白石(粟田口國清)　　片倉小十郎(大原眞守)　　稻葉石見守(虎徹)
水戸　烈公(友成)

信長、秀吉、家康、は非常に刀劍好きで、良い刀は片つ端から召し上げたから隨分名刀が集まつたらしい、秀吉薨去の際　遺品分けにした各大名への刀劍だけでも實に素晴らしいものばかりであつたといふ事だ。足利家も十三代も續いたので名刀が夥しかつたであらうといふ篠作則宗、三池傳太粟田口國綱の三刀は、足利家の重寶であつたさうだ。信長、愛刀家で、光忠を好み、二十五振りも集めたといふ話、外に愛刀大般若長光、不動國行、石切　文字、籠手切正宗、しのぎ藤四郎なぎの名刀があつた。家康は愛刀家といふ外非常にすぐれた鑑識眼をもつてゐたと言はれてゐる。關ヶ原には菖蒲正宗、大阪陣の時には左文字を佩してゐたといふことだ。

偖て、閑話休題。元の兼光へ話を戻し、上杉謙信の川中島奮戰を眺めて見やう、余りにも有名なことではあるが——。

日本史を見るに、武田、上杉の戰は、上田ヶ原に戰ふこと六回、川中島に於いて戰ふこと五回、勝敗遂に決せず、兵を構ふこと實に十有八年の長きに亘つてゐる。

信玄の智某、謙信の剛勇、勝ち、敗れ、相戰ふ中にかの川中島に於ける兩雄一騎計ちの場面こそ、戰國史中の華である。

……既にして謙信、信玄の麾下と相逢ふ、賴山陽は詠じていふ、十年一劍を磨く、と、其の十年劍を磨くは何んの爲ぞ、今や相逢はんとして逢ふを得ざりし信玄は目のあたりにゐる、謙信の心氣烈烈として燃ゆるやうだ。

猛虎一吼して草、ためになびく、馬上の謙信、靑竹を打ち振り〳〵

スハ、懸れ、〳〵

と叱咤する、越の軍勢、一齊に發砲し、硝煙の中より突貫して進む、

信玄の麾下は剛勇の士が多い、泰然自若して動かない。越軍の兵突貫し來るや、甲斐の軍勢亦一齊射擊を行ふ、勝敗決せず、越將宇佐美定行一千騎を率ひて甲軍の眞中に突擊する、甲軍防き得ずして退く。

信玄時に八幡原の北部にあり、謙信親しく雌雄を決せんと、敵兵を蹴散らして唯だ一騎信玄に迫るこの一節こそ戰國史中花の中の花だ。信玄、謙信を見て

推參なり、小童奴

と叱す、謙信、それが信玄なるを早くも見て取り

卑怯物、そこ退くな

振　冠つたのは、謙信秘藏の備前兼光、謙信ケン然

エイ、エイ、エイ

猛然　兼光を揮つて信玄に斬りつくること三度び。

信玄胡牀に倚りて動かず、軍扇を擧げて防ぐ。謙信意氣軒昂　軍扇の柄を伐り肩先に傷つく、飮富虎昌、近きにあり、急を見て馳せより、槍を揮つて謙信を突く、甲堅くくして通らず、更に馬を突けく驚いた馬は一さんに逸しさつてしまつた。

流星光底長蛇逸をして謙信の遺恨やる方なし、である。が何んといつても、信玄ほどの者へ斬りつた謙信の兼光だ長蛇を逸した憾はあつても兼光の誇りは、謙信の武勇と共に永久に殘るものであるこの兼光　元は越後の農民のものであつた。ある時赤小豆を袋に入れて肩に掛け歸る途中、袋がほころびて小豆が一粒つつこぼれたが、不思議や刀の鞘やに當つてそれが二つに割れる。怪しんで刀を見ると鞘が割れて僅かに刀身が出てゐるのへ當つて割れるのであつた。之れが評判となつたのを其の領主竹股三河守が所望して買ひ取り謙信に參らせたものであつた。世に竹股兼光といふのが此

の兼光で川中島合戰のある時、甲斐の望月平太夫、鐵砲をもつて近寄り狙ひをつけてゐたのを謙信早くも見け馬を乘り寄せて一刀に軒り伏せたが、平太夫、物具かけて斬られ、持つたる鐵砲の筒二の見通しの上より切り放してあつたので、甲斐の兵いかなる刀で、斯樣に斬つたのかと評判であつたといふ。

謙信はなか〳〵の愛刀家で、栗田口國吉、備前長光、豐後行平、一文字則宗のの合作、貞宗、長谷部國重、守家などがあつた。

桶狹間の疾風迅雷

信長が分捕つた左文字

△左　左衛門三郎、法名慶源

實阿の子、元應頃正宗十哲の一人にして最も上位にあり、其名高く名物多し

造り込み恰好相傳上位の姿にして反り淺く、重ねの薄く身巾廣く鎬高く鎬巾狹く庵高く眞の棟多く棟の方薄きもあり、切先延び大切先もあり、ふくらかかる菖蒲造りを好みて造り中脇差小脇差短刀もあり、先反り心多し短刀に筍反り小振にして重ね少しく付くものあり、肉取り殊に良く樋彫物あり

刃文働き、十哲中最も上手にして正宗同樣なり、總じて巾廣く、燒沸最も荒く亂れの頭尖りて逆心のものもあり、喰ひ下る心にもなる、二重刃とも見らるべし、砂流し荒く、中に丸みを持ちたる强き五の目、亂れ交り又玉燒强く交るも品位下らず匂ひ最も深く足入り險しく刃先までぬけ出て金筋稻妻其の他の働き最も烈しくいかつき心になる、正宗に劣らざる作柄なり。折に潤心を持ち燒き出しの刃最も廣し、直刃上品なるものありて小沸つき、刃中の働き烈しく刃境刃十分に働きたるあり地鐵肌よく錬れて細く大模樣の板目にして內に澄み心の肌交り地沸强く、地けい交り申分なし湯走飛燒棟燒も見る。

日本刀の著者は左樣に激賞してゐる、『左』とは筑州の住、左文字の事だ。

此左文字に義元左文字といふのがある、今川義元の佩びてゐたものだ。

信長の桶狹間の奇襲は謙信の川中島と共に歷史的な有名な合戰である。

人生僅かに五十年、夢まぼろしの如なり

と歌ひつつ舞ひつつ信長が決死的なシーンを見せて義元に迫つた痛快事は日本歷史を讀むものをして血を沸かしむるものだ。此の時信長に從ふもの僅かに十數騎、途中漸くにして追ひついたといふのだから短兵急の有樣が窺はれる。

茶臼山一陣取つて勝利を喜んで酒宴を催してゐた義元であつた。折柄の風雨、此の風雨を利用して

信長の兵は、茶臼山に於ける義元の本營をついた。今川の軍勢狼狽。時に御大義元を求めてツ、ツ、と進んで行く二人の武士、信長の臣、毛利新助、服部小平太である。永祿三年五月、近隣に威を揮ふてゐた義元も僅かな油斷から滅亡を招いてしまつたのだ、毛利、服部の兩士は一番槍を爭ふて義元に迫つた。

「下郎推參」

なんて威喝は此の場合何んの威力もない、二人のために計られた義元は、自分の首ばかりでなく、秘藏の左文字まで分捕られてしまつた。首と此の左文字とを信長の前に差し出した。此の時には此の左文字は二尺六寸あつたといふことだが、後に信長が磨き上げて二尺二寸一分になつてゐた。

信長が本能寺の變に遭遇して自殺した時に此の左文字は行衛不明になつてゐた。其の後、何處から か現れて秀吉の手に入り、秀賴から家康に進物として贈つてゐる。元は阿波の三好宗三が所持してゐたものでそれを甲斐の武田信虎に贈つたのであつたが、信虎の娘が今川義元に嫁入りする時婿引出物として義元に贈つた、義元秘藏にして常に此の左文字を佩用してゐたものである。此の刀には「義元討取り之刻彼所持の刀」と切り、裏には「織田尾張守信長」と切つてあるさうだ。家康も此の左文字を非常に愛用して、大阪陣の時にはこれを佩いてゐたほどだつた。

刀劍家にいはすると、左文字の在銘のものは甚た少なく、短刀には在銘のものがあゐ、名物左文字

なぎ大抵摺り上げものださうだ名物中には吉見左文字といのがあつて、長さ二尺二寸、差表に、元祿九年八月吉日、裏銘に左文字吉見正賴研上之とある、吉見といふのは、蒲冠者範賴の子孫で周防大内家の旗下石州津和村、防州山口を領し十五六萬石の大名で後毛利に屬した家だ。此の刀は毛利輝元の秘藏となつてゐたが、後に家康のものとなつた。

高田馬場の決鬪

堀部安兵衛の孫六

△兼元　初代孫六、大業物作者、初代は兼宗の子、文安頃、數代あり。

造込、恰好、裝飾、華表反りにして反り淺く、又無反りに近きものあり、兩樣とも先反り心になる末は無反り最も多し、重ね薄く身巾細きものあれども大体巾廣く、重ね薄く身巾狹く庵低く切先延び鎬作り多し、短刀に竹の子反り風の物ありて重ね厚く護摩箸、棒樋劍、梵字等の彫物あり、品位高からざれども京物と見違ふものあり。

刄文、働き、五の目尖り刄多し、世に之れを三本杉と稱す、稀に細直刄を燒きて地鐵細かく美しきものあり或は大亂沸つき盛なるものを見る事あれど稀なり、五の目尖り刄は匂出來にして三本杉の

形、變化に富み匂深く小亂交り五の目足入り燒刄の谷、刄先にぬけ出でたる樣は如何にも覇氣あり て盛なり、然れども時代下るに從ひ順次三本杉の變化乏しくなりて規律正し、殊に末代の作に至り ては必ず五の目尖り揃つて規律正しくなり燒きの頭いかつく小づむもの多し、出來たるものは大亂 沸多く盛なるものあれど何所かに五の目尖り揃ひたるもの現はる、又細直刄は短刀に最も多く、粗 見すれば山城來物の如く見ゆれども精細に注意するときは刄中働き乏しく燒刄匂締りて強く且つ燒 出より鋩子返り迄の間、何處かに亂心を持ち、いかつき刄現はる。

鋩子　亂込み尖り又は地藏小丸にして折々燒詰なごを見る火焔風の物あり、地鐵、肌粗にして肌 立ち杢目柾交る殊に鎬地柾多く時代後れたるものに棟燒を見る短刀直刄の物には地鐵細かき物あり 來物の如き風情あれども働き乏しく且棟寄り柾目になり或は杢目の先き柾にはける心あり肌立つ。

中心　詰りてたなご腹の形になり、棟丸く粟尻、劍形、鑢は切り、筋違ひ、　の羽あり。

例の日本刀の說くところは是れである。世にいふ關の孫六三本杉、初代は大業物である。此の孫六 で有名なのは堀部安兵衛だ。浪花飾では高田の馬場の十八番切り、といふ。十八人も斬つたといふ のは嘘だが安兵衛が此のために有名になつたのは事實だ

安兵衛、初の姓は中山、越後新發田の士だ、十四歲で孤兒、江戸へ出て來たのが十九歲、劍を當時 の大家堀內源太左衛門に學んで拔群の腕があつた。

安兵衛は啻に武藝に達してゐたばかりでなく、彼の細井廣澤なご、親交があり、達筆で能書でも あつた。安兵衛の手紙なごを見ても文章もうまく、武骨一片の男ではなかつたらしい、廣澤との親 交については、こんな話がある。

いよ〳〵討入りの前夜、安兵衛宅の一黨發途の祝宴に廣澤も招かれて會してゐた別れを告げて廣澤 は家に歸つたが、『本望が遂げられぬ時は火をかけて燒き、一同も其の中で切腹する、』といふの であつたから、歸つてからも眠るごころでない屋根の上に上つて遠くもない吉良邸の方ばかりを眺 める、幸に火の手が揚らぬので一同本懷を達したものだらう、と安心して屋根を下りるには下りた がごうも氣になる。で、又コソ〳〵ご屋根へ上つて行く、妻女が怪しんで

『今夜は一體何事で御座りますか』

ご、問ふご

『今夜の天象はただならぬそれで天文を見てゐるのだ』

かう言つて一夜を屋根に上つたり下りたりまんじりごもしなかつた。夜が明けるご、門の戸を叩く 音がして

『細井殿御歡び下され、思ふがまゝに敵の首級討ち取り只今泉岳寺へ引揚げるごころで御座る、 日ごろの御芳情は死後まで忘却仕らぬ、是れが今生のお別れで御座る、何卒御機嫌よう』

安兵衛の聲だ、廣澤、おつ取り刀で飛び出したがもう安兵衛は引揚げの一隊の中へ這入つてしまつてゐた。後、安兵衛切腹の際、討入りに用ひた臂甲一雙を廣澤に贈つた、堀部彌兵衛も刀の笄を贈り、間十次郎も亦兜頭巾を此人に遺留した。細井廣澤は當時の學者で傑物であつた。

話は餘談に亘つたが、例の菅野六郎左工門も亦叔父といふのは誤りで、菅野は伊豫西條の藩士、安兵衛浪人時代の交りで、非常に氣が合つたものか、安兵衛が或る日

『拙者は仕官を求めてゐるので何時よき主があるかもしれぬ、その時には親族の保證が必要だから叔父分になつて下さるか』

と云ふと

『いと易いこと、拙者叔父分になり申さう』

此所で早速叔甥の義を結んでゐる。だから、菅野は本當の叔父ではない、其菅野六郎左工門が藩中の村上庄太夫と高田の馬場で決闘する事になつた。安兵衛の活躍、實出しが之れからだ。

高田馬場の仇討ちといふけれど、あれは仇討ちではない、決闘の助力である、安兵衛が敵を切つて捨てゝからも六郎左工門はまだ生きてゐた。手當を受けた後で自害して果てたので安兵衛が叔父の仇討なぞは講談の拵へ事である、ひどいのになると十八番の曲斬りなど言つてゐるが、安兵衛ほどの腕立ちでも十八人もの敵を相手に、大根を切つて行くやうな譯には行かぬ敵ら相當の胸前はあるから子供相手とは違ふ。

同藩の村上庄左工門から決闘狀を附けられて之れに應じた菅野六郎左工門。出掛けに

『武運拙うして此儘歸らなかつたなら後事宜しく賴む旨言ひ置いて出ていつた』中山安兵衛に傳へてくれ』

元祿七年二月十一日、場所は高田馬場、六郎左工衛は妻女にこう言ひ捨てゝ、指定の巳の下刻におくれまじと、若黨角田佐次兵衛を連れて場所へ急いだ。妻女は良夫の一大事と小者を走らせて安兵衛に急報した。安兵衛の浪宅は程遠からぬ牛込の今の納戸町だつたとの事、韋駄天走りの途中牛込馬場下の酒屋で一杯グツと引掛けたのは有名な話。

安兵衛が駈せつけた時には既に拔き合はしてゐた、相手は卑怯にも弟の村上三郎右工門を始め、同じく中津川祐見、それへ家來が五人合せて八人の大勢だつた、六郎左衛門を取り卷いて一擧に討たんとしてゐる。菅野の若黨角田佐次兵衛は元彦根の浪人で唯の若黨ではない、主人の脊後を護つて闘つてゐるが何しろ無勢である。だん〳〵と六郎左工衛も佐次兵衛も傷ついて來た。

斯くと見て安兵衛「卑怯もの」と大喝、怒かれる猛虎の如く飛び出した。手には關の孫六三本杉、初代の大業物、忽ち村上三郎右工門と渉り合つて唯た一刀に斬り拾てた。安兵衛息をつぐ間もない、と、見ると中津川祐見が佐次兵衛と刀を合はしつつ六郎左工門の背後に廻らんとしてゐる。飛鳥の

早業、兼元は又一人の血を吸ふた。此の時安兵衛敵の初太刀で帶を一寸計り切りさかれたといふ。既に三人を討ち取つた安兵衛の劍の冴えに後の家來は散つたらしい。目指すは村上庄左工門、六郎左工門と渉り合つてゐるのを、エイッ、と一聲、右の腕を切り落す、つゝく佐次兵衛が左の腕を斬つた。庄左工門本當に棒立ちになつて罵るのを「何にッ」と、聲が掛つた途端、大袈裟かけの美事な一太刀。

それでこの勝負は濟んでゐる。どうも段違ひの腕だから仕方がない。

見物の中から堀兵彌兵衛の娘が、鉢巻の前金にするため簪を、たすきに腰紐が貸し與へた因緣から安兵衛を婿養子に迎へる。といふのが講談浪花節の一くさり、流石に講談師といふものはうまい因緣を考へついて、面白く話を織り交ぜてゐる。が、實際は彌兵衛と懇意の仲だつた久世出雲守の家中で中根長太夫といふ人が、安兵衛と知り合ひであつたところから、同人を介して

『仕官の希望は御座らぬか』

と云ふところから遂に養子になつてくれと切り出して結局此の緣談が成立してゐる。高田馬場の働きを聞いて彌兵衛老人すつかり安兵衛に惚れ込んでしまつたのである。

吉良邸討入の日にも安兵衛の兼元は目覺ましい働きをしてます〳〵切れ味を發揮してゐる。安兵衛は四十七士の中でも傑出した人物で幾多の逸話がある。

一文字則宗の捜査

大阪奉行の奇智

△則宗　福岡住(備前)備前太夫、刑部允。世に大一文字と唱ふ古今稀なる名匠にして御番鍛冶に召され十二人の正月番、並に二十四人の十一月番となる、菊を拜領す、名物多し、福岡一文字祖、定則の子元暦頃。

△造込恰好　上品にして太刀多く稀に小太刀を見れども少なし、短刀を見ず、反りは能き頃合にして鎬普通鎬巾狹く小切先、折に中切先もあり詰る、庵低く鎬造多く樋造を見ることあれども少なく角止になる。

△刄文　小亂、逆足匂深く足入り玉燒打ちのけ交り沸つきたるもの又は燒出し細く上にて廣き心になるものあれど概ね大丁字、大房丁子、重花丁子にして匂ひ最も深く沸少しくつきて足入り十分なり、粟田口物及京物の大丁子亦見事なれども匂本位なる此作の丁子は又一層清々として洵に麗しく重花丁子の模樣は品位高くさながら朝露を含める御所櫻の十重廿重に咲き合ひ絢爛として薫るが如く又層雲或は簇がり或は湧くが如く其の風情の絶佳なる到底筆舌を以つて盡し難し洵に則宗丁子

の絶妙なる今古無比といふべし。

△鋩子　小丸、大丸、匂ひ深く沸つき亂心になり折に燒詰もあり働き豊富にして美事なり又丁子に亂込みて燒詰めたるもあり。

△地鐵、肌、まことに能く錬れて京物の如く大模様にして豊なり、大杢目、柾心ありて働き十二分なり、棟燒を見ることあり。

△中心　肉ありて長く先細く上品なり、切又は淺き粟尻、棟角にして小肉あり、雉子股多く、鑢大筋違ひ、小筋違ひ多し十六葉の菊又は枝菊を切りたるものあり太刀銘二字銘にて目釘穴より上に切る、又、一ことばかりも切る。

世に菊一文字といふ古今の名匠だ。

昔は、一國一城にも替へ難しとしてゐた刀があり、お家の寶刀として秘藏されてゐるものが紛失してお家騒動が起つたり、係りの武士が一生を棒に振つて刀の行方を詮索したりして種々の戯曲的な物語りを生んでゐる。戯曲や淨るりにある阿波の十郎兵衛もさうであり、伊勢音頭の福岡貢もさうだ。此所に大一文字紛失の探偵談がある。

八代將軍吉宗は紀州德川家の出であるが、中納言として紀州に居つた時分、有名な熊野神社へ名刀を奉納した、それが大文字則宗であつた。金造り、赤銅斜子菱紋散し美事な太刀である。熊野本宮

では大切に保存して本社の内陣へ納め、年々秋季には和歌山より役人付添ひで、研師が來て拭ひを入れること　なつてゐた。安政三年の秋　例の通りに役人が出張して社司二人立會で内陣から長持を取り出し　内箱を開けて見ると、太刀がない、盜まれてゐる、役人も社司も吃驚仰天し、中にも社司は眞ッ　になつて大騒ぎとなつた、かうなると、手近の者に嫌疑が懸る、鹽崎なる社司を始め數名のものが嫌疑で和歌山の獄に投ぜられた。だが太刀は出て來なかつた。

家宅搜索はする、心當りのところは片つ端から當時の名探偵が搜査をしたが判らない、最早紀州を出たものとの見込で紀州家から、大阪の町奉行、京都の所司代等へ搜索を依頼することになつた。何しろ八代將軍吉宗の奉納刀であり、刀は大一文字といふのであるから町奉行でも、所司代でも身を入れて詮索することになつた。

「紀州にないとすれば、何づれ大阪か、京都へ持つて出て、時機を見て賣るつもりだらう」

といふのが、兩方の見込みであつた。此の太刀が帶したくて盜んだものなら、太刀だから普通の刀劍造りにしなくては帶せない、改めるとなると、直ぐ判つてしまふから、どうしても是れは、寶却を目的とした窃盜である、といふ意見である。それで、大阪でも、京都でも、此の方面に目をつけて網を張つてゐたが、用心深い者と見えて現はれない、そのうち、月星が付かないとなると、だん〳〵に氣がゆるんで自然に遠のいて來る、今の言葉で言へば迷宮入りで、とう〳〵犯人不檢擧のま

ゝで三ケ年を過してしまつた。

大阪でも、京都でも、もう此のことは誰れも云ひ出す者もなくなつた萬延元年の春、大阪の奥力某が、身分を隠くして伏見の宿に滞在をしてゐた。休暇の保養の旅行であつたか又外の事件で出張をしてゐたか、それは判らないが、ある日、外出から戻つて宿で茶を喫んでゐると、相手が武士と見て宿の主人が、一個の鍔を持つてやつて來た。

『斯樣のものが賣り物になつて居りますが、いかゞて御座りますか』

と、その鍔を差し出した。手に取つてジツと見てゐると、三年前に紛失した熊野神社の太刀の鍔らしいことが浮かんで來た。奥力は心秘に喜んだが、顔色にも出さず

『亭主、よい鍔たナ、買うてもよいが、これ程の鍔なら何かいはれがあらう、それを聞いて見たい、賣りに來たものがゐるなら此所へ呼んで奥れ』

一人の男がおづ〳〵座敷へやつて來た。

『神妙に致せ』

と、形勢が忽ち變はつて其の男は縛り上げられてしまつた。もう譯はない、男はすら〳〵と饒舌つてしまつた。

『熊野の神主の子に頼まれましたので』……と。

早速その居所を突き止めて召捕り、調べて見ると、其の者は伊勢山田の神主の子で、放蕩に身を持ち崩して勘當されたので熊野の社司の許に奉公してゐるうち、窃み出して故郷の山田へ持ち歸り、知合ひの髪結床の縁の下へ隠くして置いて、小道具からボツ〳〵と賣り出したところを召し捕られた、と逐一白狀をした。漸く太刀は無事に熊野神社へ戻つたので入獄してゐた社司もやつと放免になつたのである。

此話は、同じ刀の紛失でも戯曲的のところがない變りに、探偵的物語としては本格的のものである

二字國俊物語り

幸村の臣四角兵衛

△國俊　孫太郎、二字國俊といふ(一説に來國俊、同人なりともいふ)來國行の子、正應頃

△造込恰好　反り淺く、鎬巾廣く、鎬高く、庵は高く又は眞の棟、鎬造り多く、棒樋もあり、樋の肩いかり樋先深し、切先詰りて肉取り正し、二字國俊には短刀少なし。

△刄文働き　丁子亂、大房丁子亂、逆丁子亂又は蕨手の如き丁子を燒き、備前一文字に似たれども一文字よりも沸つく、尤も國行に比すれば沸少なく燒強し、烈しき金筋、稲妻等あり、又腰刄を燒

ぎ國行に似て廣直刄、灣を燒くときは沸多く荒し。

△鋩子　亂込強くして沸つき折に烈しき金筋を見る、火焔、掃掛けあれども少し

△中心　中心は國行に似て太刀銘多く、目釘穴の下に銘あるもの多し。

國俊に關して面白い挿話を持つものは眞田幸村である。天正十二年、幸村の父昌幸が上杉景勝と同盟を結んだ時に　幸村は人質の形となつて越後に赴き春日山の城下にゐた。幸村十五歳であつた。翌十三年上杉家の老臣新發田因幡守、赤谷の城主井地峯道壽齊と心を合はせて謀反を起した、景勝自ら兵を率ゐて新發田征伐に向つた、幸村乞ふて先陣を承はる。先づ赤谷の城を攻め落し、進んで新發田の城を圍んだが、折柄の大雪、寒氣が烈しいので兵士も疲れて捗々しく攻めることが出來ない、景勝、仕方なく人數を引上げる時、城中から千餘人が打つて出て上杉勢の退口へ喰ひ付く、引き足立つところだつたので上杉勢は潰亂し、敗軍といふところまでに立ち到つた。此の時、幸村一隊の兵を率ゐて横ざまに新發田の軍へ突いて入つたので城兵驚いて狼狽するところを、五十挺の鐵砲で擊ち捲くつた。こんな戰功に上杉家の人々を驚かしてゐたが、後に昌幸が秀吉に味方をする時になつて、先づ幸村を秀吉の許に送らんものと、密に越後へ使をやつて早々秀吉の許へ行くやうに命じた。と、言つても人質の身だ景勝が承知する筈がない、其所で、幸村は、景勝が與板の城といふのへ行つた留守の間に春日城を立ち退いた。此の立ち退きが素晴しい。矢澤但馬を殿として鐵砲七十挺を後に立て、馬上の五十騎、渡邊四角兵衛を先鋒として白晝堂々と立ち退いたのである、上杉家の老臣もそれと知つたが追つ駈けて討ち留めやうとする者がない、須坂の關といふところで、止めやうとしたが、幸村の一隊馬上で槍の鞘を拂ひ、鐵砲には火繩に火がついてゐる、先鋒の四角兵衛が大の眼で『眞田源五郎幸村歸國致す、妨げする者は一人も遁すまいぞ』と睨みつけて呼ばはり〳〵行く樣に誰れ一人手出しをする者がなく、易々と上田の城へ歸つたといふのである。偖て、肝腎の日本刀物語り、國俊だが

二尺四寸、寸は短かく候へ共刄強く度々覺え有之中にも五枚兜を着たる敵へ切懸り候に水をさぐる樣に候ひつる、指料になされ候へ

との口上で幸村が大谷刑部から貰つたのである。刀劍好きの幸村、此の國俊を貰つて大喜びだ、近臣を集めて大に自慢をするのであつた。見せつけられて家臣共、誠に名作に候、と言つて返上するその中に前記の渡邊四角兵衛、手に取るやスラリと拔き放つて庭へ飛び出し、人を斬る眞似、受太刀の眞似、と頻りに振り廻はして天晴の名刀、持ち心のよい刀である武士冥加にかういふ名刀を持ちたいものだ、と云ひつゝ鞘に納め幸村の前に置いて

『此の御刀、四角兵衛頂戴仕りませう』

と、言つた、圖々しい男だ、幸村立腹して

『白痴め、俺は在京中心を盡して求めたが手に入らなかつたのだ、今度大谷殿の御懇情で手に入つた名刀だ、其方達に遣つて堪るか』

と、叱つた。四角兵衛閉口して引き退つたが、同僚の望月主水に

『俺は必ず國俊の刀を拜領して見せる』

と、言ひ馬鹿をいふナ貰つて見せる、と、此所で首をかけてゐるのだから揮つてゐる。

春である、その日は春雨が降つてゐた。幸村も流石に徒然の友欲しけなる所へ四角兵衛が罷り出た

『斯樣な雨降りでは殿も御徒然におはさう、双六なぞ遊ばされては』

と、言上する双六好きの幸村であつた。よき相手と

『四角兵衛、さあ參れ』

とすぐ盤を持ち出させる。

『斯樣な時には賭けになさらずば張合ひなきものに候へば……』

で、遂に幸村は四角兵衛の誘ひに乘つた。

『御前、お負けなされたならば國俊の刀拜領仕ります、わたくし負けなば首を……』

と、賭けたが、幸村三度び續け一負けた、双六巧者の幸村だつた、ハテ、と思つてサイを取り上げて見ると、何時の間にかイカサマサイだ、幸村不興の態、奥へ立たうとするを、袴の裾を捉へて四角兵衛

『何んと御意なされても御負けなされたに相違なければ國俊の御刀は私のものに候ぞ』

と、言ひながら退出した。が、その後何んにも言はないので最早忘れたであらうと思つてゐた。

夏の初め、幸村は四五人の家臣を連れ筑摩川へ川狩りに行つた。その留守のことである。四角兵衛ノコノコと舘へ來て

『若殿の仰せに大谷殿より進ゐらせた國俊の刀、急に御用あれば取つて參れとの御諚で只今立ち歸つた』

といふ、侍女の若狭といふのがそれを渡すと、四角兵衛はニツコと笑つてそのまゝ逐電をしてしまつた。

間もなく四角兵衛、上田の城下に舞ひ戻つて徘徊してゐるのを幸村が知つて激怒し、早速討ち果せといふ命が望月主水　夏目軍八の兩名に降つた。兩人、之れは困つたことだと思つた、何にしろ剛力無双の彼れである、二人位では反對に討たれるかも知れない、然し主命だ、潔くお受けをして立ち去らうとした時に、安房守昌幸が來た。幸村から事の次第を聞いた昌幸は笑つて

『それは、其方の誤りだ、凡そ博奕の事は僞つて人を出し抜き勝つことを本意とする、元來が戯れの博奕から起つた事だ、彼れは剛勇無双の男である、早く呼び戻して元の如く目をかけてやる

がよい、刀といふものは物の用に立てんが爲めのもので、其方が持つよりも四角兵衛に持たす方が反つて用に立つだらう、武士一人と刀一腰と替ふべきではない」

と、教訓した、幸村四角兵衛を召して斯々の次第、國俊は其方に遣はすぞ、といふと、大の男が聲を擧げて泣き感謝をしたといふことである。之れから後といふもの、四角兵衛、幸村のいふことであつたらさんな難題でも辭したことがなかつた。後、關ヶ原の一戰から昌幸、幸村が紀州九度山へ潛居する事になつた時、家臣十六人と限られた中に四角兵衛は漏れてゐた、四角兵衛太に怒つて幸村の後を追つて九度山に至り忠勤を盡した。そして大事の國俊を常に放さず、之れは幸村を護るものだと言つてゐた

蓮池城下の血煙

勝賀野實信の奥州月山

△月山　系統は鬼王丸子鬼王丸は舞草より出でといふ、初代は元暦頃に起り、後出羽に住し又諸所に移住せるものも多く後代永く續く。

△造込恰好　概ね華表反りにして反り淺きもの多く小切先多し無反りの物は切先延る、折に鎬巾廣きものを見る、小脇差、短刀もありて重ね厚し稀に樋造もあり

△刄文、働き　直刄直刄に小亂等多く、小沸つき匂深くまことに約やかなるもの多く刄中は比較的見所乏し、折々小五の目を見る

△鋩子　小丸又は燒詰沸つき匂深し

△地鐵、肌　有名なる綾杉肌にして獨特の物なり、刄緣に玉杢を見せ洵に巧なり地沸つくもあり最も見易きものなり

△中心　詰り心にして肉あり棟丸きもの多く形種々あれども先細く栗尻刄上り栗尻あり、尻張りたるもありヤスリは切り、小筋違ひあり、

奥州月山は、名を聞、ただけでも切れさうだ。其の月山の脇差をさしてゐたものに吉良親實の臣で剛勇無双と言はれた勝賀野次郎兵衛がある、吉良親實は長曾我部元親の甥で、秦家の柱石であつた家督相續の問題で、反對派の毒舌にかゝり遂に切腹をした智勇兼備の者であつた、勝賀野次郎兵衛實信は親實が領有の高岡郡蓮池城を守つてゐた。

◇

次郎兵衛は、親實が切腹し比江山親興が切腹し、永吉飛彈守が斬り死にをしたので、其の後は當然自分への廻りだと覺悟してゐた。實信の家は蓮池城の東南側にあつて、田圃を貫いた大きい道が一

直線にあり、誰れでもが來るとすぐ其の姿があり〳〵と見られるのである。今し實信の眼に入つたのは自分の家へ來る五人連れの武士だつた。

「いよ〳〵やつて來たナ」

と、思つた。

◇

「ウヌッ、」とか、「己れッ。」

とか、いふ怒氣の荒々しい言葉が晩秋の靜かな空氣をつんざいて響いたが、一人の武士が玄關へ片足をかけたまゝのけ反つて倒れた。と、間髪をいれぬ間に一人は肩先から大袈裟に斬り下げられてゐた。野中源三兵衛であつた。

さうする間もなかつた。三人がさつと身を退いた際に實信は、血に染んだ國光を提げたまゝひらりと庭園に飛び下りてゐた。

「來るか」

ジリッ、と一歩踏み出した氣合に呑まれた北代四郎右衛門、ジリ、ジリ、と後に逡る突端、木の根に躓いて横樣に倒れた。

「しまつた」

と、感じた時に、腰のあたりに痛さを覺えた、手をやつて見ると、ボカリと口があいて、ドク〳〵と血が出てゐた。ハッ、と思つた北代市右衛門

「甥の敵」

と、焦つて斬り込んだが、カチンと音がして市右衛門は刎ね返へらされてゐた、それへ、グンと國光が進んだ。土居肥前勝行が市右衛門を救ひの一刀を入れた。危く遁れた市右衛門

「土居殿油斷なく働かれい拙者は疲れた、暫時休息する」

早口に言つてすゝと身を引いた。後は實信と勝行の一騎討ちだつた。だが、剛勇次郎兵衛に對して勝行は敵でなかつた。後で五人のうち唯だ一人生き殘つた土居勝行が、切られ與三ほどに二十三ケ所の手痕をうけてゐたといふのだから實信の太刀先きの鋭かつたことが判る。勝行が切り立てられてゐる際に市右衛門がそつと實信の後に廻つた、芝居なら大向から、「危いぞ」とか「後を氣を附けろ」とか彌次が飛ぶところだ。實信の家來も、一人も居合せなかつたと見え、主人の此の危機に注意をしたり、立ち向ふて市右衛門を防がうとした者もない。戰國時代の家臣だから恐れて匿くれてゐるやうなことはなかつたと思ふ、それでとう〳〵次郎兵衛やられてしまつた。後から兩足を拂つたので流石の次郎兵衛もドタリと倒れた。が其の時

「ヤッ、己れにだし拔かれたか」

と、實信は罵つてゐる、市右衛門が此の罵聲を氣持ちよく聞いてフフン、と口元に微笑を見せた途端、次郎兵衛は脇差を拔くと、ヒユウと投げつけた。過たず市右衛門の脇腹へグザと突立つた。それ切りだ、市右衛門、アッと言つたが此の世の見納めだつた。その脇差が奥州月山、次郎兵衛秘藏のものであつた。

初め、五人が玄關へ來た時に次郎兵衛はこいつをすらりと拔いて

『名工奥州月山、此の業物が、ものをいふと各々方五人や十人は胴切りにしてくれる』

と、威壓してゐる。

二十三ケ所の手痕をうけてやつと生き殘つた土居勝行が、岡豐に戻つてから、事の顚末を元親に報告した時に心ある將士は皆目に一杯の涙を溜めてゐたといふことだ。

◇

元親も、勝賀野次郎兵衛實信が剛勇無双の武士であるのを知つてゐた。だから、土居肥前勝行に連池城沒收を命じた時に斯ういつてゐる。

『實信はかくれない勇者だ、卒爾の振舞をして仕損ずるなよ』

と。それから勝行が道々手段方法を考へつゝ歩いてゐると、大高坂城下で出遇つたのが眞先に切られた鹽見野彌総と野中源三兵衛だ、執念深く勝行につきまとふて行先きを白狀さすと

『勝賀野は名たる手利き故是非拙者等も連れて行つてくれ』

と、頼んでゐるところへ北代市右衛門と北代四郎右衛門とが又來合せて頼む、勝行は、上樣命令で斷わつたが、遂に四人の方が言ひくるめて同行する事になつたのであつた。之れも運命といへば運命でもあらうが、當時の事だから功名出世が唯一の希望であつたからであらう。あの調子だつたから、勝行一人であつたら、次郎兵衛は討てず、どうなつてゐたかも判らぬ。そして二番手、三番手となつて次郎兵衛をもつと勇者にしてゐたかも知れぬ

風雲兒山中鹿之助

來太郎『新身國行』

△來國行　來太郎、元鬼と號す、高麗人國吉子正元頃

◇造込恰好　短刀珍らしく大刀多く、京反り高く、重ね厚く、鎬高く、鎬巾廣く、庵高く又は眞の棟にして樋造多く樋は上手にして肩いかり規律正しく角止め又は掻き通しもあり、樋又は樋の內に倶利迦羅又は浮劍ゝ彫りたるありて上手なり、劍のかたいかり、タガネ深し

△刄文働き　大丁子、廣直刄、匂深く沸多く荒沸强く、腰刈を燒く概ね腰刄は一尺許り盛なる丁子

にして上は廣直刄になり、沸匂凝りて足入り金筋稻妻等盛なり大丁子は最も盛にして重花丁子ありて備前一文字と見違ふ程なりされど一文字よりも火强くして沸烈しく、廣直刄の時は湯走りを見る

△鋩子　大丸、亂込、火焔沸つく

△地鐵肌　地鐵細かく、大杢目、柾交りにして地沸多く、地けいも交り梨地風のものもあり

△中心　長くして先き細く反り心あり、平に肉あり區高し、棟は角にして小肉あり粟尻、鑢は切り二字銘多くして太刀銘なり、短刀振袖にして區最も高し。

太平記に

長崎勘解由左衞門爲基が佩たる太刀は、「面影」と名付けて來太郎國行が百日精進して百貫にて三尺三寸に打たる太刀云々

と、ある。が、國行といふと時代はずつと遲れて、山中鹿之助を思ふのである。尼子家の大忠臣、山中鹿之助が佩してゐた刀が來太郎國行だ。一般的によく知られてゐる來國俊の親である鹿之助幸盛の國行は、今打ちおろしたやうに見える名刀で、「新身國行」と名づけてゐたと言はれてゐる。凡そ戰國の武將で山中鹿之助ほど辛苦を嘗めたものはあるまい、尼子家再興を計つては敗れ、敗れては捕はれる、それから捕はれては脫走し、脫走しては旗を擧げる、一日として安閑と枕を高く寢る暇もない、義擧に際しては自ら東奔西走、同士を糾合し、隣國との和議を計り、神出鬼没であり不撓不屈である。

鹿之助は實に後世の人氣者である。こうして諸國を遍歷しても常に愛刀國行は離さなかつた。鹿之助は尼子家の爲めに生れて來たやうなものであつた。一生を通じてされだけの戰ひをして來たか、剛勇無双の鹿之助は、敵の首級三十を擧げると必ず一度首供養をやつた。一生のうち三度び其の首供養をしたといふのであるから九十以上の首級を擧げてゐる。或時には、敵の乞ふまゝに、對陣の中にあつて一騎討ちの勝負までしたことがある。此の剛勇の鹿之助が、常に三日月を敬仰して兜に三日月を附けてゐたといふのは有名であるが、何んだか詩人めいた奥床しさがある。主君尼子勝久を奉じて上月城に旗擧げをした時には一旦は成功したが毛利の大軍に圍まれて遂に勝久は自刄した。勝久といふ主君がもつと聰明な主君であつたならば鹿之助の再興運動はもつと面白く、又もつと成功してゐたかも知れない、鹿之助直下の尼子十勇士なども、嘸ぞ張り合ひがなかつた事であらう、兎に角、尼子家再興運動史を讀むものは餘りにも多難であり、不撓である山中鹿之助といふ人物にホロリとさせられる。それが後世の人氣を得た所以であるかも知れないが、鹿之助の旗擧げにはもつと成功させたい氣がする。勝久自刄の際に、鹿之助は尼子家再興の遺言を奉じ僞つて毛利の軍門に降つた。毛利家では鹿之助の度々の旗擧げに手を燒いてゐるので、主君謁見といふ名目で連れて行く途中渡舟の中で遂に鹿之助を討ち取つてしまつた。毛利家では恐れもしてゐたが惜しみ

もしてゐたらしい。

鹿之助の佩してゐた太郎國行は此の時から毛利輝元のものとなつてゐたが、後に輝元から太閤秀吉に献上した。秀吉は幾多の名劍名刀を集めてゐたが、此の鹿之助の國行と藤四郎の刀とは殊の外の氣に入りで、秘藏にしてゐたといふことである、今も此の國行は德川家にあるといふことだ。

石田三成の愛刀

相州五郎入道正宗

△正宗　岡崎五郎入道。刀治中興の人、行光の子、正應建武の頃。

△造込恰好裝飾　刀は寸詰り心になり、無反りに近く稀に京反りもあり身巾廣く重ね厚く、肉ありて鎬普通鎬巾狹く眞の棟、丸棟もあり切先は大中小何れもありてのんびりとしたる鋒切先になる、樋あるもの多く彫物もあり小脇差短刀は付の子反り先反りの二種あり大平造も見る、又身巾著しく廣き異樣なるものあり、庖丁に似たるを以て世に之を庖丁正宗といふ其他種々なる造込多く総て覇氣あり。

△刄文働き　大五の目亂、大亂、馬の齒亂、大灣亂交り等にして総て砂流交り荒き沸つき、沸崩れ、匂深く凝りて足入り沸光り強く其麗はしき事殆ど形容の辭なし、昔より樣々なる賞讃の言葉はあれど何れも物足らぬ感あり

笹の葉に薄雪の降りかゝりたるが如し

と評せるは稍適切に近しといふべきか、刄中一體に沸にて崩れ而も包深く凝りて千變万化の模樣を現はし、浮けるが如く沈めるが如く動けるが如く、靜かなるが如し、其狀殆ど捕捉すべからずして美しき樣譬ふるに物なし、又美しき砂流は清流の底に窺ふが如く或は砂金を散り敷けるが如く飛燒玉燒等は沸と匂の結晶の如く燦爛として恰も稀世靈妙の寶玉を見るが如き感あり、古人の賞辭に日月の形を爲すと形容せるものあり、其他湯走、金筋、稻妻、打ちのけ等あらゆる妙技を現し刄文地肌の内に沸匂にてほの〳〵と煙の舞ふが如き有樣喩ふるに物なし、燒失名物中横雲正宗に對する家隆卿の歌に

霞立つ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空

とあり、實にさもあらん丁子亂れ稀に細直刄も見る

△鋩子　燒詰亂れ込み尖り心を持ち反り深く地藏等総て光り強く氣品高き沸つきて崩れ匂ひ深く凝りて足入り働き最も盛なり

△地鐵肌　よく錬れて細かく地沸多くしてむら〳〵と沸立つが如く大板目地けい其他の働き盛に現

はれ美事なり湯走り、龜燒・棟燒・あり、沸にて崩れ陽炎の如く炎え立つ風情あり△中心　肉あり詰り心になりたな腹にして尻は劍形棟小肉あり鎬は筋違大筋違刀銘多く二字銘もあり長銘もあり短刀に振袖を見る。日本刀の著者はあらゆる美辭と讃辭とで正宗を世に紹介してゐる正宗讃辭反對論者も可成り多いが此所には述べない。

正宗は隨分名物蝶に多い、何れも有名であるが、正宗で何人を切つたかといふものは少なく大名道具として有名なものが多いやうである、其の中で石田三成の有してゐた石田正宗を書いて見たい、

三成は茶道にも達し、刀劍の鑑定にすぐれてゐた人であつた。

世間では往々にして三成を小姓上りの奸惡邪智の人のやうにいひたがる、然し三成は才幹すぐれた男であり戰略にも通じてゐた、關ヶ原の大戰に、三成は西軍を卒ひて、物凄き奮鬪をしゐる、小早川秀秋の態度にされ程氣を揉んだか。彼れは再三秀秋の陣に自ら督促に赴いては馳け戻つて號令をしたり多忙を一身に兼めて奮鬪をしてゐる。此の關ヶ原の大戰は西軍に有利で戰は將に石田派の勝利たらんとしてゐた。秀秋の裏切りがなかつたならば家康は三成と反對の結果に陷ちてゐたであらう。西軍に取つては諦め切れない。秀秋の離反であつた。西軍の參謀格であつた大谷吉隆は

斯くなつたも皆金吾奴の致す所、三年の内には必ず今日の恨み報ゆべきぞ

と、言つて自刄してゐる。。三成に取つてはまことに惜しい戰であつた、破れてからの三成は伊吹山にのがれ入つて匿れてゐた追跡の手が嚴しいので隨いて來てゐた近臣磯野平三郎、渡邊勘平、鹽野清助の人々に因果を含めて獨りとなり忍び忍びんで佐和山に向つた甲冑を脱いで蓑笠を着、草刈人を裝ふて潛行してゐるうちに、稻の穗を取つては食ひ、木の實を拾つては飢を凌いでゐたために遂に腸を害して腹痛、熱が出る、下痢はする、慘憺たる有樣であつた、やつと脇坂村に辿りついて三重院といふ舊知の寺院を訪ねると、後難を恐れて住僧は三成を迎へず、言葉を構へて追ひやつてしまつた病勢ます〳〵烈し。三成は田の畦に倒れて苦悶してゐるのを與次郎太夫といふ農夫に助けられ、暫く養生して匿れてゐたのを訴人あつて遂に捕へられた。三成を捕へたのは田中吉政、三成かねてよりの知人である、畧して田兵と呼ぶ、田中兵部大輔であるからだ、其所で三成は懷中から一口の短刀を出して吉政に與へてゐる

これは故大閤殿下より賜はつた切刄貞宗の名刀で片時も離さず持つてゐたものだ、田兵、今はかたみに貴公に與へる

此の短刀に就いては挿話があるがそれは略して、三成は吉政から藥をすゝめられてそれを辭し、韮雜炊を馳走して呉れと賴んで數椀を喫し、「ごう〳〵たる鼾聲囚裏の人にも似ず」と、言はれた程平然と熟睡してゐるのである

家康が進んで太大に來た時に、吉政は三成を護つて大津へ來たり、疊を本營の門外に敷いて三成を

座はらしてゐた。

戰勝の諸將意氣軒昂、三成の前を通つて行く、福島正則、徽然として馬上より三成を見やり

其方いらざる騷動を起したればこそ、斯る身の上とはなりたるなれ

三成忽ち色を作して

己れを召捕つて我が如くに繩をかけ得ざりしは天命ぞ

と、罵り返してゐる。

後れて黑田長政、三成を見ると馬上より飛び下り

さて〳〵斯る身の上となり給へるこそ不運なれ、寒うや在はさん、是れなりと召し給へ

と、自らの羽織を脱いで着せて行く。

小早川秀秋、物陰より三成を覗く、三成知つて心血俄に湧き

已れは日本一の卑怯者ぞ、約束に背き義理を捨てゝ裏切りせるこそ、けに末代までの笑草なれ

秀秋、赤面して去つてしまつたが、これより心がすぐれない。

家康、親しく三成を引き見る。

不運にして斯る身となりるゝも、さら〳〵耻辱ではない、古より例が多いことだ

言葉が頗る穏やかだ。

三成も心打ち解けて

天運の然らしむるところである、此の上は疾く首を刎ね給へ

と、少しも悪びれた狀がなかつた、家康は後で、左右の者に

三成は流石に大將の器である、平宗盛なぞは大違ひだ

と、言つたそうである。

家康が最初に三成を頂けたのは鳥居成次であつた。

治部は其方が父元忠の敵だ、思ふ仔細があるから其方へ預ける

しかし、成次は一夜三成を留め置いて手厚くもてなした。父の敵なぎゝ少しも怨める色もない。三成も感激、涙を流して喜んだ。

翌朝、成次は家康にいふ

父元忠は公儀に依つて一命を差し上げたもの、石田に對して私の遺恨は更にない、どうか他へお預け下され

と、そして今度預つた本田正純は三成に冷淡であつた

智將は人情を計り、時勢を知る、諸將の同心しないのも知らずに輕々に軍を起したのは不覺ではないか、軍が敗れて自害もせず、やみ〳〵と生捕られたのはどういふ御量見か。

三成は冷然として

さて〳〵御邊は武略を心得ぬ人かな、腹を切つて人手にかゝらぬやうにするのは葉武者の事だ、

賴朝公が朽木の洞に隱れた心を御存じか、大將の道を話しても御邊の耳には這入るまい。

空嘯いてまだ言葉を交はさうともしなかつたといふ事である。

三成の心事を知ることが出來ると共に、世にいふ怯懦口辯の士でないことが判るのである。一体德川時代の書物とか、話とかは皆德川家のために都合よく出來てゐて都合の悪いものはドシ〳〵發賣禁止だから、本當のことは漸く明治時代に入つてから判るやうになつて來たが、それでも、德川時代のものを根本としたものには眞相に徹しないものが多い。三成等は此の誤傳が同人を卑怯な武略知らずとしてゐる風がある。

いよ〳〵刑罰の日が近づいた。

三成、小西行長、安國寺惠瓊、の三人は破れたる木綿の肌着を着てゐた。之れを聞いた家康は

治部は日本の政治を執りしもの、鐵津守は一城の主である、安國寺も亦賤しいものではない、あのまゝ京中を引き廻はして耻を與へるのは反つて此の家康の耻辱だ

と、言つて三人に小袖一重宛を贈つた。

行長は涙を流して喜ぶ、安國寺は別に禮も言はない、

三成、小袖を見て問ふ

誰れよりぞ

と、答へて

上樣から。

三成は、きつとなつて

上樣とは誰れだ

又答へていふ

內府樣です

三成、沸然として

上樣とは故太閤のことだ何んで內府を上樣などゝいはふや

小袖を着やうともしない。

斯て、三人は京に送られて斬罪と決まつた。所司代奥平信昌、乃ち三人を車に乘せて京中を引き廻はす

三成渴を覺へて湯を乞ふ、

警固の士がいふ。

途中なさで湯はない、咽喉が渇かば柿の甘干があるのでそれを參りそう

三成　首を振つて

それは痰の毒ぢや、わしは食ふまい。

警固の士が冷笑つて

今、首を刎ねらるゝ人が毒斷ちとは笑止千萬だ

と、聞いて三成はから〳〵と笑つていふ

其の方共の考へから見ればそれは尤も至極だ、大義を思ふものは、首を刎ねらるゝ間際までも命を惜むのだ、如何にでもして本意を遂せんとする心があるからぢや、燕雀には鴻鵠の志は判らぬと。此の話は有名なものである。三成亦決して尋常の男ではない。

こうした男の三成である。家康や諸大名から睨まれてゐたこと勿論だ。大閤薨去の後に、家康は前田利家と不和になつてゐた。此の不和は天下に非常のショックを與へたが、これは三成が計畫した事だといふ嫌疑で三成近江の佐和山へ退隱となつた。三成歸城に際して家康は結城秀康を附けて近江まで送らせた。大津迄來ると佐和山から大勢の家臣が出迎に來てゐた。其所で秀康に厚く禮を述べて別れる事になつた時、三成から秀康に贈つた刀が乃ち政宗で石田政宗といふのである。長さ二尺二寸二分、背に切込があるので切込政宗ともいふ刀である。此の切り込みの事が判つてゐると面白いがそれは判つてゐない、唯だ切り込みのあるといふだけだ。で名物譜としての此の正宗は持主の石田三成の名に因緣して石田正宗といふ事になつてゐる。

一刀流　綺談

伊東一刀齊の甕割刀

△長光　法名順慶　父に劣らざる名匠にして寧ろ父以上に作柄勝れたる物多く、順慶銘は最も賞翫せらる、地うつりの名人にして世に聞えたる名物亦少しとせず。光忠の子、文永頃。

△造込格好裝飾　父に似て上品なり、小尖先多く樋造り多くして二筋樋も見る、彫物もあり上手なり、小太刀もありて約やかなるもの多く作柄太刀より劣る、又劍を造ることあり。小脇差、短刀は竹の子反りにして品位高し、菖蒲造りもあり、眞の棟又は丸棟なり。

△刃文働き　光忠に似て丁字刃多く燒頭丸くむつくゝとして重花丁字は一文字の如く重なり合ふて滿開の八重櫻を見る如く光忠に勝る、匂深くして足入り、刃表に肌現はれ金筋稻妻等交り小沸つく小丁字小亂逆がかるものありて締り心になる、又腰刃大模樣のものを見ることあり、或は燒出し丁子にして上廣直刃のものも見る刃中丁子足入りて働きあり、中直刃もあり悉く丁子足入る。

△鋩子　大丸匂深く小沸つくもの多く又横手上の刃細きものあり、亂込もあり尖り心を持つもあり

總じて働き豐富にして返り淺し、又丁字に亂込みて燒詰めたるものあり

△地鐵肌　能く錬れて光忠よりも強く地沸心ありて大李目多く地うつり最多くして麗はしく丁子うつり又は牡丹花の如き丁子うつり多く地中恰も煙の如く、霞の如く、有るが如く無きが如く生けるが如く眠れるが如し其の技絶妙なること他に其の比を見ず、直刄たりとも必ず丁子うつりを現はす

△中心　光忠に似て一層品位あり、太刀銘にして二字銘多く錆際に切るもの多し、雉子股を見ることあり。

伊東一刀齋の愛弟子、神子上典膳と善鬼との武州小金ヶ原に於ける決闘は劍客史上に有名なものである。典膳は、後に德川家に仕へて、小野派一刀流の始祖となつた小野次郎右衞門だ、善鬼は一刀齊の門弟として典膳より先輩であり、其の腕も或は典膳より上であつたかも知れぬが、師は善鬼の心、邪なので秘傳を讓ることを欲しない。其所で小金ヶ原の決闘となつたのであるが、善鬼の鋭い太刀は、典膳を死地に追つ詰めてゐる。危い一刀を脱れたのと、善鬼が倒れたのと間一髪だ。

『無想劍はそれだ』

師一刀齊から言はれてやつと吾れに返つた典膳である、一刀齋が腰をおろしてゐた松の根方に善鬼の死体を埋めて、

『何處へなりとも行つて修業せよ、良き主あらば仕官せよ、是れを汝に傳へる』

と、言つて渡した一刀と一刀流の秘傳書。そして一刀齋は何處ともなく瓢然と別れを告げて立ち去つたのであるが、典膳が讓られた一刀齋秘藏の一刀が備前長光だ。一刀齋が京にある時、賊を追ふて賊が甕の中へ潜んだのを、甕諸共に袈裟かけに斬り殺したといふ甕割り刀。伊藤一刀齊の精神がそれに籠つてゐたといはれる名刀であつた。まだ長光には幾つも名物喋ものがある。

神子上典膳は後、德川家へ仕へて小野次郎右衞門と名乘つた人であることは前に言つた、その次郎右衞門にはまだ話がある次郎右衞門がまだ德川家に仕へぬ前、甲州流軍學の大家小畑勘兵衞景憲と會つた。勘兵衞は典膳の腕前を試さうとして仕合を申込んだ。

勘兵衞が木劍を取つて身構へたのに對し、典膳は一本の薪を拾つて來て

兵禮ながら

と、立ち向つた、心中、慣つた勘兵衞が

そんなもので見事相手が出來るか

と、問ふた、

戰場では棒切れでも枯木でも手當り次第のもので立ち向はねばなりませぬ

落ち付いたものだ。

勘兵衞大上段に構へて一と撃ちと睨んだが、薪一本の蔭に典膳の姿はかくれて、どこからも打ち込

が際がない。勘兵衛も驚いた、とうゞ〳〵兜を脱かざるを得なかつた。それから典膳は勘兵衛の後援で町道場を開いた。

ある日、典膳の道場へ馬上で馳けつけた勘兵衛、

御用の筋がある、俺れミ一所にすぐ來てくれ

武藏國滕折村に、斬取り强盜が潜んだ、よほどの使手で、捕り方が行つても、斬り殺されてしまつて手におへない。

召捕ることが面倒なら斬り棄て、もよい、罪科は何れきまつてゐる者だ。

勘兵衛の頼みといふのはそれだつた。典膳、今更イヤとも言へない、

强盜は、一癖ありけな面魂の奴、召捕りに來たと知ると、例のやうに、三尺餘りの大刀を拔いて身構へた。典膳は鐵扇で對した。

典膳の烈しい氣合に壓されて曲者は退つて行く。進退谷まつた曲者が、もう捨身の一刀、諸手つきに突いて來るのを、鐵扇を持つてゐた典膳の右手が、長光の柄にかゝると

「わツ」

と、曲者がよろめいて、途端にサツと血しぶきがほとばしつた。曲者は左腕を斬り落されて轉つてゐた。剛情な曲者が立ち直つて、今度は片手上段に構へたところへ、すつとつけ入つた典膳が、ヤツ、斬りつけた早わざは殘る右手を斬り落してゐた。

勘兵衛を顧みた典膳が

「いかが致しませうや、首を刎ねませうか」

と、聞いた。

「ウム、ウム」

勘兵衛がうなづくのを見て、と、謂はんよりは、と、同時であつた、曲者の躰は血煙りを立てゝどうと倒れたが、首はコロリと落ちてゐた。

勘兵衛、すかり感心して

「天晴れな手の内だ」

と、感歎した。

それから間もなく勘兵衛から二代將軍秀忠に言上し、旗本の例に加はへて典膳。召し抱へることになつた。典膳は、母方の祖父の性をついで小野次郎右衛門と名乘つた次郎右工門が死んだのは寛永五年の十一月、六十九歳であつた。其の後、一刀流は幾つもの流れに別かれてます〳〵旺盛となつて行つた。

此の長光は、師の一刀齊と共に二人の賊を斬つた譯である。

片倉小十郎の肌小袖

大原眞守の切れ味

伊達政宗の名臣片倉小十郎景綱が政宗から貰つた伯耆の眞守の刀がある、片倉家代々に傳はつた名刀であるが、此の眞守は安綱の子で父に劣らぬ名人といはれた刀匠である。長曾我部元親も、太閤秀吉薨去の後、秀吉遺品の形見分けに此の眞守を貰つてゐる、此の刀なぎが土佐にでも殘つてゐるとも堪らなく面白いものだが土佐には殘つてゐないやうである。例に依つて日本刀の著者の眞守を見ると

△眞守　父に劣さる名人なり、安綱の子嘉祥頃

△造込刄文　総て安綱に似たれども約やかなる物多く小太刀を多く造り彫物多く樋造りもありて樋淺く刄劍、梵字の類を彫る、刄文小丁字、大丁字、沸つきたるものあり、小模樣にして華やかなり刄中直刄、廣直刄もあり、沸、匂凝りて足入り申分なし、太刀銘にして長銘多く、月鄕雲客と切りたるもあり、勝と切りたるもあり。此の國には刀匠多きも備前より移住せしもの多く別に本國と作柄異らず、特に記すべきものなし、又大原系にも刀匠尠からざるも後代には名高きもの尠なし

片倉小十郎景綱が政宗から貰つた眞守は、天正十八年に大閤秀吉が北條征伐をやつた時に、奥州地方の諸將へ參向を命じた。其の時政宗は、米澤、伊達、信夫を領して勢ひ盛んであつたので多くの家臣が秀吉への降參に反對した。景綱は一人此の賛成者で秀吉と一戰をせうといふのに不承知で自分の邸へ歸つてきた。すると其の夜政宗が密かに訪ねて來て相談の上小田原參向を極めてしまつた其の時政宗は

『そなたの誠忠に酬ひてこれを與へる』

と、さして來てゐた眞守を其の場で景綱に與れた。此の刀、立割眞守と名のつく名物刀だか外に片倉家にも一つ肌小袖といふ眞守があつた、景綱の子重長が、父景綱に代つて大阪城攻めに佩して行つたのが此の眞守である。眞田幸村との戰ひに敵騎四人を切つて落したといふ業物。

直木三十五の書いたものを見ると、岩見重太郎、後の薄田隼人が

『小十郎め、不足ない相手ぢや』

と、三尺六寸志津兼氏の大太刀を片手に、左手の手綱をしつかと腰に結んで眞先き立ちに先き立つなぎとやつてゐる。どうも講談師以上ぢやないかしら、と思はれるのは、草堂筆談といふのには薄田隼人は大力の侍にて常に備前吉景の大太刀を二尺四寸に摺り上げてこれを帶びたるが、幅廣の大業物にて大阪冬の陣の時、敵三人に渡り合ひ、一人の兜の眞ツ向を拜み打ちになし、一人の胴を拂つて打ち倒したれば一人の敵は驚き怖れてにげ去る。

と、あるさうで、志津兼氏ではなく吉景らしい。

「相手にし不足はない」

と、隼人正がいくら兼氏でも吉景でも振り廻はして見たところで、片倉小十郎の銃騎兵といふのが鐵砲をドン〳〵打ちかけるのだ、、いかに戰さが上手で豪傑であつても、武器の相違は仕方がない此の時分の戰爭は鐵砲の多いのが勝つたさうだが、本當だらう。そこで、隼人正の陣は忽ち潰亂だ必死なつて、にげるナ、〳〵と叫びながら敵陣へ突いて入つたが遂に鐵砲の彈丸が命中して戰死してしまつた。

後藤合戰記といふのにはこれとは大分違つた戰死の樣が書いてあるといふ、乃ち大阪陣の時に、道明寺口を守つてゐた隼人正の一隊は水田日向守の手へ打ち向ふ、、薄田の一隊は負け戰さとなつて亂れ立つたが隼人正は一歩も退かず、其所へ水野の家臣川村新八郎が槍を以て突いてかゝつた。遂に組打ちになつたが、隼人正刀を取り直して新八郎を突かうとするけれど、刀が幅廣で自由にならない、何邊も突き損つてゐるところを、遂に組敷かれた新八郎がやつと自分の鎧通しを拔いて鎧の草摺れ外れに突き通し、弱るところを刎ね返して首を取る、新八郎敵の大將を討ち取つて、拔群の功あり家康より感狀を賜はる

とあつて、薄田隼人、鐵砲で撃たれてゐない。

どつちが本當だか判らないが、マア、片倉小十郎の方にして置かないと眞守の始末がつかない。後藤基次、薄田隼人、大阪方の大將を屠つて仙台軍の勢ひは素晴らしい。兵卒連中奥州辨で、ズウ〳〵言つて喜んでゐるのへ押し寄せたのが眞田幸村の一隊だ。幸村の前には銃騎隊の鐵砲も餘り功を奏しなかつたと見えて、全軍總崩れの負け戰さになつた、猖々緋の陣羽織を着た片倉重長が敗軍の中にあつて切齒し、暴れ廻はり、敵の四騎を眞守で切つて落した場面は相當物凄いものであつたに相違ない。此の重長の眞守は、重長が元服の時に、烏帽子親になつた伊達成實が

「之れは我が家の重代刀で肌小袖と名づけられた眞守だ、今日の祝儀に進上する」

と、言つて贈つたのを受け取つた重長が一言の禮も言はない、默つたまゝであつたが、後年、此の大阪城攻めに四人を切つて、始めて成實の前へ行つて禮を述べたといふのである。

千子村正の業物

村正妖刀は誤傳

家康の祖父清康が天文四年に守山の陣で阿部彌七郎に袈裟がけに一刀に斬られた其の子の廣忠が天文十四年家臣岩松八彌に股を刺された。關ヶ原の役で家康が槍で突かれて指先に負傷是れが皆村正

の刀や槍だ。家康の長子岡崎三郎信康が自殺した時、天方山城守が介錯した刀が之れも亦村正だ。此の爲めに徳川家では村正を忌み嫌つた。大名、旗本等皆幕府　遠慮して村正を佩さなかつた。とある刀劍談にある。眞田幸村は、徳川を敵としたのでその忌み嫌ふ刀を大阪陣の時に佩してゐた。福島正則愛用の槍も村正であつたといふことである。村正は、正宗の弟子ではなく、關の兼村の弟子である　講談にある、正宗伊勢路の旅で、槌の音を聞いて村正の家に立ち寄り門弟に加はへたといふのも嘘らしく、湯加減盗みで腕を斬り落された事件は、河内守國助の逸事を村正に作り變へて綾を織つたものだと言はれてゐる。兎に角業物である。刀劍の大家は殆ど皆が、初代村正の在銘のものを見た事がないと言つてゐる、初代は延文頃　五代位まであつたといふ説である、日本刀ではとあつて、前説とは違つてゐる。兼付の弟子か、長吉の門か何れにして、正宗門でないことは確だ

△村正　千子村住、法名妙臺　山城平安城長吉の門人といふ、初代貞治頃

△造込恰好裝飾　素反りにして無反りに近きもの多く身巾廣く鎬高く、鎬巾狹く切先延び、又中切先、大切先もあり、重ね薄く、庵低く、眞の棟、丸棟もあり、鵜の首造　菖蒲造あり、又棟薄きものあり、反りあるものは切先詰る、小脇差、短刀もありて先反り心を持ち、ふくらかれ、庵低く眞の棟もあり総て刀、短刀共、平に肉少なし、彫物は少なく稀に棒樋、丈長き素劍、梵字あり

△刃文働き　大灣、小灣、矢筈亂、大亂　稀に五の目亂、砂流しかゝるものあり、又中直刃、細直刃を見る、大灣、小灣亂は匂出來多く、匂足刃先まで抜け出て強し直刃　は沸つく、矢筈亂、五の目亂の作には亂足刃先に飛出し殊に矢筈亂の頭盛にして勇しく地中に突出せる樣殆ど形容すべからざる覇氣あるものあり、是れ世に最も賞讃する所にして　他　に其比なく初代二代に最も多し、砂流し交るものは沸荒くして叢心あり、相傳とも見え又關兼定(之定)の上作とも見ゆ、細直刃は洵に約やかにして上品に見ゆれどもよく注意する時は刃境にいかつき所あり折に皆燒の短刀も見る。

△鋩子　亂込尖り返り深、太丸地藏多く稀に一枚あり

△地鐵、肌　大杢目、柾交る、折りに荒き心の地沸つく、細直刃のときは小杢目にして　鎬地柾目になる總じて肌立ち氣味になり折りに湯走　飛燒、棟燒を見る、末代中直刃のときは地鐵最も麗し

△中心　此の作は他　類なき形にして世に之れを稱して村正中心と言ひたなご腹の變化せしものなり刀銘多く二字銘多し、稀に長銘もあり

村正の話は可成りにある、芝居で演る籠釣瓶、吉原の百人斬りも村正だ。實説では前の通りだが、山内二代藩主忠義公も村正を愛用したといふことである。では、芝居の百人斬りでなしに本當に村正が切れたといふ話はと、言へば、徳川幕府十一代將軍家齊の文政年間に松平外記の西丸五人斬りがある、此の刀が村正だ。(殿中刃傷で有名な淺野内匠頭が吉良上野介を斬つたのは内匠頭秘藏の長光であつたといふ)

徳川家慶(十二代)は、その頃、右大將樣と言つて西丸に居つた。松平外記は此所な御書院番士であつた。ある年、家慶が駒場野鼠山さいふので追鳥狩りを催すことになつた。將軍の追鳥狩は時々あるが、西丸の番士は之れには參加しないので初めての狩りである、で、勝手が判らない。狩りに慣れてゐる本丸の御書院番士の組頭皆川宇右衞門を指南番に雇つて來て練習をすることになつた。ところで、此の騎馬の勢子に最も大切なものが拍子木だ。一隊の相圖を掌るもので、馬上での駈引きだから馬術の達者なものでないと出來ない、曲淵大學が撰選の第一に擧げられたのであつたが人格が惡く、組中の人望がないといふので松平外記が選ばれた。外記は武術も馬術もすぐれ、溫厚な人物さいふので先輩をおいて拔擢された。それが禍の原因を作つてしまつた。本多伊織、沼間左京安西伊賀介、神尾五郎三郎なさいふ連中が曲淵大學に

『足下は年功さ云ひ、祿高と言ひ、人望といひ』

さ、煽て上げ

『末席の松平外記へ、こんな大切な役を仰せつけるとは怪しからん外記がさうも運動したらしい』

さ、やつた。大學、餘り悧巧でなかつたさ見え、池田吉十郎、戸田彦之進なさいふのを語らつて、外記を奸計で失策させ、遂に自分が取つて變はつた。

此の侮辱が、日ごろ溫厚な外記を激怒させた。文政六年四月二十三日。

番所の二階で、その日の夕方、戸田彦之進と一言二言話をしたかと思ふさ、立ち上つて袴の紐を締め直した。さ、忽ち、『日ごろの遺恨』さ、叫ぶさ同時に、脇差を拔き放つて書類を認めてゐる本多伊織を拔き打ちに首を落してしまつた。傍らで沼間左京が、アッ、といふと顎から咽喉へグザさ切り付けた。戸田彦之進が兩手を擴げて取押へに來るのを振り向き樣に袈裟がけに斬り下げた。神尾五郎三郎　常には武藝自慢の男だが仰天して、四ツ這ひに逃げるのを、ジロリッさ見た外記が腰へ一太刀サッさ浴びせた。五郎三郎、悲鳴をあげ、此の拍子に拔けてゐた腰が立つて、階段をころび落ちるやうにして逃げ込み、一室の内で半死半生の態であつた。間部源十郎・川村清次郎、の兩人が二階から轉げ落ちたのに吃驚して、伊丹甚五郎何事が起つたかさ、二階へ上つて行くと、外記が戸田を斬つたところだつた

『松平、ゴ〳〵』

さ、聲をかけて取押へやうさすると、眞つ向から一太刀やられ、右の手を延ばしたのをバッサリさやられた。外記は、一人も殘さず斬るつもりか、血刀を提げたまゝ番所へ行つて人影を求めたが、皆逃げてしまつて誰れもゐない、

此の腰拔け連中の集りが大分喧しい問題になつて、後人々が御役御免、改易なさになつた。太平に慣れて、武士の頽廢期であることを物語つてゐる。

外記はその場で自殺をしたのであるが、此の五人斬りが例の村正である。此の騒動の中に唯だ一人武士らしい處置をした鈴本伴二郎といふが、老中水野出羽守より褒められて御天守番に昇進したといふのである。

義士原惣右衛門

大塩平八郎讃の祐定

△祐定　初代は祐光の子なり、同銘最も多く、永正、天正時代最も上手多し。悉く世に聞えたるものなり、同銘同代中にて最も名高きものは、永正年間の與三左衛門尉にして、これに次ぐは彦左衛門尉次郎九郎(天文)源兵衛尉(天文)次郎左衛門尉(大永)其他數工あり

△造込恰好　則光に似て折に先反心あるものあり、姿強き心あり。此の作諸刄短刀は最も得意とする所にして古今通じての名人ならん忠光も及ばざる風情あり、

△刄文其他　皆一樣の刄文にして大五の目、腰開き燒頭二つ三つに割れて尖り心を持ち又は燒頭刄の中に地見ゆ。其形狀恰も蟹の剪の如き形になりたるもの多し、古作は匂深きも後代は劣るもの多く小づみて匂淺し、刄廣直刄、中直刄もありて必ず刄境に燒崩れあり

△中心　中心は最も尻張る日本刀の著者も言つてゐる如く、祐定銘を切る刀工位多いものはながら、應永より以後祐定が六十幾人もあるといふことだ、祐定は何んと言つても永正、大永の、備前國長船住與三左衛門尉祐定と銘を切つたものや、永正の彦兵衛尉祐定とあるのが最も良い。與三左衛門は天文にも天正にもあつて何れも良いものだ、中には天正以前の祐定で二字銘にすぐれた祐定があるといふことだ。

斯樣に祐定は同銘が多いためか世に多く知られて、素人には備前長船の祐定といふと非常によく切れる名刀として其の名を謳はれてゐる。

元祿十四年の秋のことであつた、大阪瓦町の武具商西村といふのへ這入つて來た一人の町人風の男があつた、仔細に此の男を觀察したならば、何處かに、町人には不似合な上品なところがあつたであらうが、當時、武士が主家の滅亡で町人になることも餘り珍らしいものではなかつたので、西村さして氣に留めず、乞はるゝまゝに鎖帷巾を出して商賣をした。其の時、此の人は、高津邊に住んでゐる傘屋だと名乘つてゐたが、代金が不足して鎖帷巾が買へないので、一寸困つた風であつたが一旦自宅に取つて返すと再び西村方へ來て、

『此の刀は久しう自分の家にあるものだが、之れを取つて呉れまいか。』

と、相談して、刀を渡し、鎖帷巾を買つて行つた。西村が後でよゝ此の刀を見てみるとそれは祐定

であつたので、マア〳〵と思つて納まつてあつた。よい買人があつたなら無論賣るつもりでゐた。その儘、月日が流れた。武具商の西村も、此の祐定の事などはすつかり忘れてゐる時分に、赤穂の義士が吉良上野介の首を擧げた。此の騒動の報が大阪へ這入つたのは大分時日が經つてからであるが、播州赤穂は大阪には近いところであるし、先年の殿中事件や、淺野家沒落やが、大阪人に深い印象を與へ、大石内藏之助の名などをポツ〳〵知つてゐる者もあつた。

義士、四十七人の中に原惣右衛門正辰がゐた、高津邊の傘屋だと言つて西村方へ祐定を置いて行つたのは其の原惣右衛門だつた、それが、仇討ちのあつた後で漸く判つた。西村は吃驚して喜んだ。それ以來此の祐定を秘藏にして人に話したりした。可成り大阪での評判になつた。原惣右衛門が佩してゐたといふだけでも此の刀はこんなであつた。討入りに用ひたものであつたならばこれどころの騒ぎではなかつたであらう。聞き傳へ一見に來る者が多かつたが、後には中井續德が此の刀のために『永正刀の記』を書いたので益有名になつた。大塩平八郎も亦讃を作つた。いよ〳〵以つて此の祐定は名高くなつた。

祐定についてはまだ話がある、あの有名な櫻田門の變の時、井伊の連中へ斬り込んだ浪士のうちに祐定を佩してゐたものが三人あつた、といふことである。生き殘つた者の話に、斬り合ひには祐定がよい、刄はこぼれるが斬れることは受け合ひだ。あの時は隨分烈しい斬り合ひで鍔と鍔とがカチ合ふほど手詰でやつたが自分の持つてゐた祐定は刄こぼれはしたが折れはしなかつた、外の二人の祐定も折れなかつた。祐定は切れる、と言つてゐたさうである。是等は實戰者の話であるから問違ひはなからう。それから

天保の頃であつた、川村軍兵衛といふのが友人と喧嘩をしてその者を討ち果した、殺された弟と親族とが仇を討つといふので軍兵衛の居所を探した、五月の中旬猿若町の芝居見物からの戻り、軍兵衛一人ブラ〳〵戻つて來ると、淺草で不意に六人の者が現はれて軍兵衛を取り圍んだ。と、一刀を拔いて直ちに一人を斬り倒し、續いて五人共斬り伏せてしまつた。そのうちの一人が天水桶の陰に隱れたのを、軍兵衛氣合諸共斬りつけると桶の一端が切れたまゝ餘す刀で肩先を八寸ち斬つた、此の刀、備前祐定で二尺四寸、裏銘はなかつたさうだ。當時、江戸中での評判であつたといふ。

平家落武者と椿山嘶

瀧本軸之進の助秀

池川郷のほとりから水は急湍となつて仁淀川の支流に注ぎ、大崎で合して更に急流となつて大仁淀川へ突き入つてゐる。夏から秋へかけて、此のほとりには河鹿が鳴いて、から〳〵とい

ふい、音を四圍の山〻響かせてゐた。

文治二年の秋、池川郷ト流の川邊に下り立つて、掌に水を掬ふとグッと一息に飲んだ、心持ち汗ばんでゐた躰に冷氣を覺えると、若者の氣持ちはさつと緊張したが再び失望と昏迷の色が面を走つた

河鹿が鳴いてゐる。

若者ははじめて河鹿の鳴く音に氣ついたやうであつたが、徐かに岩石に腰をおろすと、今度は何もかも忘れたやうに河鹿の聲に聞き入つた。

眼前の山には、蔦が櫨か楓かすつかり紅葉して人待ち顔ではあるが、凡そ人間といふ人間は此の若者の外に誰れ一人もゐなかつた。見るからに清冽な水が滾々として流れてゐる、柚も樵夫も見えない國谷の靜寂郷、あちからも、こちからも河鹿が鳴くばかり、若者は恍惚として刻の移るのも知らぬ風であつた、彼れも風流を解するものであらうか、それにしても、人跡稀なる此の深山幽谷のほとりをさまよふてゐるのは何の爲めであらう、詩歌を求むるものにしては面上に憂鬱と殺氣がある奇怪な若者の在在だ。

と、忽ち、

『アッ』と、若者は叫びを擧げると腰を掛けてゐた岩石を離れてツカ〳〵と流れ近くに走 寄つた上手の方から朱塗りの椀か一つ、川波にゆられつゝ流れて來るではないか、若者はジッとその椀に

吸ひつけられてしまつた、そして、トッ、トッ、トッ、と十間ばかり椀を追ふて川際を小走りに下流へ追つたが、

『ウム』

と、唸りつゝ、流れ行くのを見送つて何時までも〳〵佇らつくしてゐた。

『矢つ張り想像の通り都がある、あの椀の形、塗り具合、下賤のものが使ふものではない。』

若者はこうづぶやくとサッサと川畔を駈け上つて、池川郷の方へ歩いた。

瀧本軸之進は弓場の邸にゐた。壇の浦の敗戰から脱れた平家の一族は、知盛、經盛、以下八十餘名が安德天皇を奉じて四國に渡つた。文治元年三月先づ阿波山城谷の豪族田口成良の城に入つたが、源氏の追討を恐れて、祖谷へ走り、更に土佐國韮生に入り、再び安住の地を求めて峰傳ひに池川郷の椿山に遁れた。

椿山は壺中の小天地で、人跡稀な幽邃の地であつた。天皇を奉ずる平家の一門は此所に行在所を營み奉り、世を忍んで仕へ奉らうとした、一行のうちには憲七兵衛景清もゐた。すべては平知盛の指揮であつた。

行宮の造營が成ると、人々は附近に邸宅を賜はつて、秘に時の到るを待つた。南海の地を圖つてやがては京師に志を伸べやうとするの氣慨が一杯であつた。

椿山は、武者山である。何時の時代から椿山と稱したか判らないが、元は武者山であつた。椿山は潜伏の地としては好適地で、人々は此所にはじめて源氏の追究から脱れた思ひであつた、椿山に入つてからの人々は要害を造るにせつせと働いた。弓場も亦武を講ずるの場所として造られたところであつた。

軸之進は、此の弓場の守護として邸を構へてゐた。庭には桔梗が咲き、野萩が亂れ咲いてゐた、山の秋日があたたかに一杯さし込んで漸く安堵に落ちついた軸之進の眠氣を誘ふた。

「殿、變事が……」

ハッ、と眠氣から覺めた軸之進は、家臣の此の聲を聞くと、もう躰には一分の隙もなかつた。變に偏ふるの心の用意は何時でも出來てゐた、颯々たる夜風にも心を置く流轉の平家一門なのだ軸之進はきつとなつて

「變事とは、何かあつたのか、落ちついて話をしてみい」

家臣は狼狽してゐた、此の落ちついた主人の態度に耻しさを感じた。

「見聊れぬ一人の若者、殿にお會ひしたいと只今門前に訪ねてをります、旅人の風でもあり、手前にはよく見分けかねまして御座います」

流石の軸之進もギクリとしたものを覺へた、此の幽山に不意の來訪者、一人と言へば旅人でもあらうか、しかし、奇怪な來訪者である、吾れと知つての男か、イヤそうではあるまい、兎に角會つて見れば判ることだ、

「會つて見やう、お通し申せ」

と、言つて、もう軸之進は元の沈着を取り返してゐた、家臣が再び取次ぎに行つた間に軸之進は、つと立つて短刀を懐にしてゐた、男は家臣の案内に連れ靜かに座敷へ通つた。

知盛の邸、田口成良が呼ばれてゐた。成良は。京城からずつと天皇に供奉して平家一門と共に椿山にあつた。家の子郎黨藤川義藏、大黒長次郎平石金吾郎等八名が成良の家臣としてお伴をしてゐた

「何事の事變でも」

成良は氣遣はしげである。

「太したことではないが、軸之進から火急と言つて使ひが來たのだ」

「火急の使とは、氣にかゝる事で御座います」

だが知盛は落ちついてゐた

「何者とも知れぬ若者か喃、突然に軸之進の許を訪ね、來たさうな、それで喃、此の川下の村に住む匹夫だと言つて名も素性も名乘らぬけな」

「何者に御座りませうか」

『名もない匹夫たちいふ、だが言葉の様子、立居振舞、田夫野人の類とも覺へぬけ、杣人でもないと見ゆる』

『して、どうして軸之進殿の在家を』

『さ、若者はかねて他川郷に人里あると聞いてゐたが、此のごろ都ある由聞いたといふて』

『奇怪な若者、此の儘には置けませぬナ』

『マア、急がずともよい、まだ軸之進許にゐやう、それで若者は、軸之進に、こんな山里にゐる人品とも見えず、何をなされに、何時ごろからのお住居か、と聞き居つたるうぢや』

『軸之進殿、ぬかりは御座りますまい』

『無論ぢや、だが、軸之進がどう言つて返事をしたか、それは聞かずに此方へ注進ぢや』

『源氏の者の間諜ででも御座りませうか』

『イヤ、俺はそう思はぬ、だが、それがどんな素性であつても、至尊の在すところぢや、俺等の住居を知られては捨てては置けぬ、蟻穴よの堤の崩れる例がある』

『では一ト討ちに』

『イヤ、そのやうな心配はいらぬ、軸之進とても塲數者ぢや、もう用意はしてゐやう』

其の時分若者は、軸之進が

『三年前から此所に移の住んでゐる阿波の獵人、見る影もない有樣だ』

と、いふを審りつゝ、不審の眉を寄せて、軸之進の屋敷を辭するのであつた。短日の、落日は釣瓶落しに早く、鳥さへ鳴かず、唯だ河鹿が川音に和して何時までも啼いてゐる中を闇に包まれて若者は川下へと歩くのであつた。

月が出た。美しい月光に彩ごられた山も川も、今の若若には感興かなかつた。軸之進の人品、それから周圍に感ずる何ものとも知れぬ氣魄、それが若者の疑惑であつた。疑惑はそれからそれへと深まつて行く、

若者は一度立ち止まつて、月光を浴びてゐる椿山のほこりを見返つた。

『ハテ、あの仁が持つ氣魄こいひ、あたりに感ずる恐ろしい壓氣だ。俺れの 想像する通りの平氏の落武者かナ、モ一度行つて見なければ俺には判らない、だが恐ろしい氣魄だ』

こんな事を考へてゐた。

道端に茂る野萩であらう、月の光りに黑々と搖いだが、何氣なく立去る若者の後に二個の人影が現はれて地上に大きな二つの影を引いた。

聲は鋭かつた。

『待たれい』

と。呼ばる、者にも用意はあつた、際も見せない構へである。、若者は靜かに答へるのであつた。

「待てさは某の事か」

「さうだ、お前の事だ」

「折角の事だが一日の旅の者だ、貴殿方に取らする路用とてもない、然し、折角の推參、何か進ぜやうか」

若者は憎いばかり落ち付いてゐた。

もう問答は無益であつた、故意か、知らずにか、山賊の類と見られたのはむしろ幸であつた。

「斬らう」

二人は、言ひ合はしたやうに拔き連れた。一人が美事空を打つて泳いだすきに、若者の手にも短劍が拔かれてゐた。蟲も殺氣に打たれて鳴く音を止めたが、月の河鹿は無心に鳴いてゐた。

タッ、タッ、と押されて行く、それは不思議にも一人の若者ではなく剛刀を振り冠つた二人である

幾度か、若者に外されて、二人は懸命に死力を振つた、

「エィッ」

裂帛の氣合だ。若者の腕が勝つてゐる。

幾度か戰場に血を吸ふた勇士の太刀風も、一個匹夫と名乘る若者の氣力と腕とに押されて行く。

だが、逃しては一門の大事である。二人の武士は焦つてゐた。

短劍が閃らめいた。

「アッ」

身を變さうとした一人が草の根に躓いてどうと倒れた。刹那であつた。

「呀ッ」

と、叫んだ若者が棒立ちになつた。どうといふ地ひびき。若者はたほれてしまつたのだ。咽喉には月光を浴びた短刀が突さされて、黑い血がごろ〳〵と流れてゐた、何處よりか飛んで來た手裡劍が遂に無名の此の豪勇を奪つてしまつたのだ手裡劍の主は、若者がたほれると、ジット見すましてものを言はず足早に立ち去つて行つた。何者？それは二人の武士には大方想像が出來たであらう。

死躰を谷間に落して、二人の武士も亦消えた。

蟲が又鳴き出した。河鹿の聲はいよ〳〵澄み切つてゐた。

若者の投げ込まれたのは、不飲ケ谷といふ、後人は、此所に無名の若い英魂を吊ふために持佛堂を建立した。その若者が何者であつたか知る人は絶えてなかつたのである。

此の事があつてから、知盛以下の一門は、天皇に乞ひ奉つて行宮を横倉山内へ遷し給ふた。

軸之進は、弓場の邸に留まつて萬一に備へてゐた。

池川町椿山に瀧本軸之進の墓所がある。軸之進椿山に留まる時、天皇その忠節を嘉し給ひ、鎧一領、刀劍一振を賜ふ、御下賜刀、長さ二尺二寸四分、最鎬鍛で、二百足丸と稱するもので備前助秀の作である。助秀は友成から三代目ほどの名工である

大阪城濠中の吉光

秀吉が第一の秘藏刀

△吉光　藤四郎　後宇多帝の御宇、古今通しての名匠にして名聲海内に鳴り、造る所の刀劍絶妙世に其比なしと稱せらる世傳へて寶刀と爲す、藥研徹しの美稱あり、名物一期一振其他寶刀數多し

△系統時代　國吉子或は則國子といふ正元頃

△造込恰好裝飾　太刀、刀、少なく稀に小太刀を見るも小脇差短刀多し、一期一振は刀にして珍らしきものなり、太刀は京反りにして反り高く細く鎬高く、眞の棟にして切先詰り、短刀は筍反りにして重ね厚く造込豐かにして肉あり、小脇差は稀に先反りを見る、庵は高く眞の棟多く稀に丸棟もあり、彫物は劍、梵字、護摩箸、腰樋の類多く氣品高し、稀に精妙なる彫物を見るも珍らし

△刄文働き　細直刄最も多く中直刄もあり直刄は强き沸にて二重刄の如くなり殊にふくらの邊に多く上よりくい下る氣味あり、稀に大丁字あり、乱、小乱もあれど是亦珍らし、よく沸えて匂深く沸の光、强く少しく荒き心を持ち刄中凝りて足入り氣品高く其麗はしきこと殆ど稱讃の辭なき程なり此作の口傳は腰元直刄中に表裏共小豆を列べたる如く五の目六ツ七ツ揃つて入り沸、匂結晶して寶玉の如く上は直刄にして刄中遺憾なく働きを現はしふくらに至り特に刄巾細くなりて沸美しくつき鋩子に至り益沸烈しく洵に美事にして非凡の技現はる、打のけ、金筋、稲妻、等働き盛なり、吉光の腰刄は最も注意すべき特徴にして直刄に此特徴なきものは吉光と見るべからずといふ位なり。

△◇子　燒詰多くして火焔、沸崩になり返り淺く美事なり、沸は他作よりも荒き心なり、氣品高く他の刀匠の遠く及ばざる風情あり。

△地鐵、肌　粟田口物は總じて地鐵、肌最も良きものにして地沸の美しさ又地鐵の强きこと等は他作の遠く及ばざる所なれど吉光は殊に地鐵細かく、梨子地にして氣品高く寶玉の肌を見るが如く、よく澄みたる中に細かき地沸多くつき、沸うつもむら〳〵と起りて活けるが如く陽炎の如き態は喩ふるに物なく、折に大模樣なる板目柾目を交へ、地けい其他の働き遺憾なし、刄文の精巧も世に双ふものの稀なりと雖地鐵地沸の美妙秀絶なるに至つては古今其匹儔を見ず

△中心　細くして最も長く區高く、先詰り粟尻になり必ず平に肉あり、棟は角にして小肉を持ち稀に振袖を見る、ヤスリは美事に極まり、切りになる。其精巧他の及ばざる風情あり、二字銘多く、

字體は種々あり、吉の字の口大なるを大口といひ、小なるを小口と云ふ。

天下の三名作と言はる、藤四郎吉光である。日本刀の著者が筆を極はめて賞讃しても敢て過賞ではあるまい、『土佐の吉光』は、此の吉光の弟子で、銘の切り方まで似てゐるところから往々にして土佐吉光が此の吉光に化けて成金家の刀簞笥へ這入つてゐると言はれてゐる。偖て、その吉光を持つてゐた有名な人に足利義滿がある。泉州堺に立て籠つた大内義弘を追討の時に、義滿、篠作りといふ名物の則宗の太刀を佩き藥研藤四郎と呼ぶ吉光の差添へさして出陣したといふことである。吉光には、太刀、刀がなく、唯た一振りだけであるとこふところから一期一振りと名のついた太刀である。細川幽齋が持つてゐたもので、幽齋は之れを太閤に献じ、それが秀賴に傳はつてゐたが、大阪落城の際燒けたのを直して紀伊の頼宣公に傳はり、維新の後御物となつたといふ話である。

吉光に骨喰藤四郎といふ刀がある。之れが天下の名物の一つだ。元は薙刀であつたのを、豐後の大友氏時が刀に造り直して差してゐた、足利等氏、京を落ちて九州に遁れた際に氏時が

此の刀は、骨を切ること實に泥を切るがやうである。故に骨喰と申傳へた名刀である

と言つて尊氏に贈つた、之れが足利家代々の重寶として義輝にまで傳はつて來てゐた。足利義輝は、劍を塚原卜傳に習つて奥儀を極めた人であつたので、松永久秀が室町御所を襲つた時には隨分働きをしたが遂に殺され、その時此の吉光も奪はれた。

大友義鎮がこの事を聞いて、老臣を遣はし、多くの金銀を久秀に贈り

骨喰は先祖より將軍に献じた重器だからどうか大友家へ賜はりたい

と、懇望した結果、大友家へ戻つてゐたのを、秀吉九州征伐の際に、大友家から献上させた。後、大阪落城の際、濠の中から捨ひ出されて家康の手に入つた。秀吉在世の時、ある日、家康に、此の吉光を見せて、

我家第一の名刀は是れだと、自慢したと言はれてゐる位の吉光である、秀吉が天下の名刀を求めて數ある中から之れを第一、と言つた位だから餘程の名作であらう。

骨喰藤四郎についで有名なのは、前に記した藥研藤四郎である。將軍義滿の差料であつたが後に此の刀は畠山政長が貰つてゐた。その畠山政長が細川政元に攻められて、自殺せんとし、此の吉光の短刀を拔いて腹に突立てたが切れない、三度び突立てたが少しも切れないのでその短刀を投げつけるゝ傍の藥研に當つてグザとそれを貫いた。それで其の名がある、と言はれてゐるが、義滿の差料であつといふのは誤りだといつてゐる人もある。後織田信長の手に入つてゐたが、本能寺の事變の時燒けてしまつたそうである。

吉光には名物が多く、何々藤四郎といふものが澤山あるが皆短刀だ。伊達政宗が秀吉より拜領の鎬藤四郎といふのも短刀であるが、政宗之れを秘藏するのを知つた德川家光が内藤外記を以つてそれ

を所望さした。

此の藤四郎は故太閤の御遺物として賜つたものであるからお受けし難いと、斷り、家光へ献上しなかたが、政宗が病氣になつた時、嫡子忠宗へ將軍が鎬藤四郎を欲しがつてゐるが、ワシはわざと献上しなかつた、ワシが死んだら其方から献上せい、將軍はきつと喜ぶだらう、其の時に仙台城の二の丸を築く事を願出でて許しを得るがよい、將軍は必ず許して呉れるであらうと、遺言して死んだ。忠宗父の遺言通りにすると、果してそれが許されたといふ話がある。中々難しかつた城普請の許可を短刀一本で取つたなき揮つた話であるが、當時、名刀は一國一城にも換へ難い、と言つた話がある位だから本當のことであらう。

烈女勝子の仇討

彦四郎貞宗の短刀

△貞宗　彦四郎、初名助貞、本國江州高木。正宗養子、建武頃。

△造込恰好裝飾　刀華表反りにして無反りに近く、重ね厚く身巾廣く、平肉豊かに、切先尋常にしてふくらつき。眞の棟、丸棟多し、短刀は重ね厚く京傳の如く品位ありて先反りつく、平肉最も豊かにして彫物多く又好みて片切刄を作る、總じて正宗に似たれども約やかにして品位高し

△及文働き　総て正宗に似て沸砂流等一切の働き豊富なれども比較的穏やかにして上品なり

△鋩子　沸、他よりも荒き心になりで地藏燒詰、火焔返　深く荒き心の沸にて崩る、其他働き正宗に劣らず

△地鐵、肌　正宗同樣十分なる働きありて京物とも見るべき地鐵多く、殊に短刀は地鐵最も麗し。

△中心　正宗に同じ　正宗は肉ありて詰り心になりたなご腹にして尻は劍形棟小肉あり、鑢は筋違、大筋違刀銘多く、二字銘もあり、長銘もあり、短刀に振袖も見る

此の話、有名過ぎるほど有名であるが、貞宗を語るには最も相應しい物語り、烈女傳中の花。津田勝子の仇討ちだ。仇討ちに用ひた短刀も正宗だとしてゐるものもあるが刀劍家の調べでは正しく貞宗の短刀といふことになつてゐる。

織田信長の弟織田信行、春日井郡岩倉の城主で五萬石小姓の津田八彌、美男で才智があるので信行に寵愛せられ、十八歳で小姓頭に重用される。

信行の侍女勝子、京都生れの美人だ。執權佐久間七郎左衛門、兄は信長に仕へて勇名がある佐久間玄藩盛政だ。七郎左衛門、兄に似て之れも勇猛の士。然し、いくら勇猛の荒武者でも女には又別だ

目尻を下げて勝子に惚れ切つてゐるが、女の方では何んとも思つて呉れない、主君の信行へは此の悶えを流石に打ち開けることが出來ず、信長からの附家老柴田權六に、胸のうちを打ち開けて、主君へよろしく、と、相談して見ると

「もう遲い、勝子には婿が決まつてゐる」

で、聞いて見ると、その婿といふのが津田八彌であつた。主君が、兩人に納得させて緣を結んでしまつたのだ。七郎左衞門、相手が八彌と聞くと嚇つとなつてしまつた。何の武功もないのに主君の寵愛を擅にしてゐる八彌だ　あんな男、いざ戰場となつても何んの役に立たないと日ごろから癪に觸はつて罵倒してゐる八彌である。掌中の玉を奪はれたやうに感じて逆上せんばかりに激怒した。

永祿三年八月十五日、名月の夜、岩倉城で觀月の宴、宴が終つて、信行が

今宵は內祝言をさせるぞ余が酌をしてつかはす

といふので、人より遲れて退出し、八丁縄手へ差し懸ると、待ち設けてゐた二人の覆面、ヒウと突き出す槍の爲めに刺されたが八彌も案外氣丈、一刀を拔いて渡り合つたが遂に殺されてしまつた。屍骸を見付けたものが

死體の側に短刀が落ちてゐました

と言つて八彌の横死を主君に注進した上その短刀を差し出した者があつた。此の事を聞いた勝子が

『二世を契りました上は良夫で柳座ります、何者にもあれ、探し出して良夫の仇を討ちたく』

と、主君へ申出た。其所へ來たのが池田勝三郎信輝、落ちてゐたといふ短刀を見て、

『此の短刀、貞宗作、金龍の目貫があるところから信秀公「龍丸」、と御命名なされ、信長公へお讓りなされたのを、公より佐久間玄番へ賜り候もの、それを玄番より弟七郎左工門へ讓つた由、先達丹羽五郎左より承はつてゐた。』

と、いふ。偖ては、七郎左工門の仕業、と、早速七郎左工門を呼びにやると、その夜のうちに逐電してゐた。

勝子はいよ〳〵悲歎にくれて、仇討を願出ると、佐久間の所在が判つてからにせよ、といふ。勝子も仕方なしにそれを待つてゐると、七郎左工門、美濃へ走つて稻葉山の城主齊藤道三の許へ駈け込んだことが判つて來た。佐久間の武勇は美濃でも知つてゐて道三早速同人を足輕大將にして抱へた信行、兄信長に賴んで七郎左工門の引渡しを談判して貰つたが、

『道三を賴つて來たものを尾張へ引渡しては齊藤家の弓矢の名折れになるからお斷りする』

きつぱりした返答である。仕方がないので信行、勝子を召して

『其方の望みに任せて仇討を許す、八彌には恨みの短刀だ、之れを持つて行くがよい』

例の貞宗の短刀を出した。有難く御禮言上で、權七といふ老僕を連れて出立する。日野根備中守の

肝煎りで道三夫人に侍女仕へ。

此所で齋藤龍興が勝子に惚れたり、勝子がそれを利用したりする一件を書くと長くなるから略して兎も角も勝子は機會を窺つてゐると、年中行事の騎射の催しがあつた。それが、遂に仇討ちの機會となつた。此の日佐久間七郎左衛門、第五番目の騎射、首尾よく射當てて馬を下り、道三御前で盃を貰つて下つてくるのを屏風の影から躍り出た勝子

『良夫の仇』

と、言ひさま、例の貞宗でグザと横腹を刺した。

『己れ推參』

と、七郎佐工門が勝子の髪を掴んで振り廻はさうとするのを、女ながらも必死、二度目の短刀で、さしもの荒武者グタリと倒れてしまつた。

滿場大騒ぎである。道三も一驚したがすぐ備中守を呼んで仔細を聞く、斯々の譯で、と仇討ちであることを言上したが、道三は承知しない

『良夫の仇討ちであつた貞烈は奇特だが、武功の士を討たせて其儘には置けない』

といふのである。どうしても處刑にするといふのを夫人の計ひで、家康の家臣大須賀五郎左衛門へ家臣の緣故で遣してやつた。

すると兄の佐久間盛政が大怒り、家來を岡崎に派して勝子を狙はしたが、此方も用心して中々手がつかない其所で盛政から信長に賴んだので、信長使者を立てて勝子引渡しを交渉をしたけれど、そん女はしらないと、家康は取り合はない、今度は信長が怒り出して、池田輝政を使者にし

『一婦女子の爲に兩國不和になるやうなことがあつては詰まらない、勝子をどうか渡して貰ひたい』

と、掛け合ふと

『たとへ一婦人にもせよ、當家を見込んで駈け込んで來たものだ、信長殿の威武を恐れて渡したことあつては世上の聞えも面白くない、此のことは承引し難い』

と、家康も强硬だ。

之れを聞いた佐久間盛政、激怒して、柴木小七郎、山口伊織の二人を岡崎城下へ潛入さして秘に勝子を殺さうとしたのを、早くも知つた家康が、二人を召捕らせ首を晒して

『此者ども佐久間盛政の家士と僞り岡崎に忍入り賊を働き候段不屆に付獄門に掛くるもの也』

と、立札をした。之れが信長に聞えると、又大怒り。其所で信長から强硬な談判が持ち込まれる。

本當に此の兩雄が危機を孕んでしまつた。

『此の上御承引なくば兩國の和親も今日限り』

といふのだから家康も考へなければならなかつた。前には今川あり、後には武田あり、織田方との

和親は最も必要な時代の家康であつた。
こうなつては勝子もじつとしては居られない。
『八彌樣の後を追ふて』
と、なつて、例の貞宗で自害してしまつた。本尊が自殺したので盛政も文句が言へない。それで萬事が濟んでしまつたのであるが、一婦人の仇討とはいへ、齊藤道三、同じく龍興、織田信長、德川家康と當時の英傑が、此の事件に踊つてゐるのが、一層之れを有名にしたのであつた。此の貞宗、三人の命を奪つてゐるが、モシ之れが村正と同樣德川家に關してゐたら、貞宗は崇ると、後世へ傳へられてゐたかもしれない。

新納武藏守の愛刀

三　池傳太光世

講談などでよく出て來る、三池傳太光世、筑後國の名匠である。承保頃の人で、特に棒樋の名人と言はれた刀匠だ。此の三池傳太の名刀を佩してゐたのが薩摩の勇將新納武藏守忠元。その剛勇武藏守のことを書く前に先づ傳太光世のことを調べて置かう。

△元眞　元眞法名光世俗名三池傳太。名匠にして殊に棒樋の名人なり、名物多し
△系統時代　三池の祖、承保頃
△造込恰好裝飾　品位最も高く、華表反りにして反り高く身巾廣く、平に肉最もつきて重ね薄き心の物多く、鎬高く、鎬巾廣く、庵高く、眞の棟丸棟も見る、切先詰り干肉取り良く、稀に鵜の首造り、菖蒲造りも見る、小脇差、短刀は筍反り多く又切刃も見る、棒樋最も多く、巾廣くして淺く、樋先正しく、肩いかりて强く、止りは角止め、又は中心迄掻き通すものあり、毫ち叢心なく、古今通じての名人なり、槌にて叩き仕上るといふ、中心の樋の內に槌目殘る。
△刃文働き　直刃乱心を持ちて足入りたるもの多く、小沸上品につきて匂深く、匂足入り、金筋打のけ交、上手にしておとなしく上品なり、稀に、大乱に出來たるものあり、總じて京貞刃と見ゆるもの多し
△鋩子　大丸多く燒詰め心になりて沸最もつき、匂深く足入る。
△地鐵、肌　最も細かく、地沸上品につき躍しく、板目肌何となく落つきあり、優しくして京物の如し
△中心　上品にして肉あり、棟角にして小肉あり、先肉つきて淺く栗尻多く鑢は切り多く、筋違ひもあり、檜垣も見る、元眞、光世、傳太、と切るもの多し、三池傳太と言へば愛刀家が涎を垂らす

名刀だが、それが、新納武藏守の持物だつた傳太であると、言つたなら、垂涎三尺どころではない武藏守は、島津家の世臣で、代々肥後堺の大口城の城主であつた。忠元は、島津の鬼武藏と言はれた程の剛勇であつたが、細川幽齋を和歌の師匠として和歌も作つた、又詩も作つた風流人でもあつた。そして、常に論語を愛讀して陣中でも手放さなかつたと言はれてゐる。忠元陣中で愛讀した論語には、火繩の火が數ヶ所に飛び散つた焦げ跡があり、今でも子孫に傳はつてゐるさうである。肥後の加藤が常に薩摩を窺ふ、といふのを要心して

「肥後の加藤が來るならば烟焔肴に團子會釋、だごは何だい、鉛だご。それでも聞かずに來るならば首に刀の引出物」

と、いふ有名な俗謠は此の武藏守の作で、賴山陽の兵兒の詩は、此の俗謠を直したものであるといふことである。薩摩へ來て見よ、三池傳太が血を吸ふぞ、といふ意氣軒昂たる猛將を髣髴として見るやうである。秀吉固より鬼武藏の名を知らぬ筈はない。薩摩を降して、あはよくば忠元を臣下にせんとする望みを抱きつゝ、九州征討の軍を發し、長驅して、海陸兩路より薩摩へ討ち入つた。此の時秀吉の軍は忠元が守る大口城は打ち捨てゝ攻め入つたのであつた。

島津家も遂に秀吉には抗し得ずして降伏し、日向、大隅、薩摩の舊領を元の如く島津家に賜はつて芽出度く戰ひが終局したが、武藏守だけは秀吉に降伏しない、秀吉から使者を遣つて、利害を說き

降伏をを勸めたが頑として應じない、仕方がないといふので、蒲生氏鄕、立花宗茂、其他が五萬の大軍で大口城を包圍して攻め立てた。

武藏守の方では、かねての覺悟、イザ來れ、とばかりドン〳〵鐵砲を城中から擊ち出して應戰する此の時分から薩摩は他よりも鐵砲は進んでゐたらしい。秀吉の率ゆる軍勢は十五萬、といふのだから、先鋒の五萬へ後の十萬が加はつて攻める譯だがビクともしない。數日間も此の籠城がつゞいた戰さ上手の秀吉だからこんな小城位何んでもないことであつたであらうが、既に島津家が降伏してゐるし、武藏守の剛勇を知つてゐるのだから萬一殺してもしては、といふ懸念もあつたであらうしよい加減にあしらつてゐたであらう。島津家でも見兼ねて

『吾等すでに降參の上は、其方も速に開城して殿下を迎へてはどうだ、吾等のために考へて呉れといふやうなことを言つてやつた。それで漸つと、城を開いて秀吉を迎へ、見參に行つた。ところが、此の小さい戰さではあるが、謙信塩を信玄に送る以上の面白い話がある。

忠元が、秀吉の大軍を引受けて一戰せうとした前に當つて、和歌師匠である細川幽齋の許へ忠元から手紙が來た。使者が持つて來た手紙を受取つて幽齋が讀んで見ると

『小城だが殿下の大軍を引受けて籠城するに就ては兵糧が足りない、どうかその兵糧を送つて頂きたい』

と、ある。大抵の者なら面喰つて使者を追ひ返すだらふが幽齋だつて尋常の男ではない、此の事を秀吉に申出でた、すると

「兵糧が足らぬならいくらでも送つてやれ」

幽齋そこで數百俵の米を送つたといふのであるが、武藏守の「よい度胸」も度胸だが、秀吉の度量も亦大きい。本當の太つ腹といふのはこんな人のことをいふのであらう。現代の實業家や事業家が、少し金でもきれいに出すと、太つ腹だと褒めるが、太つ腹が違ふ。尤も秀吉は本氣で戰爭する氣もないのであつたであらうから「可愛奴だ、何處までやれるものか、兵糧位送つてやらう」といふやうな多少茶目氣分が手傳つてゐたかも知れぬ。武藏守が秀吉の前に出た時に

「あんな小さい城にこもつて、ナゼ俺に鐵砲を向けたのだ」

と、問ふと

「忠元、僅かに千人の小勢を以つて、殿下の大軍を喰ひ止めたことを後世に迄も傳へたく」

「フム、天晴れの勇士、ソレ盃を取らせ」

で、大盃へなみ〳〵と注いで盃を下賜とあると、忠元　髭ムシヤで、一杯に髭が生へてゐるのを、それを掻き分けて大盃を口へ持つて行くのを傍で細川幽齋が

黑髭をチンチロリンと捻りあげ

と、やつた。忠元、グツと大盃をのみ干すと

口のあたりで鈴虫の鳴くと附けた、といふ話がある。定めて、秀吉が興に入り、滿座はさよめいたことであらう。それから後に、秀吉が、「八万石を與へるが直參にならぬか」と、內命を與へたが

「八萬石、島津家より申受くるならば承知するが、殿下より直々に頂戴することは御免蒙る」

と、斷はつた。

其の豪勇新納武藏守が愛用してゐた三池傳太光世、巾廣で、刀身に大きな樋があり、太刀である。此の刀、西南戰爭の時に分捕品となつてゐたが、後に西鄕從道侯の手に入り、現在は岩崎家にあるといふことである。

春日局强盜を切る

豐後國紀の正恒

春日の局が、筑前の名島で二人の强盜を切つた刀は紀の正恒だといふ。

此の正恒は、豐後の國行平の孫であるとも又は門人であるともいふ。日本刀には

△正恒　紀正恒といふ鬼神ともいふ。

△造込、恰好　太刀姿行平に最もよく似たれども少しく劣る。彫物棒樋等少なく、鎬造多く、折に菖蒲造も見る

△刄文、働き　概ね行平に似たり、直に灣小足入り、沸付くも行平程にならず、腰刄廣く、丁子を見るもの多し、又小丁子乱もあり

△鋩子　大丸、燒詰にして行平より少しく劣る

△地鐵、肌　行平の如くにて働きあり、梨子地の如くにして麗し、大模樣の杢目に柾交るもの多し

△中心　行平に似たりとある。

春日局は、日本烈女傳中の一人で、男勝りの烈婦であつたことは一般によく知られてゐる。美濃の齊藤の一族、齊藤伊豆守明智光秀の妹を娶つて妻とし利三を生んだ、之れが有名な齋藤内藏之助だ その娘ふく、が乃ち春日局である。春日局といふ名は、後年後水尾天皇から賜はつた局の名で、德川家に仕へ三代將軍家光の竹千代時代を養育してゐた時分にはおふくであつて、春日局ではない。おふくは、稻葉佐渡守の妻であつた、後ち離緣となり、京都に住んでゐたのを板倉伊賀守が推擧して竹千代の乳母兼養育係りとなつた。

春日局が强盜を切つたのは、稻葉正成の夫人時代である。正成は小早川秀秋の家臣であつた。

文祿四年、秀次が、太閤の咎めを受けて紀州の高野山に赴いた時に正成は主君秀秋の命を受けて伏見へと赴いてゐた。その時分、春日局は、筑前の名島にゐて留守をしてゐた。

その留守宅といふのを知つてか、知らずでか、ある夜五人組の强盜が押し入つた。春日局に使はれてゐる下婢下僕共は皆恐れおのゝいて、一室へ逃げ込みブル〳〵とふるへてゐた。

後に、竹千代を守り立てゝ、秀忠夫人と拮抗し、家康をわざ〳〵駿府から江戸まで引つ張り出したほどの春日局である。

總明にして勇氣ある春日局は、物取り强盜位に恐れてはゐなかつた。そつと起き出ると、枕元にあつた正恒の刀を取つて室を出で、杉戸の蔭に隱れて賊の踏み込んで來るのを待ち受けた。

と、一人の賊が立ち入つて來た。春日局は、之れを見ると、拔き打ちに股のあたりを切り拂つた。

「アッ」

と叫んで、倒れるのを見て、續く四人の賊が驚き狼狽するところを又一人切つた。

「キャッ」

と、悲鳴を擧げて倒れると、殘つてゐる賊はもうオヂ毛づいてしまつた。倒れた二人を捨てたまゝ遁走してしまつたのである。

「流石は、齊藤内藏助の娘である」

と、此の評が、遠く伏見へも傳はつた。

春日局、十九歳の時である、といふのだから、凡そ、其の人物のほどが窺はれる。後年、板倉伊賀守が、徳川家に推擧したのも、此の噂を聞いてゐたからであるといふ。

春日局の活躍の本舞台は竹千代擁立の時代からであるが、それは、正恒とは關係のないものであるから、後日、何かの機會にゆづることゝする。

業物關ノ兼常

山内一豊の袈裟斬り

山内一豊、若年の時の事羽柴秀吉の家臣梶原某、美濃の武士で剛勇の者だつたが、敵方に内通する疑ひがだん〳〵判つて明らかになると、英斷の秀吉だ

『斬つてしまへ』

と、いふことになつた。此の上意討ちの命を受けたのが三人、梶原は強いから一人では仕損ずる虞れがある

山内一豊、その一人に選ばれたが籤を引くと三番目の切り手だ。

『チエッ』

と、三番籤を殘念がつたが仕方がない、

梶原が美濃國名柄川の堤普請の指揮に行つてゐるところへ出掛けて行つて切らうといふ相談、そこで三人は遊山といふ觸れ込みで梅ヶ寺といふ山寺へやつて來た使の者に

今日は此所へ遊山に來てゐるが、辨當持ちで來てゐるので遊びに來て貰ひたい

と、言つてやつた。

それは珍らしい、早速行つて御馳走にならう

梶原は、使の者を案内にして梅ヶ寺へとやつて來ろ。三人の者が門外へ出迎へに行つて見ると、梶原の家來が十人餘りも一所に主人の側にクツ付いてゐる。出迎へた三人は仕方がないから梶原と連れ立つて寺内へ這入つて來た。山内一豊なか〳〵頓智が利いてゐた。

スツと、一足後へさがると

『梶原殿、お供の衆がこみ合ふて御座る』

聲をかけると、梶原が振り向いて立ち止まつたまゝ、

『もつと後からこい〳〵』

と、ウカ〳〵家來を追ふやうに制して後戻りをした、離れて立ち戻る隙を見た一豊

『上意ぞ』

聲をかけると斬つけることが一所だ關の兼常、一刀深く肩先きへ斬りおろしたので、梶原がよろめく

『上意、上意』

で、後の二人も切りつけて難なく倒してしまつた。

此の時一豐、その兼常が大骨を切れなかつたといふので聊か不快であつた。

天正六年、秀吉、兵を中國に進める、敵城落ちて、秀吉の軍が城内に殺倒した時に、馬屋の中に素裸の大男が居た。

目敏く見つけた秀吉が、

『山内、山内は居らぬか』

と呼んだ。一豐が急ぎ秀吉の馬前に出ると、

『例の兼常だ』

と、裸の男へ顎で知らせた微笑した一豐、ツウと寄ると、抜き打ちに美事な大袈裟斬り。見てゐた秀吉が

『素早い大刀風、美事ぞ』

褒められて、前年の不快をすつかり拭ふた一豐であつた。此の兼常、まだ人を斬つてゐる。

一豐の一草履取り不埒を働いて、大立腹した一豐

『下郎、逃ぐるナ』

吃驚した草履取りが、命が危ぶないと素早く逃げ出した。門前に湖水があつた。追はれて、九死に一生の逃げ場ザンブと、水中へ飛び込んだが、飛びこむ刹那に

『ヤツ』

と、抜き打ちの一刀、下郎は、之れも大袈裟に斬られて血に染んだ水が散つた。無類の切れ味。といふので一豐秘藏の一刀であつた。日本刀に云ふ

△關兼常　大和手搔より來れる兼永の後、初代は應永ごろ

△造込恰好　華表反りにして先反の強く又無反りに近きものあり、重ね普通、鎬低く、鎬巾狹く庵は低く切先延び心になる。

△刃文、　働き直刃小亂五の目亂、灣に亂れ交るものあり、折に五の目丁子交るもあり、沸少く匂出來にして叢沸つく、又刃縁燒き崩れたるもあり廣直刃に灣交りたるも見る。

△鋩子　乱込尖り返り深。又は小丸にして尖り心を持つものあり

△地鐵、肌　李目柾交り肌立ち折々白らけうつりを見る、棟燒も見る

△中心　詰りて肉無く棟丸く、栗尻　劍形にして鑢は大筋違、鷹の羽鎬筋違平切り等あり短刀には檜垣多し。

武田信玄秘藏刀

名刀郷義弘の話

箱根から西に柳里恭と化物とはないと。いふ諺がある。それと同樣の言葉が刀劍にもある。郷と化物は見た者がない。といふのである。それほど郷義弘は少ないものである。大閤時代に、吉光、正宗、義弘を天下の三作と稱した。義弘は越中松倉の人、正宗の弟子で二十七歳の時病死した。若死にであるので從つてその鍛刀が少ないのであるが少ないので珍重されたのではなく、事實すぐれてゐるからである。加藤清正が肥後三十萬石に封ぜられた時に、大閤秀吉より賜ふた刀が郷義弘であつたといふ。二尺三寸四分、大兵の清正には少々寸が短かい。清正は、身の丈けが高い人であつたので常に長刀を好んで佩してゐたが、大閤恩賜の此の名刀は離さず、朝鮮征伐の際にも義弘を差してゐた。此の刀は肥後郷と稱して名物牒に加はつてゐるものであるが清正が紀州の頼宣公へ娘を嫁入らす時に引出ものとして紀州公へ贈つた。

△義弘　越中松倉住、郷と稱す。

△系統、時代　正宗十哲中の最上位にして秀絶の作者なり、正宗のすぐれたるものを郷と鑑定せよ

この古人の教への如く悉く逸品にして其作少なく世に最も珍重せられ名物も尠からず元應頃

△造込恰好裝飾　刀多く小脇差、短刀稀なり、華表反りにして反り淺く重ね厚く、身巾は頃合にして平の肉豊かなり、鎬高く、鎬巾廣く、庵高く眞の棟多く中切先延び心になり又は小切先もあり總じてふくらつき豊なり棒樋を好みて造り深くして肩いかり、樋先下る、此作相傳としては姿優しく京風の心ありて最も氣品高し

△刄文働き　濶多く総じて大模樣にして腰に乱心あり、又横手下の邊大摸樣に乱心を持ち匂深く沸細かにして最多く上品にて勢あり、華やかにして靜なり、凝りて足入り刄模樣麗はしく地の中に陽炎の如く沸崩れて入り少しく荒き心になり金筋稻妻等すべて上品に働き洵に美事なり、廣直刄のときは上にゆくに從ひ追々亂心多くなる、總じて燒巾廣けれ共品位下らず

△鋩子　小丸返り深く荒くして強き光り沸最も多くつき匂深く沸凝りて足入り氣品高く美事なり小丸一文字に返へるもあり又一枚の如き物あり、切先内總體沸えて金砂子を散り敷けるが如く麗し

△地鐵肌　大板目にして池沸つき如何にもむつくりとして品位高く正宗よりも勝れたる鍛振りなり

地沸麗しく地けい湯走り等もすべて美事にして賞讃の言葉なく、或は粟田口上位の鍛振りに勢ある相州傳の大板目を交へたりとも云ふべきか、其の技殆と絶倫といふべし、正宗の勝れだるを郷と見よとの古人の教は蓋し此邊より起りたるものならん、折に棟燒を見るも品位下らず

△中心品位高く肉ありて反り心を持ち、劍形淺く、棟角にして小肉あり、ヤスリは切り筋遠ひもあ

り二字銘多し

此郷義弘で名高いのは武田家傳來の義弘である。武田信玄は此の義弘と左文字とを殊の外秘藏した信玄が死んてから此の傳家の二刀は子勝頼に讓られた。天正十年、勝頼は戰ひ敗れて天目山に據つた。それは山麓の田野といふ山里であつた。此の名家も如何ともする能はず名將と言はれた信玄の子も、遂に滅亡の時が來たのである。しかし、流石にその斷末まで二つの名刀は放さず、勝頼は自殺する時に、義弘で先づ夫人を刺した、續いて姫、妾、を刺し殺し自分もそれで切腹して果てたがその時から、此の刀の行方が判らなかつた。大閤の時分に義弘は、何時の間にか大閤の手に入つて甲斐郷、といふ名がついて、大阪御物の一つとなつてゐたといふ話である。

畠山重忠の大太刀

備前高平の疑問

畠山重忠の太刀は三尺四寸の大太刀であつたといふ。源平盛衰記宇治川の戰の一章に

畠山次郎重忠は、備前造高平の大太刀を佩き

と、あり、そして長々を、三尺九寸の太刀也 とある。 刀劍研究者は三尺四寸と言つてゐて五寸の相違があるが何れにしても長いものである。が、元弘、建武以後には五尺、六尺といふのがあつたそうである 重忠の高平といふのは、備前の三平と言はるる助平、包平、高平の三人の一人で、平安朝時代の刀鍛治である。

日本刀の著者も、高平、包平、助平、世に之れを三平と唱ふ、古備前中にても最も聞えたる名匠にして名物も少なからず

△造込怡好裝飾 概ね他の古備前と同樣にして最も上品なり、總して大模樣の氣味になりて平の肉も洵に豐かり、包平に丸棟を見る。鎬造り多く稀れに素劍を彫りたるものあり、と此の三平を激賞してゐるが、此の三平にも名物が多く就中包平に最も多いやうであるが高平には唯一畑山重忠佩用刀が一つだけしかない。畠山重忠といふ人は武藏の人で畑山の莊に居つたので畠山莊司次郎の名がある その先祖が平氏の出であつたので初めは平氏に屬してゐたが、後頼朝に屬し、範頼義經に從ふて義仲を討ち平家を一の谷に攻めて大功があつた。勇猛にして智略あり、敦厚寛仁を以つて稱せらる。後に北條氏のために讒に遇つて殺されたが頼朝には信用が厚く、鎌倉幕府の柱石であつた此の重忠が佩いてゐた此の高平に關し、古來よりの刀劍書に異議を挾むものが出て來たそれは刀劍研究者として名ある文學士岩崎航介氏である。それは源平盛衰記にある宇治川の戰の一章にある

秩父が高平といふは、平四寸長さ三尺九寸の太刀也、拔儲て歩せ寄れば、義量如何に思ひけん引退いて……

の、高平、の讀み方を讀み誤つてゐるのではないか、といふのである。

盛衰記の異本に、高平を『かう平、』と書いてある本があるので、果して、重忠の太刀をたか平と讀んで、高平作、とすることが正しいか疑問であるそれが在銘のもので、備前國高平作、といふならば文句はないがさうではない以上之を直ちにたか平と讀んで高平作とすることは出來ないのである。

と、論じてゐる、假りに、かうひらと讀むとするとき、それは作者名でなく、太刀の姿、形、を形容した詞ではなからうかそれを、かうひらと讀むことは、次に例に引くところの文獻がある。乃ち永正年間に記された、『松陰私語』。第四卷に文明元年二月二十五日の金山城の事始めを記したものに

愚僧腰之刀、二尺三寸高平鎌倉廣光作也、下緒搦抽以御用心之砌指刀參

とあつて、高平鎌倉廣光作也で、その高平の意味が判然する。作者は乃ち相州廣光であつて、高平は刀の形容詞である。源平盛衰記の備前造高平の太刀、といふのも自ら判明する譯であるといふ意味で、重忠佩刀は高平作でなく、かうひらの太刀、と讀むのが本當である、と斷じてゐる此の説を正しいものとすれば、そして在銘の高平作、が出て來ない以上備前三平の高平は抹殺しなければならないのであつて、從來の日本刀銘を訂鑑正しなければならず頗る面白い説である。

池田勝入信輝の刀

篠の雪關兼定（之定）

△**兼定**　和泉守、姓藤原初代は銘の定を眞に切る、世に正定といふ、二代は永正頃、定を之に切る、之れを之定、と稱す、上手なり、後伊勢山田にても打つといふ

△系統、時代　兼常の後初代は文明頃

△造込、恰好、裝飾　華表反りに近きもの多く、鎬高く、鎬巾廣きもの多く切先延び又中切先大切先っあり庵低く眞の棟丸棟も見る、棟の方薄きものもあり、鵜の首造　菖蒲造、薙刀直、又長卷直等あり。小脇差、短刀は先反り多し短刀には約やかにして品位高く、竹の子反り風にして重ね厚く眞の棟、平に肉を持ち一見京物の如き作あり、此國には此類の短刀多けれ共兼定(之定)最上手なり又大平造もあ　彫物は密にして作勝れたるもの多い、樋造りもあり、短刀には丈け短くタガネ深き棒樋又は護摩箸梵字、素劍等ありて京傳の如し

△刄文、働き　大亂に矢筈交り匂深く足入りて刄先迄ぬけ出て如何にも覇氣ありて荒き心の沸つき砂流かゝりて美しく盛なり、或は大乱にして尖り心の刄交り又は大灣、五の目亂交りもあり、大五の目銅箍乱もあり、直刄も見る、折に五の目丁子交りたるもあり又小出來にして砂流刄境に掃き掛

けの如くつきたるもあり短刀造込恰好京傳風のものは細直刄にして如何にも約やかに且つ上品に見ゆるものありて匂深く、沸つき、京物を見違ふことありされど一体に刄中見所少なく何處かに堅き心の小亂見ゆ、粗見すれば往々此の特徴を見逃すことあり

△鋩子　亂込尖り返り深、地藏返深多く荒き心の沸つき匂深く這入る、返りの沸最も強く沸崩れ華やかなり

△地鐵、肌　地鐵細くして荒き心の地沸つき、大杢目柾交り鎬地には殊に柾目多し、湯走り、玉燒棟燒等もあり、短刀直刄のときは京鐵の如くして小杢目になり、棟寄り柾になる

△中心　種々あり、概ね詰りて肉あり、たなご腹風になり、劍形、粟尻、棟丸くヤスリは筋違ひ、鷹羽、檜垣、鎬筋違、平切り、銘は種々に切る。

關物はよく切れるといふ、尾張德川家は好んで關物を佩したいふことだ。兼元兼定(之定)兼氏等を關の上物とするだらう。有名な兼定(之定)に池田勝入信輝の『篠の雪』と稱するものがある。信輝が罪人を試めし切りをした時に家臣に所望して自分の差料としたもので二尺三寸餘り、長久手の戰ひに敗れて戰死した時に永井直勝のために此の刀と首とが取られ家康の見參に入つたのを、兼定はそのまゝ、直勝に賜はつたのである。信輝は大垣城主、德川家康が織田信雄を助けて秀吉と戰を交へた時に、秀吉の味方をした剛勇であつた。

家康すでに小牧山の地利を占め。秀吉十二萬の大軍を率ひて對陣し、兩軍未だ兵を交へなかつたがその時信輝は、家康の本據岡崎城の寡兵を想像して秘に之れを攻めんとし所謂中入りなるものを企てゝ失敗してしまつた。信輝の軍に競ひかゝる。信輝の婿森武藏、驍勇を以つて聞えたが先づ討死する。家康の軍、勇氣百倍

信輝勇猛、麾を振つてしきりに士卒を勵まし相闘ふ。

家康、將、安藤直次、永井直勝、先きを爭ふて突進し、信輝の軍を擊破す、

頽勢如何ともする事が出來ず、信輝の旗本遂に潰えて走る、

此の時、入道信輝の馬はすでに斃れ、信輝は牀几　凭つて、死を待つものゝ如く自若として微動だもしない。安藤直次が側近く來た。

「其方は敵か味方か敵ならば來たつて我首を取れ、我れは勝入人道ぞ」

と、呼ばはつた。手には秘藏の篠の雪關兼定が拔き放たれてゐる、

直次、進み來つて信輝と渡り合ふ。

一足遲くれて永井直勝

兩雄相爭ふを見て、池田勝入と知るや槍を以つて信輝へ突きかゝつた。今は敗戰に心身疲れ切つて最早死を覺悟したる信輝だ。再び突き入る槍先きは、此剛勇を無雜作に突き伏せる、躍りかゝつ

てはつしと首を取る。之れが信輝の最後である。

水戸黄門の手討ち

大進坊祐慶の刀

五郎入道正宗の親は有名な行光。その行光の兄であるこ言はれてゐるのが祐慶である。普通大進坊こ言はれてゐる。先づ、此の祐慶の項を、日本刀に依つて調べて見やう

△祐慶　日光の法師、大進坊

△系統、時代、紀新太夫の子こいふ説あり、後銘行光なりともいふ、建長頃

△造込恰好裝飾　小脇差多く短刀は寸延びたるもの多し、身巾廣く先反り心になり眞の棟、丸棟あり、大平造もあり、好みて樋を彫り巾廣く淺くして彫物密なるもの多く上手なり

△刄文働き　直刄　直刄に小亂、小灣、包深く沸つきて上品なれども刄中比較的見所少なし

△鋩子　小丸燒詰等多く沸つく

△地鐵肌　細かくして杢目交り地沸つき上品にして美しく見ゆれこ比較的働き少なし

△中心　太くして寸詰りたなご腹の心になり反りありて栗尻劍形ヤスリは切り、筋違、棟角にして

小肉あり長銘多し

こある。行光、正宗には劣つてゐやうけれこ、行光正宗を生み出した系統として又珍らしいものとして珍重されてゐるものだ。

此の大進坊の刀で有名なものは水戸光國の佩刀だ、それが例の有名な反逆的家老の藤井紋太夫を刺し殺した刀であるこいふもので尚更に有名である。

大衆文藝作家の水戸光圀を讀んでゐるこ、此の藤井紋太夫が江戸へ出て、例の權勢柳澤美濃守と通じて頻りに策動する。小説では一個の怪人であり策士である。隱居はしても水戸光國、徳川幕府の政治には常に關心を持ち時の將軍を援護してゐる。光國漫遊記なるものは、それが講釋師の張扇から叩き出された假想の物語りこしても面白い。藤井紋太夫の暗躍なこは、小説にしてます〳〵面白い場面である。イヤ、小説でなく事實物語りこして、此の紋太夫のお手討ちは光國の英明を物語る一つの記錄である。

『紋太夫か、久し振りだノウ』

其の夜わざ〳〵紋太夫を召した光國であつた。恐れおそれに光國の顏色を窺つた紋太夫、見れば別に變はつた氣色もなく、平然たる光國である。安堵の胸をおろした紋太夫が

『うるわしき御機嫌を拜し恐悦至極に……』

といふのを

『紋太夫、もつと近う進め』

たる光國の聲だ、好々益然として、人懷しげであつたこまでの光國の態度は俄に改まつて、冒すべからざる威嚴が自然に備はり、人を射るやうに眼光が鋭い。紋太夫の躰は射すくめられたやうになつた。

『偖ては、御隱居は、自分のしてゐることを知つて居られたナ』

さう感ずると、もう死を覺悟しなければならなかつた蒼白になつた顏　半ば上げて、光國の側近く進むと

『紋太夫、其方は自分のしたことを存じ居らう、覺悟はしてゐやうナ』

押さへ付けられるやうな聲だ。もう遁れる術もない

『此の不屆者奴』

それは、一喝すると同時であつた。紋太夫の頭髮を掴んだ光國の左の手が力をこめてぐ〳〵と膝の上へ引き寄せられた。

光國の怒りは激しかつた。右手に持つた大進坊の脇差一尺九寸餘り、紋太夫の肩衣の背中をスブリと一ト刺し　鍔か肩衣へ觸れるばかり深く一刀に差し通してしまつた。

此の時、骨へ當つた脇差の切先ぎが一分ばかり折れたといふのであるから、いかに激しく力强く刺したかゞ窺はれるのである。此の大進坊の脇差は、光國が常の差料としてゐたもので、其の夜も之れを差して居り、一刀のもとに紋太夫を刺し殺したのである。

楠正成の佩刀

備前景光の鍛へ

楠木正成が佩いてゐた刀は備前景光である。景光は順慶長光の子、聞えたる名匠である、正應ごろ

△造込恰好裝飾　總じ、順慶に似たれども、反り淺き心になり、重ね厚く鎬高く鎬巾狹く、いほり高く又は眞の棟にして小切先又は中切先詰るものも見た、劍、小脇差、短刀あり、短刀竹の子反りにし、重ね厚く眞の棟にして寸詰るもの多く京物とも見るべきもの多く樋又は平造に素劍、護摩箸梵字の類あり、タガネ深くして中に寄り京傳の如し。切刃も造る

△刃文働き　順慶系としては小模樣のもの多く、小丁子、足入り鋸刃、又は小五の目揃ふたるもの逆心を持ち、匂ひ締らざるもの多し、又直に小丁子足入り等は小沸つきて最も上品に見ゆ、細直刃小沸つくものもあり

△鋩子　大丸横手上細きもの又は亂込失り心のもの或は返　深くも見る、小丸もあり、總じて沸つき、返り深きは荒き心の沸つく。

△地鐵、肌　能く錬れて細かく、小杢目にして京物の如く又梨地の如きもの多く、地沸つく、殊に短刀には美しき地鐵のものあり總じて弱き心になり、うつりあれど順慶には劣る。

△中心　刀は順慶に似たり、短刀は先細く長き物又は振袖あり、二字銘長銘もあり、短刀長銘多し

ミ、日本刀にあるやうにすぐれたる業ものである。

佩してゐる人が楠公だミ、刀も殊に光かつて見えるのである。楠公は、楠木と書く方が本當だ、といふ人が多い、太平記なぞの楠正成とあるは、木をつづめて楠としたのであらうといふことである正成は偉大なる武將である。その偉大さは三尺の兒童もよく知つてゐる嗚呼忠臣楠氏之墓は、千古不滅の金文字だ。

此の湊川神社に參拜して思ふのは正成の壯烈なる戰死だ。足利尊氏遂に叛いて一旦は敗れ、九州に遁れてから再擧し、雲霞の如き大軍を率ひて都に攻め上るの報頻々として傳つて來る延元元年五月だ。新田義貞等は赤松城の圍みを解いて兵庫まで退き、京都へ援兵を乞ふに至つた。

正成は自己の献策が宰相等に容られぬので、遂に死を決し、僅に五、六百騎を率ひて、義貞に合すべく兵庫へと下つたのである。途中櫻井驛での正行との別れは餘りに有名だ。

尊氏は兵を二軍に分ち、、自分は海上より、弟直義は陸より攻め上る。潮の軍が和田岬に上陸して義貞を壓迫する。會下山に陣取つて居た正成は、弟正季と兵を二手に分つて陸の直義の大軍へ突擊した。敵は眼に餘る大軍である。正成兄弟は此の亂軍の中に七度ひ會ふて七度別れたといふ奮戰であつた。しかも、背後には義貞の軍を退けつゝ、尊氏の大軍が迫る。腹背に大軍を受けて僅に七百餘騎の楠勢がどうすることが出來やう。それでも兵を合すること十六度び、といふのだから。楠勢の勇敢さが知れる。時は五月二十五日、暑さが可成りに烈しい。この烈日の下にあつて、朝の八時から夕方の四時まで續いたといふだから寡兵である楠勢の疲勞は一通りではない。大半は戰死して殘るものは七十三騎正成と正季も自害と決めた。「七度生れ變つて朝敵を亡ぼさん」とは、史上有名な正季の最後の言葉である。

村の人家にへつて正成兄弟は刺し違へて死んだ。その壯烈、悲壯の死亦千古の語り草である。楠公遺愛の景光の刀は現在御物となつてゐる。歴史上からいへばこの景光は御物中でも斷然光つてゐるものである。

正成は河内の豪族である。俊基が、攝河泉を潛行して勤王の志士を遊説した時にこの河内の豪族楠氏へも渡りをつけてゐたのであらう、天皇の御召に應じ、勤王に馳せ參じてからの正成は、金剛山に、赤城山に、多くは寡兵をもつて大軍を惱ましてゐる。戰國時代に於ける理想的の武將であるこ

こに誰れも異存はない。

備前の長義父子

大久保彦左衛門の頓智

劍道をもつて一萬石を賜はつたのは柳生家だ、柳生家は代々劍聖がつゞいて將軍家の指南範であつた。此の柳生家、傳來の秘藏刀は備前の長義であつた。小田原の領主大久保相模守家に、老の杖と稱する長義があつた、大久保家の組先大久保忠世が、ある時忍び入つた三人の盜賊を高股から切つて落したといふ有名な長義で、家代々のものである、尾州德川家にも有名な長義がある。佐野天德寺の弟で佐野の一族長尾新六郎の佩刀で、北條家(小田原)よりの拜刀である。寸が長かつたので、堀川國廣が諸國修業のため廻國中下野へ來た時に摺り上げさせたもので、義の字が無くなつてゐるが、國廣摺上げの由來を忠へ切つてあり、目を驚かすばかりの大業物であるといふ。恐らく長義の傑作であらうといふことである。長義は正宗十哲の一人で備州長船住長義と銘を切り華表反りにして無反りに近きもの多し、といはれ居り。相傳備前として兼光に比し一層華やかな燒刃である。後世兼光を梅に、長義を櫻にたとへてあるほどだ

長義の子を長重といふ。長義に似て上手であるが、此の長重に就いて面白い話がある。

大久保彦左衛門忠教のところへやつて來たのが坂部三十郎だ。雜談をしてゐると話がいつの間にか『人斬り』の事にうつつた。

『ざう　座敷で人を斬るのには長い刀はいけない。二尺以下のものでないと働きが出來なくて駄目だよ、二尺以上になると自由にならないネ』

と、坂部三十郎がいふ。

『こういふ實驗　堀監物が話をしたことがあるよ』

と、彦左衛門が話をついで

『何んでも監物の家人が朋友に意趣あつて、此奴を討ち果そうと決心した。其處で一尺五寸の脇差を九寸ばかりに摺り上げた、そいつをもつて首尾よく討ち果した、切り放そうとすると仕損ずることが多い、突く心得があると仕損じがない、君が二尺以下がよいといふのは切り放そうとするからだ。そいつは難しい事だよ』

といふ。

『さうかナア』

三十郎が感心してゐると彦左衛門は得意になつて

『池田勝入の話つていふのを知つてゐるかい』

と、問ふ

『イヤ知らん』

『池田勝入が話に、大事の敵を仕留めるには、組み留めて置いて突ッ刺すとよい、十中八九は間違ひない、といふのだ　朝比奈(彌太郎、後に水戸家の老臣となつた人)など平常に三尺の大刀を差して歩いてゐるが外見を誇るなら兎も角、あれでは働きが出來んよ　人を斬らぬ刀なら精進刀といふものだアハ、、、』

と、彦左が笑つた。大久保彦左衛門、お饒舌だから輿に乘つて朝比奈彌太郎が三尺もある刀を差してゐるのを嘲笑した。

昔の武士といふもの、かういふ風にいはれると默つてはゐられない、況て豪傑、俺の刀を精進刀だなど彦左といふ奴怪からぬ奴であると、朝比奈がカンカンになつて怒つた。三十郎が彦左を困らしてやらうと思つたかも知れない。

彦左衛門、數日の後に朝比奈が來たと知らせを受けると、先日　精進刀のことをすぐ思つた。

『彌太郎奴、來たナ、餘程怒つたと見えるわい、こいつは一番口で勝つてやらう』

と、考へた。

『君は俺の刀を精進刀だといつたそうだナ、精進か生臭か、一つ試めしてやらう。』

ぶつ付けの談判だ、彌太郎、うこひ口を寛げて、拔打ちの構えだ。彦左衛門はニコ〳〵しながら、

『成程々々　貴公の刀は至極の切れものと聞いてゐる、そこで精進刀といつたのだよ、一体、精進といふものは、佛の命日にするもので、これは、直ぐ落ちる、乃ち精進落ちといふ奴さ、貴公の刀に逢ふとすぐ落ちるからそこで精進刀といつた譯だ、惡口ぢやない褒めたのだ』

昔の人は單純だから、かう言はれるとすぐ納得する。

あゝ、成程そういふ譯か、成程ネ、

朝比奈彌太郎すつかり上機嫌になつてしまつた。

かうなると、根が饒舌家の大久保彦左衛門である、朝比奈が、自分のコジつけに感嘆してしまつたから面白くて堪らない、膝をすゝめて、

『貴公も長篠の合戰では大手柄だつたノウ、何にしろ相手も甲斐の豪傑だ、内藤修理亮といへば聞えた一方の大將さ、貴公の働き振りを見たかつたよ何にしろ拙者も、合戰最中だし、それを見なかつのは誠に殘念至極だ、あの時、貴公が打ち取つた刀は、その刀だらうナア』

かう言はれると彌太郎惡い氣はしない、ますく氣をよくして、ニコ〳〵笑ひながら

『いかにも此の刀だ　こやつ少々寸延びだが、何時も手柄を現すのでナ、摺り上げもせずに持つ

てゐるよ、片時も身から放さぬ秘藏息子といふ奴よ』

『そうだらうノウ、定めて見事なものだらう』

いかにも感心したやうに彦左がいふ。

『篤と見て下さい』

すらりと拔いた備州長船住長重の刀、一尺八寸二分の業物だ。

『貴公の差料だけあつて流石に見事な出來榮だ』

彦左は愈よ感心したやうにいふ、心の中ではこんな長いものを差して彌太郎はどうするつもりだらう　戰場で馳け放れて切り合ふにはよいかもしれぬが、屋内では庖丁ほどにも用をなさぬものだ、おれが精進刀だといふのも無理はあるまいそんなことを考へながら、ます〳〵彌太郎を褒めてかゝる、大久保彦左衛門　戰場ばかりの勇士ではなく座談の雄だ。

『時にのう朝比奈殿、貴公内藤殿の命日には精進せらるゝか、そりや本當かナ、』

『いかにも本當だ、いかに戰場のこと、はいへ、内藤殿は御承知の通り聞えた男士だ、それで命日々々には精進もするし、念佛も唱へて冥福を祈つてゐるよ』

彦左衛門、こゝだけばかり

『それ御覽ぜよ、矢張　精進刀ぢや、精進ゝる程の大勝を切つた、精進刀と言はれ貴公が立腹する譯がない』

もう、かうなつては朝比奈彌太郎さんざんの敗北である。

『いかにも、精進刀ぢやアハ……』

と、笑つて、さも愉快げに大久保邸を辭して行つた、よ、いふ話が殘つてゐる。

刀劍の長短は、時代の戰術によつて變つてきてゐることはいふ迄もない、上古のものには第一反りといふものはなく、直刀であつたといふことである。何時の頃から刀に反りをつけたかといふと、その道の研究者に依れば、大寶ごろからたらうといふである　それから百年余りの後の伯耆の安綱時代から後には、判つきりと反りがあることが判る、「戰鬪上の實驗よりして此の反りが必要となつて來たのである。

八幡太郎義家時代にはまだ徒步戰が多かつたらしく、從つて長い刀は不便であつたであらう、後世になつて馬上の戰鬪が多くなつたので、此の戰術に從ひ刀もだん〳〵長いものとなつて來た、一つに時代の流行といふこともあらうが、實戰に役立つ武器を作ることは當然のことである。畠山重忠が三尺九寸太刀を佩いて、といふことなど當時に於いては普通であつたであらう。そして、此の長刀を基礎として生れたのが槍である。勿論これは武具の進步に伴ふた結果であつて、織田時代より以降此の槍が盛んに用ひられたそのため再び長刀といふものが邪魔になつて二尺二三寸のものが用

ひられ出した。現在でも二尺二三寸のもので、摺り上げたものがあるが、之等はどうせ三尺近い長刀であつたであらう。今日の戰爭で刀を使ふことは少ないが、それでも刀の必要はある、塹壕戰などくると鐵砲よりも刀だ、接戰だから斬り合はねばならない、それには長い刀は不便である。軍人に聞いて見るに、二尺程度のものがよいといふことである。刀劍家あたりよりは半ばものさされてゐる脇差が用立つ譯である

狼村正の話

その他村正に就て

高瀨羽皐氏の著、刀劍談に

土佐山内家の侍醫結城支伯、名醫の聞えあつたがある時田舍から治療に招かれて荒倉山を越える時一匹の狼が咽喉へ骨を立て、苦んでゐたのを憫み、口の中へ手を入れて拔き取つてやつた。その歸途、同じ山中で彼の狼が一口の短刀を口に咬へて支伯を待つてゐて、同人が來懸るとその前へ短刀を置いて山中へ這入つて行つた。

此の短刀が村正作　一尺九分、村正の二字銘で、子孫に傳來して立道が家に傳ふ。といふのである事件がお伽噺的ではあるが、土佐のことであるので面白いと思ふ土佐名所圖繪には醫者が正田慮庵となつてゐる。狼を治療して禮に貰つたといふことには變りがない。

ところで土佐藩士には、德川家で忌み嫌ふ村正を差料にしてゐた者が多かつたといふのであるに、現在は土佐に餘り村正がないのはどういふものであらうか差料にしてゐた武士は村正のことをよく心得てゐて愛用したのにも拘らず、子孫が俗說や講談を信じて賣り拂つたのが縣外へ出て行つてしまつたであらうか。判役成義氏(赤石出身陸軍少將)の劍話錄には

土佐藩では村正を差料にした藩士が多く、中に江戸へ差して行つて、友人から佩刀の拜見を申出でられ、困つて銘は見せられんと言つたが村正である事を覺破されて困却し以來子弟には村正を佩して江戸へ上るなと戒めた

と、いふことが記載されてゐるが、その劍話錄に

安政頃から段々攘夷論が盛んになつて遂に討幕論が始りましたから、勤王家は好んで村正を購めるといふやうなことになつて來まして維新前になつて大層村正が尙くなりました。

と、土佐藩の狀態を詳述してゐる。友人某氏が、本町の古物商から貰つたといふ村正銘の脇差を持つてゐたが、上街の某氏があの村正は祖先より傳來のものである、と言つて讓渡を迫られ、仕方なく讓り渡したといふ話を聞いた。その村正を二三度見たことがあつたが友人某氏も、どうゝ眞物か

疑はしいと言つてゐた。

銘振りが何んとなくタスイと思はれた。その外に、山田い某氏の村正の短刀を見たことがある。之れは川口渉氏も「二代でせうナア」と言つてゐた。確からしい。探せばボツ〳〵出て來るかも知れないが、劍話錄にあるやうに、土佐藩士が盛んに差料にした割に少ない。村正は三代ある。初代は伊勢の住千子村正、貞治の頃二代は應安頃、三代は應永の頃、と古刀銘盡にある。

元來村正は、優れた切味を持つ大業物で、史上著名な人物で村正を愛用したものに、豐臣秀吉、前田利家、眞田幸村、福島正則、などがある。山内家二代山内忠義も村正を愛したと言はれてゐる、前田利家の村正は天正十年、能登國石動山の合戰で柴田勝家が敵將數名を討ち取り、其の首級を利家の陣中へ持つて行かした利家、非常に喜んで使の野村勘兵衛に即座の賞として與へたのであつた秀吉の遺品が諸大名に分配された時に村正の刀　三振あつた。秀吉は相當に村正を愛したが、家康は斷然之れを忌み嫌つた。否、家康ばかりでなく、德川家は之れを嫌つた。家康の祖父清康が臣下のために殺害された刀が村正であつた。家康の父廣忠も片目八彌なるものに村正で股を刺されたことがある、家康の子三郎信廣が首を刎ねられた刀が之れも村正だ、家康自身も過つて小指がどこかを切つたことがあるがそれが村正　斯くして村正は德川家の忌む刀となつたのであるが此の村正を所持してゐたが爲めに切腹を命ぜられたものがある。豐後國府内の領主竹中采女正重義とその子源三郎とである。

竹中采女正重義は當時長崎奉行の要職にあつた。唯一の開港場たる長崎には拔け目のない各國の商人が出張してゐた、堺の商人平野屋二郎兵衛もその一人で、平野屋は、瑠璃といふ妾を持つてゐた之れに懸想した重義は、息子の源三郎と謀つて强奪したのである、隨分亂暴な話だが、重義は妾を强奪した上平野屋を長崎から放逐してしまつた。

平野屋は怒つて、此の顚末をそれから、支那から渡來した物品を橫領したといふ不正行爲を摘發して江戸幕府へ訴へたのである。幕府では捨て置けず、直ちに取調べに着手すると、罪狀が明白となつた。そこで、財產を沒收して遠島といふことになつたが、沒收した財產の中から村正の刀が二十四本現はれた。その爲めに罪狀が重くなり、遂に親子共切腹を命ぜられた。このことがあつて以來村正を所持する者の間に大恐慌が起り、萬一、何等かの機會で發見でもせられてはといふので、村正の銘をヤスリですり消したり、或は神社佛閣に奉納したり、といふあわて方であつた。

本阿彌家では、無銘の村正を鑑定する場合、平安城長吉の鑑定を與へたといふのであるから、村正をこれだけ憚つたかゞ窺はれる。今日、村正の在銘ものが少なく、無銘が多いのは、摺り潰したり摺り上げにしたりしたものが多かつたからである。

刀劍に就いてはよく劍相といふことをいふものがある詰り劍相が惡くて祟　をなす、といふことは

徳川時代より前には皆無と言つてよい、祟りごころの騒ぎでなく、主人を護り、功名手柄をさせてその爲に有名になつてゐるものが可成りに多い、徳川時代前に刀の祟る物語りが唯だ一つだけある、景清の所持してゐたあざ丸で、之れは、此の刀を持つと眼病を患ふといふので熱田神社へ奉納された、その外には刀の祟り話はない。刀が祟ると言ひ出したのは、元祿時代からのことで、主として祟りは村正である。理在しも、刀剣の知識のないものは、徳川時代の祟り説を信用してゐるものがあり、折角の名刀を二束三文で賣り拂つたなどの話は全國到るところに轉がつてゐる。刀剣は日本人の魂であつて見れば、趣味は持たなくとも、一通りのことは知つて置く必要がある殊に村正などに關しては、講談や俗説を信ぜずに、多少の研究をして、本當の事を知り、子孫に傳へることである。祟りなどいふことは、飯かきゝ面白くするための拵へごとである。

刀剣の祟りを巧に利用した戯曲も尠くない。

青江下坂やんと切れますと、いふが如き、村正ではないが、例の伊勢音頭の福岡貢と油屋おこんなどもその主目は刀剣の祟りを戯曲化してゐるものであるが、一体、誰れの刀を指してゐるものか判らない。青江は備中の青江で青江ものゝ言つて刀が多い。しかし、下坂とは近江の國であるといふ、此の二つのかけ離れた地名を合はせて、青江下坂、と呼ぶのはどういふ譯であるか、刀剣研究者の間に判らないらしい。この伊勢音頭などは別であるが、総じて大衆的な戯曲には、村正が多い。有名な吉原百人斬り、籠釣瓶と稱するものも村正である。縮屋新助の振るくり廻はる刀も村正である。徳川時代に於ける村正の祟り話は、斯樣に戯曲家に好材料を與へ、而も、幕府のせんとする宣傳をやつたものだから、忽ち大衆の間に擴がつて、村正は祟る、といふ根深い認識が昭和の今日までに及んでゐる。

それから又村正を正宗の弟子として信じてゐる者も多いが、村正は正宗の弟子ではないのである。刀剣研究家の多くは、平安城長吉の門ではないかと言つてゐる此のところまだ充分でないらしい、高瀬羽皐氏は村正には目釘穴が二つある、相州物には似ないところである、村正は銘を目釘穴の少し上に切る、之れも相州流ではない、村正の地鐵は精美であつて相州もの、地金とは異つてゐる。なほ八つの條件を擧げて、相州系でないことを指摘してゐる。正宗伊勢を行脚の際、刀の鎚音を聞いて、欠点を指摘し、村正が正宗の弟子となつたといふ話は、講談としては頗る面白い一節ではあるが後世の作り事であり此の實説はむしろ河内守國助の挿話にあると言はれてゐる。

眞田信綱の剛刀

備中青江の貞次

△備中青江貞次　後鳥羽院一月御番鍛冶、先代に勝れたる名匠にして其名高し

△系統・時代　守次子右衛門亮といふ元暦頃

△造込　恰好　身巾細きもの多く、ふんばり強く眞の棟多く、平肉最も豐にして切先詰る。姿品位守次よりも一層上品なり

△刄文、働き　直刄如何にも上品にして約やかに小沸つき、匂深く鼠足入り多く又燒出し沸つきて乳心になり上を少しく廣直刄に燒き、ほつれ心を持ちて匂足深く入り小沸つき折に荒き心になりたるもあり、打のけ金筋交る、大乱、逆丁子も見る、總て上手なり

△鋩子　大丸燒詰になりてふくらの邊より刄巾細く險しく小沸つきて一文字形に返る、又小丸燒詰もあり何れも勝れたり

△地鐵、肌　青江中にても最も鍛良く京物とも見ゆ

△中心　最も上品にして淺き粟尻又は一文字になる、雉子股も多し、長銘にして太刀銘多し

此の貞次の三尺三寸九分といふ剛刀を差してゐたのが眞田一德齋幸隆の子で安房守昌幸の兄である乃ち眞田幸村の伯父に當る、だ

天正三年五月　武田勢が織田信長と兵を交へた長篠の戰。その時、信綱は、右隊の先鋒であつた。卒ゆる兵千五百人、信長の本陣を突かんものと弟昌輝と共に、山手傳ひに信長の横に出て進　だ馬上の信綱、一擊に信長の陣を破らんものと、此の軍隊を指揮し、三尺三寸九分、貞次の大刀を佩してスツと言はば斬つて入る覺悟である。

信玄は病を得て最早起つことが出來ないと知ると先づ賴り無謀を戒めた信玄に比ぶれば信長は十三、家康は二十一、謙信は九つ、氏政は十七の年下だ。お前は謙信には十六、信長には十二、氏政には八つ、家康には四つの年下だ。でその果報の來たるを待つて居れ、果報に年を寄らすのは、虚飾、榮耀、奢侈の三つだ、呉れ〳〵も自分から合戰を焦つてはならない、と言つた。

又、隣國の諸將への心構へを調した中に

信長　切所を構へて長く對陣を張らねばなぬ、彼は大軍で、畿内、近江、伊勢等の遠方の人數だから必ず無理がある、その無理を働かす機を見て討しばゞ中八九は成功する

と、言つてゐる。名將の用意周到であるのを想はすのである。信玄遂に病革まつて逝く、年五十三

諸將は相計つて信玄の死を秘め、喪を發せず、

謙信は、春日山の城中に在つて食膳に向つてゐた秋の初めの九月であつた。甲州に在つた謙信のスパイが馳せ戻り、四月十二日信玄他界す、と、報じた

謙信聞いて驚き、箸を投げ捨てハラ〳〵と涙を流し、

年來の敵ではあつたが坂東一の弓矢の名將であつた、偖て〳〵惜しいことである

と、言つて三日間、春日城内で音樂を禁じたといふ佳話さへある。

勝頼は血氣の將だ、遂に信玄の遺訓を守らず、信長の軍と長篠に兵を交ゆるに至つたのである。信綱、千五百を率ひて信長の本陣を突かうとしたが、忽ち、尾張勢から擊ち出す彈丸に胸を擊たれて戰死する。備中青江貞次の大刀は、信綱戰死の遺刀である。切り込みが一ヶ所ある剛刀ださうだ

應永備前の三光

康光、則光、清光

「應永備前の三光」と、言はるゝのは、康光、則光、清光、の三光である。この三光のうちで、康光を上位に置くのを普通としてゐるが、則光、清光も初代は業物だ。

康光は四代あり、初代右衛門尉景秀の後である。

則光、四代あり、初代五郎左衛門尉守助子。

清光、數代あり、初代孫右衛門尉、勝光系。

康光を好んだものに、播摩の住人赤松入道がある。南北朝時代の一方の雄だ。此赤松入道、康光に五十振りの太刀を造らせて、將士五十名に授け、スワ戰ひとなると五十名が康光を揃へて切つてかゝつたで向ふところ切り靡けずといふことなし。とあるから物凄い奮闘振りを見せたであらう。清

生氏鄕も好んで康光を差してゐた。

仙台の豪勇、石川彌兵衛が差してゐたのは備前則光である　長さ二尺七寸、この則光で敵を切ること七十餘人、といふのだから凄い。彌兵衛、誇りとして子孫に傳へたが、子孫のうちに此の刀で人を殺害したものがあつて。祿七百五十石を五十石宛削られ小祿になつてゐたのが、その後の主人、石川悅之進、又十人を切つて、遂に家が斷絶した。

悅之進、道で某と切り合つた、相手は樫の六尺棒をもつて立ち合ふ、すらりと拔いた悅之進、則光を青眼の構へ、相手はいらつて、眞つ向から六尺棒を打ちおろすのを、躰を引いて空を打つと見る間に躍りかゝつた悅之進、棒を二つに切り拂つて、餘すカ、大袈裟に切り割つた。悅之進が刀を引くと、しばらくして相手は二つになつて倒れた。

と、いふ業物である。

中仙道は熊谷川の宿、北國訛りの一人の武士、田舍武士と見て馬士が無禮を働く

「切るぞ」

と、柄に手を掛けるのを馬士は、何に糞とばかり、あり合ふ鋤を取つて打つてかゝつた、「ヤツ」と掛け聲して拔き打ちに鋤を眞ッ二つにし。餘る切先きで馬士の腕を切り落した。馬士は今更に狼狽して逃げ出すのを、追ひすがつて後より一刀に切り倒してしまつた。刀は備前清光であつた。

黒田長政と栗山大膳

長政の秘藏刀破損挿話

黒田長政と後藤又兵衛との君臣の喧嘩は有名である。長政は大膳を深く愛し長政の子忠之と家老の栗山大膳との爭ひも亦黒田家騷動として有名である。長政は大膳を深く愛し之を頼んだほど謂はんよりはむしろ信頼し、元和元年に京都で客死する際遺言書を大膳に渡して忠之を頼んだほどであつた。大膳の父、栗山備後は、黒田如水以來の重臣で、大豪を以つて聞えた黒田家隨一の驍將として知られてゐた人であつた、その子大膳亦武勇絲禀であつたばかりでなく、學問があつた。その學問に於ても、黒田五十二万石、福岡藩中右に出る者がなかつたと言はれた人で、當時の學者達とも交友があつた。父の備後は荒木村重の有岡城で秀吉の使者となつて行たまゝ、城中に禁されてゐた黒田如水を有岡城の落城に際して火焔の中から救出したといふ、如水のために言は、命の恩人でもあつた、かういふ名門の家に生れて、智勇兼備の大膳が、重きをなすのも當然であるが、長政と違つて、忠之は兎角に大膳を煙たがつた、忠之は、大膳を煙たがるところから、倉八十太夫なるものを寵愛して、悉く大膳に當て付けをやつた。之れが黒田家騷動を起すに至つた原因である、忠之の代になつて、大膳とは斯樣にお家騷動まで起すことになつたが、長政時代には、此の君臣はピタリと融和し、長政の信頼は厚かつた。其の長政の秘藏の刀、作者は判らないが、『命なりけり』と、いゝ名をつけたものがあつた『命なりけり』の名が何によつて起つたかは之も知る由もないが、其の秘藏刀を、供の侍がある時江戸成の供部屋で、それを倒して切先きを少し打ち折つた。主君第一の秘藏刀を折つたのであるから、其の供侍は、眞ッ蒼になると同時に死を覺悟した。その日の登城を終つて屋敷へ歸ると、供侍は、栗山大膳の前へ出て、之れを訴へ

『御秘藏の刀を損じた上はお詫に切腹仕る』

と、いふのであつた。

何分のお沙汰あろ迄待て然し、主君第一の御秘藏刀だ、切腹は覺悟してゐてよからう、が、當方よの沙汰する迄　勝手に切腹なぞしてはならぬ』

流石の大膳も、此の刀の件には弱つた。勿論、過ちである。と、言つて、そのまゝには過ごせない大事件なのである。仕方かないのでこの由、主君に言上した。聞いてゐた長政、サット顏色を變へたが、一言も言はずに、すつと立つて奥へ這入つてしまつた。此所で凡くら家老だつたら、すぐ引返へして主君の不興から察して切腹申付け、と來るところだつたが、大膳は、退出すると大急ぎで本阿彌を呼んだ。

『この、切先きを直して今夜中に仕上げて呉れまいか、少し長過ぎるのでノウ』

と、いふ、本阿彌は、承知して、一夜中に之れを直しすぐ翌日之れを持つて來たそこで大膳は本阿彌を長政御前に招いたところ、本阿彌がいふ

『御刀の切先き少々折れ申したのは、誠にお芽出度いことで御座ります、此の御刀、鋩子が少し尖り過ぎて、格好、少しく醜、御座りましたが、昨夜お直し申上げましたところ、天下一のお刀になりました』

長政大喜ひである。大膳が

『本阿彌に遣はす代金、彼の者に出させませうや』

といふのを長政は、大機嫌で、

『イヤ〳〵刀が良くなつた上は、それには及ばぬ、彼の者には加增して遣はせ』

本阿彌に金二枚、刀を折つた家來に二百石の加增をしたといふ話である。

其所に大膳の大膳らしい價値がある。詰り、即座に本阿彌に修繕さした英斷だ。此の一事を見ても大膳の器量は窺はれるのであるが後に、忠之との中はうまく行かなかつた。後藤又兵衛が退去も、實に堂々たるものであつたと言はれてゐるが、栗山大膳の福岡城退去も亦威風堂々としてあたりを拂ふものであつたといふ

奥州の文壽

八幡太郎の鬚切り

八幡殿、貞任、宗任を攻められし時、度々に生取る者十人の首を打つに、皆鬚共に切られければ、『鬚切り』とは名附けたり。奥州の住人、文壽と云ふ鍛冶の作なり。と、平治物語にあるが、八幡殿といふのは八幡太郎義家である。

前九年の役　父頼義に從ふて出征したのは義家がまだ一十歳前後の時であつたが、武勇絶倫、その強弓は敵兵を恐れしめ、八幡太郎の名は響き渡つたと言はれてゐる。

後三年の役はそれから二十年程後であるが、此の時には父頼義は既に死亡して、義家が總大將であつた。義家の武勇は、此の時も亦奥州を震駭せしめたが、此の驍勇の武將は

吹く風を勿來の關とおもへども　道もせにちる山ざくらかな

の歌をもつて聞え、風流武將の名が後世の人に依つて謳歌されてゐる。

雁の亂るゝを見て、伏兵ありと知つたことなども、義家を語るによ　材料である。義家はかつて、太江匡房に『好漢惜　むらくは兵法を知らず、』と言はれ、辭を低うして兵法學を學んだもので、その賢明さが窺はれるのである。戰後に私財をもつて、思賞を與へたり、頗る溫情味のある人であつ

だが、軍律の前には嚴然たるものがあつて、平治物語のやうに生捕りに對して奥州文藤にものを言はせてゐる。金澤柵の攻圍は、嚴寒、積雪の中で清家の軍も大分弱らされてゐるが、鎌倉權五郎景正などいふ剛勇がゐて大分士氣を鼓舞した話などもある。權五郎は相模の生れで、鎌倉名所の一つに權五郎井戸といふのがある。かうして遂に金澤柵は陷ちたが、池中に隱れてゐて捕へられた武衡が助命を乞ひ、側からも、助命を乞ふものがあつたが

『降人とは、人手にかゝらず自ら降參をして來る宗任などのことで、武衡は戰場で生捕られたものである、之れは降人ではない』

と言つて首を刎ねた。決斷斯くの如きものがあつて、誠に武人の典型である。

義家が佩いてゐた奥州の文藤は、生捕りの首を斬るのに鬚まで斬れたといふところから鬚切り、といふ名がついたのであるが、この鬚切りは、後に賴朝に傳はつたといふことである。名鑑に現はれた奥州の刀劍鍛冶は古刀では鉾草一類、文藤を祖とする寶壽一派及び鬼王丸より起つた月山一派であるが、本阿彌光遜者の日本刀にも、文藤の項には年號時代が附してなく、文藤より起りて建武應永に亘り多數の刀匠を出す、とある。八幡太郎義家の佩刀であつたのであるから可成りに古い。河內國壺井八幡社に義家の太刀二尺九寸餘のものがあるといふことは聞いてゐるが、それが文藤であるかどうかは知らない。

源義經の佩刀

備前の名匠支成作

源義經が兄賴朝の不興を蒙つて西海に志を立てやうとしたのは文治元年の十一月であつた。攝津の大物浦から船に乘つて總勢三百餘名、和田の岬を過ぎ、明石海峽に差しかゝつた時に俄に暴風雨が起つて、一行の船は散ぢりばらばらになり、義經の船は、攝津住吉浦に漂着し辛うじて一命は助かつた。この時、鎌倉ではすでに義經逮捕の命を降してゐたので身を寄するところもなく、大和吉野山に入り吉水院といふの隱れたが、靜の身を案じて京都へ歸つしめ、更に中院谷といふのへ移り隱れてゐた。吉野山も雪に蔽はれ、花の吉野は雪の吉野であつた。

居ることゝ少時、遂に山僧共の知るところとなつて、再び此所も遁がれなければならなかつた。佐藤忠信が、身替りとなつて敵を食ひ止めやうといふのだ。芝居でやる狐忠信がそれだ、忠信は、兄嗣信と共に義經が陸奥より下向の際從いて來た從臣であつた。嗣信は屋島の戰に戰死してゐた。兄を屋島で殺した義經は、今又忠信を此所で戰死さすのに忍びず、共に落ち行くことを勸めたが、忠信は頑强に反對して自分の從者六人と防き矢をすることになつた。感激した義經が

『汝の太刀はすが長いので疲れやうぞ、之れを與へる』

と、言つて、腰に佩びてゐた黄金造りの太刀を忠信に與へたのである。二尺七寸備前友成の名刀だ
僧徒の中に横川覺範と名乘るもの、身の丈け六尺を越ゆ大法師、剛弓を携へて、見參せんと乘り出
して來た。いで我が弓勢を見よとばかり兵と放つた矢が忠信を掠めて後ろの大木へグザと立つ、一
の矢を射損じた覺範が、焦つて二の矢を番へ、滿月の如くに引き絞つた時、忠信が狙つた矢が過た
ず、ハツシとその弓に當る、覺範、怒つて三尺九寸の大太刀を抜き放ちさらばとばかり銳雪を蹴立
て、馳せ付けて來た。忠信も亦弓を捨て、太刀を抜いて身構ふ。龍虎が雪を蹴り、勢ひ鉛く切り結
ぶ樣は壯觀こも壯觀である。後は數尋の懸崖である、いざ敵を誘はんとばかり、忠信、際を見てヒ
ラリと懸崖を飛び下りると、誘はれた覺範が、得たりと後より續いて飛び下りた。鎧袖、樹木に
かゝりて、よろ〳〵とするのを際さず、友成の太刀が眞ッ向から覺範を割つてしまつた。

『義經、横川覺範の首を打ち取つたるぞ』

と、叫んで投げ捨てる勢ひに恐れて、敵兵も、容易くは寄りつけない。忠信も今は從者悉く討たれ
て唯一人、馳せて山深く登れば、衆徒之れを追ふて鬨の聲を擧げつゝ、迫つて來た。忠信、飢えと奮
鬪に躰は綿のやうだ。

『法師共、よく聞け、誠の判官は疾く落ちさせ給ふたのだ、吾れは之れ　佐藤四郎兵衛尉忠信だ、
最早運盡き、切腹する、首を取つて鎌倉殿の見參に入れよ』

と、叫ぶかと見る間に、左の脇腹に太刀を突き立て、崖下へ身を躍らせてしまつた。
が、忠信は死なかつた、敵がマンマと此の謀計に引懸つて引き返した際に乘じ、京都へと遁れ歸つ
たのである。忠信が割腹したのは京都、糟谷有季の卒ゆる二百餘騎の包圍を受けてからであつた。

△友成　は世に聞えた名匠　ある、一條天皇の御宇父實成と共に召出され御劍を打つといふ、源義
經の太刀、君馬藏　能登守教經の太刀　友成の作だといふ。永延頃

△造込恰好裝飾　姿上品にして太刀多く、小脇差、短刀は少なく、小太刀は見ることあり、腰反り
にして、ふんばり强く反り高く、身巾細く、鎬高く、鎬巾狹　庵淺く、折りに丸棟も見る、小切先
にして尋常なり、時代渥くるれば重ね厚く、切先延びる物あり、棒樋二筋樋あり淺くして樋巾廣
し　素劍を彫ることあり、約やかにして丈け短し

△刄文、働き　小亂逆心を持ち又は直刄小亂足入りたるものなく、小沸最も上品にして約やかにつ
き、包深く足へり刄中働き申分なし、燒出し最も細く、沸つき美しく物打ちのあたり殊更足烈しく
入り非凡の働き現はる、小灣、小丁子交るもあり、總て小模樣にして十二分の働きあり、京都とも
見違ふべき品位高き物にして最も賞讃すべき出來なり

△鋩子　小丸、大丸小模樣なる亂込、沸崩心にして荒き氣味になり、上品にして包深く返り淺し

△地鐵、肌　最もよく錬れて大模樣にして豊かなり、天杢目に柾心あり、地沸つき働き申分なく京

物とも見違ふべし
△中心　最も上品にして肉あり、區高く長くして先細り、淺き栗尻多し、雉子股も見る、棟角にして丸肉あり、ヤスリ切、筋違太刀銘多く、備前國友成とも、友成とも切る

靜御前の薙刀

三條小鍛治宗近の作

吉野山で義經と別れた靜はどうなつたか。山中で捕へられて六波羅へと、そして母の磯禪師と共に鎌倉へ送られたのであつた。

『九郎の行方を知らぬことはあるまい』

と賴朝に訊問されても

『吉野で別れた切り』

と、答へるより外はなかつた。幾度も〳〵の訊問に對して靜は何時も同じ答へであつた。

『身二つになる迄は』

と、言つてそのまゝ鎌倉に留め置かれて還されず、憂き日を送る靜であつた。

賴朝の夫人政子、靜は舞の名手と聞いて、それを見ばやと望む、賴朝、さらばとあつて、靜に命ずると

『妾は賤しき身ではあるが今は伊豫殿に仕へる身である』

健氣にも、かう言つて賴朝の命に應じない。

その後、賴朝夫婦、鶴岡八幡へ參詣の事があつた。その時又も靜に舞を命じたが

『伊豫殿に別れ參らせて悲しみに堪へ難い、どうして舞など思ひも寄らず』

と、又突つ放す。が、賴朝は、此の日は許さなかつたと、

『折角の仰ではあるが、今はよき樂黨を連れてゐないので』

遁辭を構へたが賴朝は

『鼓は工藤祐經、銅拍子は畠山重忠』

と命令する、もう靜も遁るに言葉がなくなつてしまつた。仕方なく、賴朝の命に從ふて

よし野山峰の白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀しき

更に、

しづやしづ、しづの小田卷繰の返し昔を今になす由もがな

歌は金鈴の響き、舞は天人の姿、滿堂醉へるが如き有さまであつた。

『八幡宮の神前で舞樂を奏するからは、關東の萬歳を祝ふべきに、謀叛人の九郎を慕ふ事の舞樂は不埒極まるものだ』

頼朝、怫然として怒り

『奇怪な女奴、斬り捨てゝしまへ』

といふ。政子は流石女である。靜の身の上に一掬同情の涙を持つてゐた。

『君が石橋山の敗戰に、行方も知れず遁れられた時妾の日夜の悲歎はさればかりであつたであらう、靜の心中も察することが出來る伊豫殿の多年の恩義を忘れない靜である』

政子の取りなしに、頼朝も漸く色を直し、卯の花襲ねの衣を靜に與へるのであつた。靜の命、危く救はる。斯くて、靜の臨月が迫つて來た。

『女子ならばその儘取らするか、男子ならば助くることは出來ない』

頼朝の命であつた。靜の母磯禪師、日夜、神佛に

『あはれ、女子を生ませ給へ』

と、祈願する、やがて間もなく月滿ちて產の紐を解いたが、禪師、胸を轟かせつゝ見て

『アッ』と、色を失つてしまつた。

義經には別れ、今又愛兒をさへ奪はる、最早望みのない靜であつた。京都に歸へると、天龍寺の下に庵を結んで髪をおろし、朝夕念佛の外何もしなかつたが居ること一年で、遂に果敢なく逝いてしまつた。

此の靜の持つてゐる薙刀がある、三條小鍛治宗近の作だ。之れは、後に德川家の寶物になつてしまつた。

新田義貞の鬼丸

粟田口國綱作の刀

北條泰時が、粟田口國綱を鎌倉へ呼び下して鍛へさせた名刀、世に鬼丸と呼ばるゝ稀代の業物だ。國綱は、後鳥羽天皇の御番鍛治で、天皇隱岐の國へ蒙塵ましました時に、御伴をした六人の鍛治の一人である。その國綱が隱岐にあるの時、鎌倉から呼び寄せの使者が來たが、斷はつて行かなかつた。泰時も國綱の忠義を感じてそのまゝとなつてゐたが、天皇崩御ましまし、一周忌の御佛事も無事に濟ませられ給ふたので、國綱は始めて泰時の召しに應じて鎌倉へ行つたのである。

その時、泰時の命で幾振りかの太刀を鍛ふた中から最も出來のよいものを差料にした。それが鬼丸である。鬼丸といふのは泰時が病氣で寢てゐると鬼が現はれて惱ます、泰時大に苦悶してゐると枕

元に立て掛けてあつた國綱の太刀が倒れて火鉢の足にある鬼の面を切り落した。泰時の病氣忽焉として全癒したといふお伽噺的の物語りがあるが、それ以來此の太刀を鬼丸と名づけて北條家の重器となつてゐた。

△國綱　は藤原姓、粟田口國家の六子で、隱岐御番鍛冶、建仁頃の刀匠である

△造込恰好　太刀多くして短刀少なく稀に小太刀も小脇差も見る京反りにして姿細きも比較的身巾を持つ、細きものは反り高く、切先詰り、身巾を持つものは、反り淺き心になり、切先延び心地になる、鎬巾廣く、鎬高く彫物あるは稀なり

△刃文、働き　大丁子、中丁子、重花丁子、亂に丁子、交り等多く荒き心に沸澤山につき匂深く沸匂凝りて、足入り京物としては幾分か締り心あれども品位良し。此の作。大模樣の腰刃多く腰刃の所に沸最も荒く、多く稻妻、金筋多し、砂流交り上品なり。廣直刃も見る。稀に小太刀、小脇差には細直刃ありて沸最も荒く多くつき必ず沸匂凝りて足入り総て刃中に板目の刃肌交る。

△鋩子　沸崩れ、火焔又は丁子足り、或は燒詰め、大丸にして沸最も荒くつき上品なり

△地鐵、肌　梨子地にして大板目交り荒き心の沸つき地けい其他の働きを見せる。

△中心　長くして反り心あり雉子股を好み平に肉あり、區高く、先細くして粟尻、棟は角にして小肉あり、鑢は切り、勝手下り。太刀銘多し。

と、日本刀にある。

北條重家器の此の鬼丸國綱、戰ひ敗れた北條高時が、東勝寺で自害をした時に、子時行に傳へた。建武二年八月、時行、官軍と戰ふて利あらず、遂に、此の鬼丸は新田義貞の手に入つたのである。燈明寺。は越前國吉田郡中藤島村にある大字である。九頭龍川を隔てゝ足羽郡河合村と相對するの地で、延元三年閏七月新田義貞は河合村を陣して黑丸城を攻めてゐたが燈明寺畷で流矢に中つて戰死した。七月七日、此の日の戰鬪一進一退で、日將に沒せんとして、城未だ落ちず、といふ有樣であつた、義貞、切齒、畷を傳ふて藤島城へ向つた。附き從ふもの僅に五十騎である。此の時、賊將細川孝基、三百騎を從へて、黑丸城から馳せ來るに出逢ふ

スワ、敵ぞ

と、双方が挑みかゝる。孝基の兵、皆楯を突き立てゝ、一齊に射かけるのに義貞の兵此の時楯を持たず、義貞の前に立ち塞がつて矢を防ぐのであつた、義貞危險。中野宗昌といふのが馳せ寄つて

千金の御身だ、早く早く退かせられ

といふのを

多くの士を失ひながら獨りのがれることが出來やうか

と、言ひ樣馬に鞭をくれて敵陣へ衝き入らうとした。一齊に飛び來る五本の矢が、馬の腹部にバラ

くと中つてどうと田の中へ斃れた。

馬が、どうと倒れると、義貞は馬から飛び退いて、ガバと立ち上つてゐた、その刹那、ヒュッと空を切つて飛び來つた白箭が眉間へグンザと突ッ立つた。グラ〳〵、と目が眩んだが突嗟に考へたことは、もう駄目だといふことであつた。心氣がボウとなるのを必死の氣を激まして立ち直ると、すらりと拔いた一刀、サット閃くと義貞は自分等の首を搔き切つてゐた。矢が中つて、首を搔き切る迄、ほんの瞬時の出來事であつた。從ふ將士共はどうするいとまもなかつた、

アッと、愕いて少時は呆然としてゐたが馳せ寄ると義貞の死躰を取り卷いて吾れも〳〵と自刄した賊、氏家重國といふのが此の有樣を見ると畔を傳ふて走つて來た。義貞の首を太刀先に突刺し、鎧と太刀とを分捕つて黑丸城へと馳せ戻つて來た。

『新田殿の一族かと思ひます、いづれは大將株のもの、雜輩とは見えませぬ』。

といふ。足利高經、これを聞いて

『オヽ、新田左中將の顏に似てゐるぞ、義貞なら左の眉の上に確かに矢庇がある筈ぢや』

自ら櫛を取つて髮を搔きあげ、泥と血とを洗ひ落すと、あり〳〵と矢庇の痕、正しく新田左中將義貞の首だ。

分捕つた太刀を見れば銀ハバキに、金字で『鬼丸』の銘入り。もう疑ふ餘地はなかつた。日は暮れたが義貞の消息がない、弟義助、兄を所々に探し求めたが、漸く判つたのは兄の戰死であつた、潸然として、涙鎧の袖をうるほす。

義貞の首級が京師に到着すると、手を打つて悅んだのは足利尊氏である。

『儂が、多年の辛苦も、此の首一つを見たい爲であつた』

なと言つてゐる。

命じて獄門に梟す。

洛中の男女、義貞に同情するものは、首級を見てさめ〴〵と泣いた。

『武運盡きては是非もないことである』

と秘々語り合ふのであつた。中に、一人の氣高き上臈、築地の蔭に泣き崩れるのがあつた、義貞との契り深く、當時洛中に艷名かくれなき匂富内侍であつた。

内侍は無常を感じて丈けなす髮を切り、墨染の衣をまとひ嵯峨の奥、往生院のほとりに住みて世を送つたといふことは、知られた物語りである。

國綱の此の鬼丸は、かくて足利家の重寶となつてゐたが、義昭の時代になつて、太閤へ進上した。

太閤は義昭より進上の他の二刀と共に自分には所持せず、京都の本阿彌光德へ預けてあつた、慶長十九年、大阪陣の後、本阿彌家より德川家康へ差出したところ

『太閤、何か考ふるところがあつて、其方へ預けてあつた太刀である、そのまゝ預けて置く』
と言つて家康も所持しなかつた。後、八代將軍吉宗、一度これを取り寄せ一覽したが又本阿彌へ預け、維新の後に、御物となつたものであるといふ。長さ二尺五寸九分、乱刄で二字銘、柄の長さが七寸六分もあるといふのである。

伊達正宗の燭臺切り

備前住光忠の名刀

水戸の德川頼房が三代將軍家光の御機嫌伺ひに伺候した。打ち寛いた家光は刀劍の話を持ち出して
『陸奥の守が光忠を差して參つたなら所望して見いあの光忠は珍らしいよいものだ』
と、頼房に言つた、それから間もなく頼房は伊達政宗に出遇つた。
『陸奥ごの、御差料の光忠ナ、あれは將軍樣、ワシへ御媒酌なさるけな、嫁入りさせて欲しいものだ』
と、戯れた。
すると、政宗は、アハア……と笑つて
『秘藏の子だが上樣御媒人ではいやとは申されまいでな』
その儘秘藏の備前光忠を進上した。
政宗は、秀吉が小田原征伐の時、召されたが容易に行かうとしなかつた。滿々たる野心を抱いて日和見をしてゐたのである。それでも家康やその他秀吉の周圍の者へは常に贈物を怠たらぬだけの心掛けをしてゐた。中々喰へぬ男であつた、遂に小田原攻めの秀吉の許へ伺候したがその時には死を覺悟して死裝束であつたといふ。後秀吉が伏見の城を造營中、大阪から度々伏見へ行くのに、政宗は一艘の御座船を造つて獻上した。
『陸奥奴。又味をやるナ』
と秀吉は心中で思つたであらうが非常に喜んで手づから光忠の刀を與へた。
其の翌日であつた、秀吉が伏見の城の普請場へ行つて工事を見てゐるところへ、政宗がお目見得に來た。すると秀吉は小姓共へ
『昨日陸奥に刀を盗まれたぞ、あの刀を取り戻せ』
と、大聲で呼びかけた、バラ〳〵と四五人の小姓達ちが政宗を捕へやうとするのを突きのけ〳〵半町ばかりも逃げ出した。
『ヤア、ヤア盗人ではあるが許すぞ〳〵』

と、又秀吉が大聲で呼んだ政宗苦笑しながら御前へ出た、と伊達家の記錄に殘つてゐるさうである

秀吉の半面を窺ふ好材料で面白いと思ふ。

政宗この太閤拜領の備前光忠を秘藏して放さなかつた。ある時、小姓に不行跡のことがあつて政宗の耳に入つた、懇々と不心得を諭したが肯かず、政宗も怒つて再び召し寄せ意見をすると、返答が氣に入らない

「おのれ」

拔き打ちに光忠で切りつけた、小姓は眞ッ二つなつて倒れたが切先餘つて燭台をスパと切つて落した。この燭台といふのか鐵製であつた。「よい切れ味」といふので燭台切光忠の名がついたのである

伊達政宗、奥州の風雲兒だけあつて流石に名刀が多かつた。

政宗、江戸城へ登城した時に藤堂高虎とかに

「貴公の差してゐるのは定めて正宗であらうナ」

と言はれ、利かぬ氣の政宗だから

「仰せの通りだ」

と答へた。それから屋敷へ戻ると、實は今日殿中で斯々の始末だ、今後再び問はれて、拜見仕りたし、なぞ言はれては大恥だ。急いで正宗の刀を脇差にして呉れと家臣に命じ、正宗の刀を摺り上げさせた。といふ話がある。業平朝臣の

くらべこし振分髪もかたすぎぬ君ならずして誰れかあぐべき

の歌に因んでこの正宗に振分髪の名がついた。

◇光忠　一類中最も名人にして長船中興の祖とも云ふべく長船系の頭領とも稱すべし

◇系統時代　近忠子歴仁ごろ

◇造込恰好裝飾　太刀多く刀もあり稀に小太刀も見る小脇差短刀少なし、姿上品にして腰反ふんばり強く折に先反心のものあり重ね厚き心になりて鎬高く鎬巾少しく狹く身巾廣くして平に肉多くつき切先延び又中切先多く小ほり淺く眞の棟も見る。好んで棒樋を彫る上手なり。

◇刄文働き　最刄文に重きを置く人にして頗る上手なり好んで大丁子を燒き丁字の形大小變化多くして燒頭丸き心を持ち烈しく地の内に入り鎬地迄も入る物ありオタマジヤクシの如き形の丁子交る包深く荒き心の沸少しくつく。砂流し風の模樣刄に掛ることあり、金筋稻妻も交る

◇鋩子　乱心多く働き見事にして包深し、小丸も見る

◇地鐵肌　大杢目、折に地沸あるものあり

◇中心　上品に肉付き長く先細く栗尻、雉子股、棟角にして丸肉あり、ヤスリ筋遠、二字銘多し。

長曾我部信親の武勇

戸次川に於ける左文字の刀

長曾部信親が、戸次川で戰死をせずに秦家を嗣いでゐたらどうなつてゐたか、或は關ヶ原で家康に味方をしてゐたらどうなつてゐたか、信親は智勇兼備と言はれてはゐるが、二十二位で死んだのだから、その人物は、元親程には研究されてゐない。秀吉の恩顧を非常に感じてゐた元親だから、信親も或は秀頼の聲がかりで石田三成に味方をしてゐたかも知れぬ。當時、各國の大名はデリケートな動きをしてゐるから、信親の去就なども興味あるものであつたであらう。

天正十四年、信親は秀吉の命で、仙石秀久と共に九州征伐の先陣を承はつて出陣したのである。まだ年少だといふので元親も介添役として出征した。先陣の如何が、軍に多大の影響があるので、秀吉は、信親、秀久に輕舉を戒めて出發さしたのであるけれど、仙石秀久といふ男は案外無策の男と見え、島津義久の軍が、鶴ヶ城の圍みを解いて戸次川を渉り岡山といふのへ退却したのを、勝戰に乘ずる氣になつて、戸次川を渉つて進擊せうとした。元親、信親等が、敵軍に伏兵あるのを說いて『若し敗る、が如き事あらば、大閤の命を如何にせん』と、言つて、自重を勸說したが背かない。三好存保も軍に從ふてあつたが、秀久說に贊成して進擊を勸めた。遂に元親父子も止むなく茲にいよいよ進擊となつたが、果して敵には伏兵があつた。秀久の前軍一千餘騎が、川を半ば渉るころ、砲火が一時にどつと起つてバラ〳〵と浴びせかくる銃彈、人馬諸共川中で全滅だ。之れが敗戰の原因を作つて大敗となつてしまつた。元親、信親も亂軍の中に相別れて生死の程も判らない。元親はしきりに信親を求めたが、遂に逢ふことが出來なかつた。秀久は命からゞ〳〵豐前へ遁れたが、信親は大閤の戒めに叛いたといふ責任感から既に死を決してゐたものだらう。土佐の軍勢へ迫つたのは新納武藏守忠久だ、島津の驍勇　其の勇名は秀吉すらも知つてゐた。が、信親も亦無双の剛勇である。猛烈なる接戰、肉彈戰だ、信親の武者振りは、今日、戸次川を語り、土佐を語る度びに薩摩人り語り草となる位であるから、物凄いものであつたであらう。從ふ面々は皆一騎當千の勇士ばかりである。信親の將細川源左衞門は、槍をもつて武藏守　と渡り合ひ、左腕を突いてあはや武藏守を討ち取らうとするところ迄になつてゐたのを、亂軍のために阻められて、流星光底長蛇を逸したといふのだから、凡その奮戰が想像される。信親も遂に戰死した。年二十二であつた。

信親佩ぶるところの太刀は左文字であつた。敗軍の中にあつて、阿修羅王の荒れたるが如く、此の左文字で當るを幸ひに薙ぎ倒して行つた信親の勇姿は、流石の薩摩隼人をも恐れしめたであらう。後世、秦家を語るもの、この信親の戰死を惜しまぬものはない。

殘兵をまとめて、伊豫に渡つた元親が、信親の屍と遺品とを島津義久に請ふて、其の遺刀の左文字

を見た時に刄が鋸のやうになつてゐたといふのだから、信親奮闘の樣が想像される。

信親の左文字は、信長から賜はつたものである。それには挿話がある。

天正三年、元親は家臣中島可之助を遣はして信長に、長子彌三郎の諱を請はしめた。可之助、安土城で信長に謁見し、問はるゝまゝに主君元親の武功を滔々と述べ立てた。聞いてゐた信長が、

元親は無鳥島の蝙蝠のみと、言つて嘲笑した。可之助、元來が無學である、そんなことを言はれたとて解りさうなことはない。が、可之助には負けず魂がある、即座に

否、蓬來宮のカンテンに御座ります

と、やつた。全くの出まかせだ。今度は信長が面喰つたであらうが、勝氣の大將である、別に不審顔もせず

四方に使して君命を辱めざるは其方のことだ、

元親の人物も凡そは判ると、言つて、彌三郎に信の一字を與へ、信親と命名した。その時に、信親へ太刀と馬とを賜はつた。それが信親戸次川勇戰の左文字である。

福島家勇士の遺刀

田中青山翁の廣光

田中光顯翁所藏の相州廣光作二尺四寸一分。刄紋極めて盛んな美事なる、出來榮えのもの。多分今でも愛藏してゐられるであらうが、この廣光は福島正則の有名な家老吉村又右衞門の佩刀であつた

吉村又右衞門は、福島丹波尾關岩見と併び稱せられた勇士で一萬石の家老であつた、福島正則滅亡の際、城明け渡しにその振舞ひ天晴れだと言つて天下に名を擧げたのであつた、當時、福島家を去つた者は、福島浪人と稱せられ、各大名が爭ふて之れを召し抱へるの風であつた、吉村又右衞門、斯る高名な勇士だから勿論各大名からの交渉が多い、又右衞門召し抱への相談が來ると、

御厚意、辱く存する、が拙者一萬石が一合缺げても御奉公致しませぬと答へた。

泰平の世の中に、又右衞門を一萬石で抱へる大名はなかつた、又右衞門は、手内職をしながら糊口をしのいで日を送つてゐた、貧にゐてもこんな見識の又右衞門であつた、伊勢の桑名の松平越中守がこの話を聞くと

『又右衞門なら一万石でも高くないナ』

と、言つた。越中守忠綱は家康の異父に當る人であつた、其所で又右衞門は早速桑名の松平家へ一

萬石で抱へられることになつたが、桑名へ赴いた時には、實に濃染の羽織一枚と槍一本であつた。

又右衛門が桑名へ召し抱へられたことが段々と知られて行つた、それが知られて行くにつれ、毎日

『それがしは、吉村又右衛門の臣なにかしだ』

と、言つて百五十名の舊臣が又右衛門を慕つて集つて來た、集つて來る家來はそれ〴〵祿を與へて可愛いがつた、

『成程又右衛門が一萬石を要求したのも眞理だ』

と、言つて人々は感心をしたのである、

又右衛門が死ぬる時に

『自分はそれだけの武功があつたればこそ一萬石を頂戴したのだ。何んの武功もない倅にこのまゝ、之れを襲がすことは出來ぬ、一萬石は返上するから、倅には分相應の祿を下されたい』

といふ、それを頑張り通して遂に死亡したので、倅には改めて三千石を賜つたといふことである、

後、有名な白川樂翁の時に吉村又右衛門といふ家老があつた、此の又右衛門の子孫であるといふ、

△廣光　正宗子、九郎次郎、觀應頃、概ね貞宗に似たり、平造の小脇差、短刀多く、先反り、重ね薄く眞の棟多し、彫物上手にし、密なり、刀少けれども出來最勝れたるものを見る、華表反り淺く、身巾廣く、鎬高く棒樋多く廣くして淺し、又棟薄きものを見る。小脇差　短刀に皆燒多く華やかにして山城長谷部と見違ふ物あり、元又細く、中程より上燒巾廣く働き最も盛なり、棟燒き多し、其他の働きは當國上位の物と見ゆ、稀に貞又もあり、鋩子沸崩、小丸多し。短刀は返り最も深し銘は廣の字の頭の點竪に切る。

右の通りで廣光と言へば相當なものである。而も、この廣光の持主が福島正則の勇士吉村又右衛門といふのであるから、歴史的に言つてその價値は中々である。ごういふところから田中米顯翁の手に入つたものかは知らないが、翁は、書畫や刀劍の愛好者であるから、かういふ風なものは中々見逃さない。外にも、翁のことだから尙澤山の名刀があらうと思ふ。

伊賀上野の仇討

荒木又右衛門の金道

寛永十一年十一月七日の午前六時ごろ、伊賀國上野の鍵家ヶ辻。河合甚左工門を一刀のもとに切り捨てた荒木又右衛門は、槍の名人と言はれた櫻井半兵衛に向つてゐた。半兵衛、武右工門のために妨げられて槍持ちから槍を取る暇がない。

『半兵衛、見參』

『ウム、又右衛門か』

又右衛門、青眼に、ピタリと半兵衛の胸元に切先をつけた。伊賀守來金通、二尺七寸。ジリ、ジリと半兵衛を壓迫する。

槍のない半兵衛は、ハンヂキャップをつけられてゐるやうなものだ。又右衛門、豪氣に、すつと進んで、『エイッ。』と、聲が懸ると、半兵衛それを避けたと思つたのに、肩先深く切り下げられてゐた。ドタリと地上に倒れて、苦しそうな呼吸を、又右衛門ジッと眺めてゐると、ピシリと手應へがしたと見る間に、金道が鍔際からポキンと折れて、ガチヤ、と刀身が地を打つて飛んだ。刹那に又右衛門は差添の宇田國宗を拔いてゐた。

半兵衛の若黨市藏といふのが、主人が切られた物凄さに、呆然となつてゐたが、ハッと氣が付くと木刀で殴り付けたのだ。市藏美事に又右衛門の金道を殴り折つたが、夢中で木刀を放り出すと、一目散に逃げてしまつた。藤堂藩の彦坂加兵衛先程より荒木の餘りにも美事な働き振りを見てゐたが

『これをお使ひなされ』

と、無銘の業物を貸し與へたといふ說があるが確でない。が、彦坂加兵衛なる藩士が此の仇討ちの現場へ來合はせてゐたことは實事らしい。

渡邊數馬か、河合又五郎に立ち向つた刀は備前祐定であつたといふことだ。仇討ちが濟むと、奉行の命で、重傷の武右工門を擔がせて又右衛門等は福壽院といふのへ行つた。此所でいろ〳〵の訊問に答へると、又右工門は

『茶漬を一杯所望したい』

と、言つて、それを食ふと、すや〳〵と眠つたといふことである。數馬と孫右工門とは武右工門の介抱をしながら、又右工門の此の落ち付いた剛膽振りに感嘆したそうだ。

此の仇討ちは、討たれた河合又五郎が二十四、討つた渡邊數馬が二十七、荒木又右工門は三十六であつた。又右工門は數馬の姉婿であつたのである、鳥取藩へ引取られて其所で死んでゐるが、藤堂家との奪ひ合ひの關係上、『又右工門は死んだ、』といふ事にしてあつたので墓石の亨年四十歳は當にならぬ、といふ說を立ててゐる者もある。

武士道華やかなりし時代殊に仇討、となると晉に領主の優遇を受けたのみならず大衆の人氣を博したので、仇討ちは大持てであつた。

更にその仇討ちを華やかならしめたものは後世の講談師、浪花節である、挑中軒雲右衛門すら、荒木の此の仇討ちを日本三仇討の一としてゐる、乃ち、一は富士の裾野の曾我兄弟、二は此の伊賀の上野、三は赤穗義士、としてゐるが、それは、講談師が拵へあげた伊賀の水月三十六人斬りに根據を置いてからであらう、大きな仇討ちとしては淨瑠璃坂の仇討が餘程大きい。が、時の劍客荒木又

右工門が三十六人を相手に斬り捲くる事にした方が、英雄的であり、華手である。然し事實は、川合甚左衛門と櫻井半兵衛との二人で、後の五六人は小者であつた。甚左衛門は又五郎の叔父、半兵衛は妹婿、二人とも相當に知られた劍客と槍術家であつたが、又右衛門に意表に出られ、充分な立ち合ひをせずに切られてしまつたのである。

荒木又右衛門といふ人は餘程人物が出來てゐたらしいといふのである。仇討ちが濟んで役人への明答、後始末の具合ひ、なと、その人物を語るに足ると言はれてゐる。

大和荒木村に生れて、柳生重兵衛の門に入り、正木坂の道場で仕込まれ、師より強し、と、いふのも矢張り講談師の拵へごとであるといふ。又右衛門の親は藤堂高虎に仕へてゐたが浪人して後池田家に抱へられ、又右衛門は十二歳の時に姫路へ養子に赴き、後、二十四の時姫路を去つて伊賀國荒木村に住し、その時分柳生の正木坂道場へ通ふたらしい、

偖て、又右衛門の佩刀、折れた伊賀守金道は山城の刀匠で新刀である。餘り上手な刀匠ではない。その折れた金道は今では鳥取市役所にあるさうだ又右衛門も、後で人から「大事の場合不覺千萬な」と言はれたのを、肯定し、「御尤なこと」と、斯かる場合の教へを乞ひに行つたといふ。八幡太郎義家が大江匡房に、「惜しむらくば兵法を知らず、」と言はれ、辭を低くして教へを乞ひに行つたのと軌を一つにしてゐる。

任侠深見重左

愛刀豊後國貞行

明月や來て見よがしの額際

難波の俳人梅翁が、延寶年間江戸へ來て、任侠深見重左衛門を讃美しての一句である。重左衛門は後に剃髪して自休と稱した。俳句も作れば和歌も作る、俳句は梅翁の門に入つてゐた。聊か他の侠客とは異つた侠客であつた。重左衛門の父祖は福島正則に仕へた勇士であつた。主家斷絶後、重左衛門は武術がすぐれてゐたので藤堂大學頭に召し抱へられ高祿を食んでゐたが、當時町奴の仁侠に刺戟を受け、高祿を弊履の如く抛つて侠客の群に投じたといふ變り者であつた。盟友に寺西閑心があつた。之れも武士上りであつた。梅翁の句にもあるやうに、重左衛門の額は有名で、流行唄にまで唄はれた伊達姿であつたといふ。

寛永、正保、慶安、承應の時代は、侠客華やかなりし時代で、又六法旗本組の横行時代でもあつた幡隨院長兵衛と水野十郎左衛門一黨たる所謂白柄組との衝突や、いろ〳〵の事件から町人の侠客に盛名があつた。しかし、重左工門、閑心には、長兵衛のやうな乾見がなかつた。單獨行動であつたが、此の盟友は何事でも相互に助け合つた。重左工衛門等は高祿を食んでゐただけに資産もあつた

らしく、當時流行であつた湯女のゐる風呂屋へよく遊びに行つた。遊ぶと言つても入浴してから湯女を相手とするもので風呂屋は、現在の寄樓か、溫泉宿式のものであつたらしい。風呂屋には、多いのになると、二三十人の湯女がゐたといふことである。

重左工門は、豐後國貞行の大刀を好んで差した。脇差も同じく貞行、朱鞘で堂々たる扮裝であつたと言はれてゐる。貞行は、承應頃の刀匠で、高田一類では最もすぐれたものと言はれる、重左工門とは時代を同じくしてゐるので、多分新身であつたであらう。ある日、重左工門は例の通り馴染みの風呂屋へ行つてゐたが、此所で端なくも酒井雅樂頭の家臣、五、六人と口論となり、遂に互に拔き合つて爭を演じた重左は此の日に限つて例の大刀は差さず脇差ばかりを差して入浴に行つてゐた

「日ごろから生意氣な奴だ。やつ付けてしまへ」

と、いふ事になつたであらう。

「ウヌッ。」と、重左も負けてはゐなかつた。すらりと拔き放つた豐後貞行の脇差、腕に覺えの達人である。

「エイッ。」と氣合が懸つたもんに、早や二人切り倒してゐた。美事な早業であつた。風呂屋内の白刃沙汰である、他の客人も湯女も逃げ散つてゐた。重左の貞行に倒れた酒井の家臣が四人、重左も數ヶ所の重傷を負ふて其の場に斃れた。

急を聞いて閑心が駈け付けて來た時には、酒井の家臣の屍骸は一つもなく運び去られ、重左衛門獨りグタリとなつて死んだかとも思はれた。漸つと息を吹き返したのを勵まして閑心は自宅へ擔ぎ込むと、早速手當をすると共に例の風呂屋の門口へ、喧嘩狀の立札を建て酒井家へ挑戰をしたとの話がある。重左の鬢は、額と共に有名なもので、晩年にはそれが眞ッ白になつて、鬚の自休は、實に好々爺として一生を終つたといふ。

汗血千里の駒

坂本龍馬愛用の吉行

「何者だ」

と、言はれた時に平井誠一は困つてしまつた。相手が士格だとすると、輕格者だと言つて見苦しい侮辱を受けるだらう。サット、三足程すさつて、鯉口は切つたものゝ、默つて斬りかけるやうな卑怯なことはしたくなかつた。萬一さうして自分が斬られた後で輕格だと判つて、それが卑怯な眞似をしたとあつては輕格一統の面目にも關することだ。困つたものだ。と、思つてゐると

「何故、名乘らぬ、俺は山田廣衛だ。さあ、名乘れ」

と、相手はかさにかゝつて攻めつけた。

山田と聞いて平井誠一はます〳〵因惑した。相手が悪いのだ。一家中で劍を取つては五人の數にゐる鬼山田だ。が、それを恐れるのではない。日ごろから輕格者を人間でないやうに思つてゐる此の劍客に、輕格者の平井だと名乘つては彼れはあらゆる嘲罵と侮辱を加はへるであらう。

『何んとかして』

と、思つても突嗟によい思案は浮かばなかつた。

『名乘らぬな、偖ては其の方輕格者だナ』

もう、絶對絶命だと感じた。斬りつけるより外に。と、決心すると、

『何にッ』

と、一聲だけ。後はもう相手へ斬りかゝつてゐた。

雨の大地へ、崩るゝやうに倒れたのは平井誠一だつた。山田の一刀が、美事、肩より袈裟がけに切り倒してしまつたのだ。

劍客山田慶衛が、福井の知人から桃の節句の酒宴に招かれての歸途、井口の西端、福井橋の北方丹中山のだらだら坂へ差しかゝつた時の出來事だ。

折柄雨が降つてゐた。夜に入つて四邊は暗くなつてゐた。傘を前圍ひに、醉つてよい氣嫌に、茶坊主松井繁齊と話しながら來懸るのへ、ばさりと當つた傘と傘。

平井誠一の友人某は、身を翻すと一散に元來し道へと引返して走つてゐた。その後で平井は殺されたのである。

『オイ、繁齊、何處かで灯を借つて來い、何者か面を調べて置かう』

突然の椿事、繁齊は膽を奪はれて立ちすくんでゐた。サッ、と、腰の一刀が閃めいたと思つた瞬間ドサリと人間の倒れる音を聞いたのである。

『アハ……、繁齊、强つかりしろ、腰がぬけたのか……』

それでも繁齊は動けなかつた。山田が

『オイッ』

と、氣合を入れると、漸つと、繁齊は動き出したが、無我夢中であつた。

嘉永年間に起つた井口事件といふのはこんなことであつた。此のことがあつてから半時間と經たないうちに、山田は、平井の兄池田寅之進のために斬られた。繁齊の首は、永福寺前の麥田の中に轉がつてゐたのを翌朝發見された。

山田が斬られたのは、永福寺前の水際で、其所には、物洗ひ場になつてゐる大きな踏み石があつた

山田は、其の踏石へ下りて刀の血を洗つたり、口を嗽いだりしてゐたのを、平井の友人の知らせで

加勢に來た池田のために、後ろから斬りつけられた。

幕末時代に於ける土佐藩の士格、輕格の反目は甚しいものがあつた、否、反目と謂はんよりは、輕格への侮蔑であり、劣等視であつた此井口に於ける山田廣衛の横死に對し、士格側では、下手人たる池田寅之進を私刑に處する積りで引渡しを迫るに對し、輕格側では、何處までも池田を護つて、一戰を辭せぬといふ勢であつた、池田の行爲は、私闘的のものでなく、弟の仇を討つたものだと主張した。輕格側を代表して此の雄辯を揮ひ、敢て讓らぬ急先鋒は坂本龍馬であつた。

然し、此の結末は、遂に池田寅之進の割腹となつて爭闘にはならなつかた。坂崎紫瀾氏はその著汗血千里駒には於いて、池田の割腹の血を坂本龍馬か刀の提げ緒に染めて、その死を空しくしない事を誓つたことより坂本龍馬を描出してゐる。坂本龍馬か、京都で刺客に倒される迄愛用して放さなかつたのは、土佐の刀匠吉行の造つた刀である。

吉行は、吉國の弟で、大和守吉道の門人、姿尋常にして身巾細、約やかなるものも多し、吉國に似たれども總て小模樣にして小沸付く、地鐵細し。こ日本刀にあるが、吉行の刀は、よく切れる、といふので、一時泰平を謳はれた頃には流行らなかつた。幕末の風雲が急を告げることになつて、吉行は、勤王の志士などに愛用され、その切れ味を見せた。

新刀の横綱虎徹

近藤勇と虎徹奇談

虎徹といふと新選組の隊長近藤勇を聯想する。京都三條小橋の旅籠屋池田屋に勤王志士を襲ふの夜久し振りに又虎徹が血を吸ふかと、嘯いた勇の面魂を想像して見ると、一種凄慘な氣がする、此の池田屋の襲撃は、元治元年六月五日の夜であつた、勇の養子周平、當年十五歳の少年も參加してゐる。元祿の大石主税を思つて武者振ひをしたことであらう。池田屋襲撃は、勇が京都生活中の最も花々しいものであつた。

夜の十時ごろ、宿泊人の臨檢だと言つて一隊は池田屋に踏み込んだ、勇は自ら先登に立つた。勇の奮闘は物凄いものがあつた。肥後の宮部鼎藏、松田重助、長州の吉田稔麿、等勤王の志士が、バタ〳〵と倒された。

勇は此の池田屋襲撃の功に依つて、三善長道の刀と五百兩とを褒美して貰つたといふことである。虎徹はよく切れる。と、勇はいふ。しかし、此の刀は、實は、四ッ谷の刀匠で、四ッ谷正宗といはれた清麿作のものであつた。清麿は刀匠ながら勤王の志厚く、非常な慷慨家で、遂に自殺をしたほどの人物であつた。勇が、後に江戸へ歸つた時に、之れを納めた刀屋を呼んで、刀を褒めた上五兩

の祝儀まで與へたといふ話が殘つてゐる。

竹刀を取つては、一向に駄目であつたと言はるる近藤勇も、イザ眞劍となると、頗る强かつたさうである。俠客の國定忠治も此の型の人間であつたと言はれてゐる。術よりも氣を以つて勝つたであらう。之れが本當の劍客かも知れない。本姓は宮川、久二といふもの、三男で、家は鄕士であつた劍を近藤周齊に學んだが、勇敢、剛毅であつた。師周齊が、此の膽略を愛して、兄の家を繼がしめて近藤姓を名乘るやうになつたといはれてゐる。兎に角幕末に於ける華やかな存在であつた。勇の虎徹は僞物であつたが、持ち手が持ち手であつたが爲めに、虎徹の切れ味以上の凄味を見せて、勤王の志士の血を吸つた。

幕末の俠客會津の小鐵も、虎徹を愛用して常に身から放さなかつたと言はれてゐる。

虎徹は越前の人で、福井にゐたころ、藩士から刀を依頼され鍛ひ上げたが、まだ砥にかけぬところへ注文主が來て、それを見るゝ、拙い出來だ、武士の用に立たぬ、と言つたのに憤慨し、その侍をその刀で一刀に斬り伏せ國を逐電して江戸へ來たが、後に水戸公の差料を鍛へ上げて名聲が一時に擧つた新刀の横綱と言はるゝ刀匠である。銘は長曾根興里、長曾根入道虎徹興里、長曾根興里入道虎徹、などに切る

鐵舟と武藏正宗

五郎正宗實在の文獻

西鄕隆盛に會つて來た坂本龍馬に、勝海舟が『どうだ西鄕の人物は。』と、聞くと『大きく叩けば大きく鳴り、小さく叩けば小さく鳴る鐘のやうで、どうも判らぬ』と、答へたといふ話は有名である。その西鄕か、勝海舟に『山岡といふ男は、命も、金も、名もいらぬ人で、誠に困つた男だが、しかし、その始末に困る人でないと天下の大事は語れぬ。』と、初對面の時の印象を語つて、海舟を愉快がらしたといふことである。山岡とは山岡鐵舟のことである。鐵舟は、幕末の劍客として秀でてゐたが、修禪の道にも入り、心鏡を磨いたのであつた。

まだ若い頃の鐵舟であつた。ある夜、上野不忍池のほとりで何者とも判らぬ一人の武士と衝突した

『ヤツ』

氣合がかゝつて鐵舟は腰の刀を拔いてゐた。が、その切先きは相手の武士には屆かなかつた。武士もすらりと、一刀を拔いて構へたがそれは鐵舟の刀に比べると半分程の小刀であつた。鐵舟は、大刀を青眼に構へ、隙あらば得意の突きを與れやうとしたが、相手は悠然として、而も寸分の隙もなかつた。ジリ〳〵と壓迫を感じて、氣魄に壓され

「これはいかぬ」

と、焦慮を感じた時に、強い躰當りを食つて鐵舟は不忍池へ飛び込んだ。が、流石に鐵舟であつた池へ飛び込みながらも、切り付けたら、下から拂ふと構へた。その構へをジッと見てゐた武士は

「エイッ」

氣合を懸けると、切りおろすかと思ひの外、パチン、と刀を鞘に收めて

「もう一修業もすれば物にならうぞ」

と、言ひ捨てゝ悠々と立ち去つた。生れて初めての不覺に鐵舟は、口惜しくて堪らず、池から這ひ上ると、その武士の後を尾けて居つたが、振り返りもせずに歩いて行く武士の躰に一點の隙もなかつた。心中大いに驚いて、尾行を止め、引返したといふ。それ以來、大に發奮して小太刀の工風もした。後年自から無刀流と稱して、竹刀の寸法を縮めたのは之れに原因してゐると言はれてゐる。禪の修業をして、劍禪一味を會得したのも、心膽を第一としたからであらう。

右大臣岩倉具視は、深く鐵舟の人物を愛し、川田甕江に命じて、正宗鍛刀記といふのを撰せしめた之れは、鐵舟の人物と、功績を長く後世に傳へるが爲であつた。鍛刀記の正宗は、二代將軍秀忠が、妃伊大納言賴宜に賜ふたものであるが、賴宜の子、光貞の時代になつて再び將軍家へ献納し、以來、代々將軍家の什寶となつてゐたが、慶喜から德川家達に傳へ維新後、十餘年にして鐵舟に贈られたのを、斯る寶刀は、輔弼の重臣に献ずるのが至當だと言つて、鐵舟より岩倉右大臣に贈つた。宮本武藏が差してゐたもので、武藏正宗と言はるゝ名刀である。

正宗疑問說に對し、岩崎航介氏は、

五郎入道正宗は實在す、といつて、五郎正宗は文献の捜索に依つて其の實在を確定することが出來る。正宗に關する文献中には、室町時代に尊ばれた多くの刀鍛治の名が澤山出て來る、天文五年の舊川狀に、太刀の事を記して

宗近、了戒、鬼神大夫、夷國の上手には、正宗、弘光、伏見、舞草、新藤吾

とある、夷國とは當時京都から關東を東夷と稱して蔑視してゐた言葉であるが、伏見とは何者を指すであらうか、弘光は廣光でないかと思ふ。と、言ひ、更に室町末期の、「奉公覺悟の事。」一條兼良の、「尺素往來」應永二十三年の、「桂川地藏記」洞院公賢の孫素眼法師筆の、「新札往來」等の文献を擧げて、正宗は實在した人物で、既に室町初期からの名工として尊ばれてゐるが、正宗十哲といふ事は一切文献にはない。それから、後世人のいふ、正宗と村正の如きは全く時代の合はない揑造である。と、氏は斷じてゐるのである。

秘傳湯加減物語

四代河内守國助の苦心

河内守國助は、新刀で六代、二代は中河内と稱して最も有名である。初代國助は堀川國廣の弟子で二代は初代に優る、と言はれてゐる。三代國助も亦業物と言はれてゐるが、四代國助、父の家名を繼ぐのに小說よりも奇なる物語りがある。四代國助、幼少のころ父國助が死んで家傳の奥儀を傳へ知ることが出來ぬ、仕方がないので刀劍鍛冶の修業に出で、大阪で、當時有名な小林伊勢守國輝の門人となつた。早く父の名を繼いで天晴れ一人前の刀劍鍛冶となりたい志望に燃えてゐるので一生懸命だ。師の國輝もその熱心を買つて他の門弟達よりも目をかける、かうして國助の腕はグングンと上達して行つたが湯加減は、家の秘傳であるからどうしても教へぬ、鍛錬に就ては、數年の苦心が酬ひられて、どうやら一人前となつたけれど、肝腎の湯加減が判らぬのではどうにもならない國助、それを會得せんものと苦心慘憺、種々工風を凝らしてゐたがどうしても發明されない。

此所迄修業を積んで、大事の湯加減が判らないのでは最早家名を繼ぐことも出來ぬ　寧そ、死んだ方がマシだ

とも考へたりした。

國輝に一人の娘があつた。有名な美人、と言ひたいが實は有名な醜婦で嫁に貰らひ人が一人もない刀劍にかけては、小林伊勢守國輝とも言はるゝ當時の大家ではあるが、娘の、持つて生れた醜くさはどうすることも出來ない。國輝夫婦は、何かにつけて之れが歎きであつた。

「何處どこの誰さんの娘もお嫁に行くそうで」

女房は、涙を湛へて苦痛を國輝に訴へた。ある夜。

「お師匠樣、私、一生のお願ひが御座りまして」

誰れかと見れば國助である

「オ、、一生の願ひとナ、マア這入れ」

國輝は微笑みながら國助を迎へた。國助は、此所で娘を女房に貰ひたい事を申込んだのである。國助は、河内守の名家の跡だ、家柄から言つても恥しくない緣談それに、親の慾目から見ても、貰ひ人のない醜い娘である。國輝夫婦は早迅相談し、喜んで娘を國助、妻はす事にした。

國助夫婦は、師匠の近くに家を持ち、國助は國輝の工場へと通ふた。聟、舅の間柄になつた二人である、國助は、屹度國輝が、湯加減の秘法を教へで呉れるものと信じてゐた、人の貰はぬ娘を女房にしたのも、何んとかして湯加減の傳授を受け家名を興したいが爲めである。國助は、毎日〳〵それを期待して工場に通ふたが、國輝は、少しもそんな氣配がなかつた。一年經つた。二年を經過し

た。國助の心は焦れ切つてゐた。
女房は、顔は醜かつたが國助へは忠實であつた。
『最早、他國へ行つて修業をせう。』
心のうちを聞いた女房は、莞爾として、
『妾に良い考へが』
と、國助に囁いた。國助の面には、見る〳〵生氣が現はれて、始めて朗らかな氣持ちになつた。
その翌日であつた。
國輝は、國助を相手に、他より依頼の一刀を打ち上げて、之れから愈よ湯を渡すといふ時であつた
『大變です〳〵、國助樣、お家樣が急病で絶え入りなされた、早く早くお歸り下さい』
國助の小者がかう言ひ捨てゝ飛び去つた。吃驚した國輝は。
『國助、お前も一所に來い』
と、言ふなり、手桶の水を湯舟へざんぶとばかり打ち込んで國助の家へ走つた。計略見事外れた國助が呆然となつて、後より我家へ歸つて見ると、病氣ごころかケロリとしてゐる我が娘の樣子に、不審顔して之れも呆然となつてゐる國輝の前へ、やがて、國助夫婦が進んで
『湯加減を知りたい爲めの狂言、罪、一命を召さるゝとも』

と、惡びれずに告白した。
『それ程の熱心か。自然の會得を待つてゐたが』
國助、漸く此の秘法を傳授さるの件。芝居では、五郎正宗が村正の腕を切ることになつてゐる。が、實說は國輝と國助の事である。

劍影片々

◇大和義擧で有名な吉村寅太郎の差してゐた刀は水田國金作のものであつたといふ。寅太郎はこの刀で、大阪心齋橋筋の古物屋で主人と問答の揚句、一刀のものに兜を截ち切つたといはれてゐる。
◇田中光顯翁の濱田辰彌が、大和十津川に潛伏中、薩摩の浪士から讓り受けた刀が、安藝國住藤原貞安作であつたが、後中岡愼太郎に從いて長州に赴き、高杉普作に會つた時に、普作に懇望されて遂にそれを贈つた、薩摩から土佐へ、土佐から長州へ、とこの刀が轉じたのも面白い。
◇谷干城秘藏の刀に長光があつた。この長光は文祿年間朝鮮征伐で勇名を轟かせた立花宗茂の持つてゐた名刀であるが、宗茂の臣、風斗といふ勇士が、此の役で、十餘人の敵を一氣に切り捨てたところ、刀が折れたので脇差を拔いて又二三人を切つた。見てゐた宗茂がその勇猛な働き振りに感じ此の長光を風斗に與へた。關ヶ原の役で立花宗茂、石田方に味方して柳川の地を召しあげられたの

で風斗も浪人してゐたが、その時藤堂高虎が、千石で抱へるから長光を呉れろ、といふのを主君拜領の刀だ、一萬石でもイヤだといつて浪人生活を續けてゐるうち、宗茂が舊封柳川の十万石を賜はることになつたので、風斗も主君に面會したその時、宗茂から、長光はどうしたと、問はれたで利慾のためにあれを手離してゐたら、今日の拜顏は出來なかつたであらうと言つたといふ挿話がある刀である。

◇榊原健吉が京都で、土佐の浪士を三人切つたといふ刀は關兼作岸のものであつた

◇曾我部元親の臣、江村親家は小備後と稱し、驍勇無双であつた。この小備後が少年時代に妖怪を斬つた五輪切りといふ刀がある、何んでも化物が出て人を惱ますのでそれを切つたのであるが、翌朝血の滴りをつけて行くと墓山に五輪の塔があつて、それが二つに碎けて血が流れてゐた。それで五輪切りの名があるが、この刀の作者が判らない。

◇武市半平太は土佐勤王黨の首領で、その人物西鄕南洲に優ると劣らないと言はれてゐる。六尺近い痩身の人であつたが、好んで大刀を差した。堀川國廣、津田越前守助廣、なぎ新刀の名刀を差してゐたと言はれてゐる

◇慶應三年十一月十五日、京都河原町の近江屋で刺客に襲はれ、坂本龍馬と共に斃れた中岡愼太郎が、その刺客の一刀を短刀で受けたと言はるゝ、短刀は信國作のものであつた。

◇土佐藩の中老寺村左膳所持の備前兼光、中心に假名でか「ねみつ」とあるもの元の所有者浮田左京介とは、浮田中納秀家の家老で、主家を退散後家康に仕へ、大阪落城の際秀賴の夫人天樹院を火焰の中から救ひ出したといふ坂崎出羽守である。

◇藤並神社に、有名な一豐公夫人の鏡と共に祀られてある相州廣次の刀は、山内一豐が小身であつた時分に功を立てた刀である。

◇一宮の土佐神社には、備前康光と延壽國時の刀が祀られてある。

◇前關白秀次公より武藤長門守拜領之とある備前長義の刀は二尺五分、折り返へし銘になつてゐるが、何んでも宇和島の家老某家にあつたもので、幡多郡中村町の木戸魯吉氏所有になつてゐる。

◇大西正幹氏所藏の肥前國住近江大掾藤原忠廣(肥前の二代と稱するもの)は、谷干城將軍秘藏のものであつて、日本一忠廣と言はるゝ見事なものである。是等は土佐にある刀劍中の由緒あるものだ。

自序に代へて

私は刀劍が好きである。刀劍談が好きである。父が、若い時分に差してゐたといふ刀が、摺り上げの無銘であつたが、關兼元といふ鑑定であつた、度々それを見てゐるうちに刀劍趣味を覺へたのであつた。で、刀劍に關するものは何よりも好んで讀んだ。さうしてゐるうちに、刀劍に關する幾多の興味ある史實などを知つた。しかし、鑑定といふやうなことになると全くの素人で判らないのである。

刀劍に關する講談、浪花節、それも面白いと思ふ。が、史實や物語は更に興味深いものがある。それを集めて何にかへ書けば一つの讀物になるといふ考へから月刊南海へ、「日本刀物語」を連載した。幸に愛讀を受け、二三先輩から是非一まとめにして刊行せよと勸められた。私もその氣になつて、刊行したのが此の日本刀物語りである。かういふ譯で、この日本刀物語は各方面のものを集めたものに過ぎないものであつて、深く私の研究から出發したものではない。唯だ、その史實や物語を究めるために比較的多くの歴史本やその他み漁讀したといふことが、私に取つての研究と言へば言へるであらう。

編著者

昭和十二年六月十日印刷
昭和十二年六月廿日發行

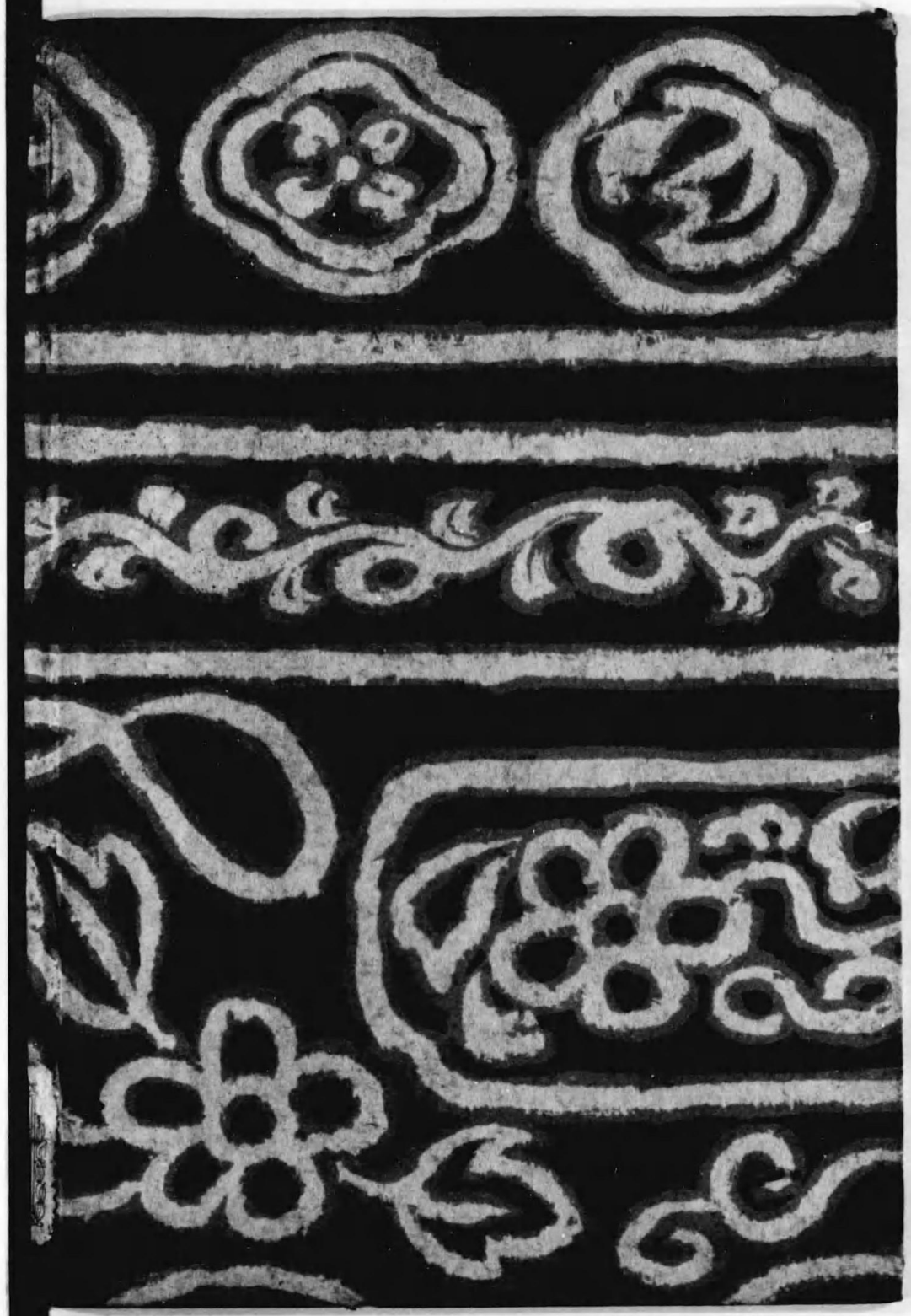
日本刀物語

（定價壹圓五拾錢）

編著兼發行者　高知市本町十二番地　小島沐冠人

發行所　高知市本町十八番地　高知讀賣新聞社

印刷者　高知市本町十二番地　小島榮枝

印刷所　高知市本町十八番地　南海印刷所

終